
魔法少女リリカルなのは ゲッター線に導かれし者

ユニコーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ゲッター線に導かれし者

【Nコード】

N5146L

【作者名】

ユニコーン

【あらすじ】

「お前は元々あの世界の人間ではない」「は!?!」友人に進められてハマったロボットアニメ「ゲッターロボ」色々な作品にクロスオーバー物がある中で、スーパーロボットだけがないと思い、誰か書いてくれないかと呟いたときに異変が起こった・・!（注 作者はゲッターロボはアニメしかみたことがないので、アニメとスパロボとオリジナルの設定を使います

プロローグ (前書き)

初めまして、ユニコーンと申します。

今回、私はたくさんの方の先生方の作品を読んでいくうちに、自分も小説を書きたいと思い、思い切って投稿してみました。

初心者なので、不適切な場面も多々ありますが、色々なアドバイスをもらえるとうれしいです。

それでは、プロローグをどうぞ！

すみません、第一話を少々改変したので、ご報告いたします。

プロローグ

「だっはははははははWW」

俺の名前は黒崎 賢治、今年高校を卒業して専門学校に入学したばかりの19歳だ。

趣味は素朴で、パソコン弄りとプラモ作りと動物と小さい子と遊ぶことぐらいだ。

いやー一人暮らしはいいねー、プラモとかそこら中に飾っても誰も文句言わないし♪

・・・気のせいかな、今ロリコンという言葉が耳に入った気が・・・気のせいだな、うん。

俺は今、「Arcadia」の「とらハ」エリアにある偉大な作品を最初から読んでいた。

この先生が書かれる話はオリジナル要素満載なので見ていてもおもしろい！

だって、スカリエッティがヴィヴィオの可愛さにトリプルアクセルを二連続でするってどうよ？w

フィギュアスケート選手顔負けの大技よ？wいつそのことオリンピックに出てみないかと思ったw

でも今は忙しいのか、なかなか更新されていないんだよねあ

「早く更新されないかなあ・・・続きがメツチャ気になる」

俺はリリカルなのはを二次小説で知っただけで、原作アニメや漫画は読んでないので詳しくはないが、色んな作品を読んでいる中で初心者にもわかるような詳細が書かれていたりしている作品は多いので、ある程度想像できるようになった。容姿や技は公式サイトやyouTubeで確認している

でもあれって普通に魔法じゃなく科学だね・・・カートリッジとかいって葉莢排出してるし・・・

「しかし、ガンダムとかFateとか色んなクロスオーバー作品とかはあるけど、スーパーロボットだけのクロスオーバーって見たことないな」

そう、色々な作品のなかでゼオライマーとガオガイガー以外のスーパーロボットをクロスした作品は今だ見たことがない。検索をかけてみても違う作品しか出てこなかった。

「俺的には真・ゲッターロボのクロスオーバーかオリジナルが読みたいな・・・」

真・ゲッターロボの存在を知ったのは中学1年の時、友人がしつこく「新ゲッターを見ろ！見るんだ！いや見てください！お前以外にロボ好きはいないんだ！！」と涙を流しながらDVDを押し付けて来たので仕方なく見てみたら

「なにこのアニメ・・・3機の戦闘機が合体してロボットになると

か男のロマンまっしぐらでしょ！しかも三種類あるとかマジかってええだろうよ！！」

と感動してしまい、全話見てしまった。最終話に出てきたゲッターエンペラーのデカさにはマジでびっくりした・・・その後、他にゲッター関連のアニメはないかとネットで探していたら、「真ゲッターロボ 世界最後の日」の公式サイトを見つけた。

作品紹介の中に真ドラゴンがいるのを発見したので、気になってyouTubeで見たら

「ストナーサンシャインを軽々と跳ね返す衛星をゲッタービーム一撃で破壊って・・・しかもバカでけえ」(汗)

とびっくりしてしまった。手のひらに大型バス2機ぐらいの大きさの戦闘機を乗せたのにまだまだスペースが開いてるってデカ過ぎでしょう・・・その真ドラゴンを丸呑みするぐらいデカイインベーターがいるのが更にすごくて怖いんだけどなあ・・・

「まあ・・・リリなのの世界にインベーターがやって来たら管理局の闇依然の問題になるわな・・・ゲッタービームを弾く星型のインベーターがいるんだから、アルカンシェルも弾かれて終わりだろうなあ(汗)」

それにゲッター線の意味がいまだによくわかんないんだよなあ、wikiで調べても詳細書かれてないし。

「おっと、そろそろ寝ないと明日のバイトに響くな」

あれこれ考えてる内に時間が押してきたので寝ることにした。
だれか真・ゲッターとりりなのクロス作品作ってくれないかな
あと思ったその時

『やっと・・・』

「ん？」

気のせいだろうか、なぜかゲッター線に取り込まれた「巴 武蔵」
の声が聞こえた気がした。

「・・・二次小説読み過ぎてついに幻聴まで聞こえてきたか？・・・
やべえな・・・」

そう呟いた直後、部屋に飾ってあった超合金の真・ゲッター1が
輝きだした。

「な、なんだなんだ！？なにが起こった！？」

そして真・ゲッター1は輝きながら俺の目の前まで浮いてきて。

『やっと時が来た・・・』

「はい！？なんですと！？」

そして、真・ゲッター1は更に強く輝きだし、俺はその光に包み込まれていく。

「ちょおおおおお！？なんだなんだああああああ！？のおおおお
おおおおおおおおお！！？」

そして俺はその光に包み込まれていくうちに、意識を失った・・・

プロローグ (後書き)

いかがだったでしょうか・・・？ (汗

まだまだ表現が硬いですが、これから勉強していきますのでよろしくお願いします！

感想とアドバイスをお待ちしております！

プロローグ ? (前書き)

..... 文才がないのが、悔しいです.....

プロローグ？

(ぬおお・・・なんだ？ いったい、何が起こったんだ・・・？)

俺は確か、真・ゲッター1の超合金の光に巻き込まれて意識を失ったはずなんだが・・・おいおい、身体が浮いてるぞ・・・無重力なんて初めて経験したぜ。

ていうか、俺目開いてるよな？なのに真っ暗で何にも見えねえぞ？無重力空間って真っ暗なのか？

『待っていたぞ、黒崎 賢治』

(!?)

真っ暗な無重力のなか、何か見えないかと辺りを見回していると
きに突然、頭の中に声が響いて聞こえてきた。

(おいおい、どうなってんだよ!?!?こんな感覚初めてだぞ!?!?くそ
っ、誰だ!?!?何処のどいつだ!?!?)

直後、俺の周りから緑色の霧が発生し、俺の身体を包んできた。

（おいおいおいおい！なにがどうなってんだよおお！？）

そしてその緑色の霧が俺を完全に包んだ時、突然頭に膨大な情報が流れ込んできた。

（うおっ！？ なっなんだこの記憶は・・・な！？）

その流れてくる情報の内容は、とある研究のデータとその過程と目的と結果。そして・・・

（なっ・・・なんで、真・ゲッターロボの情報が・・・！？それに、ゲッター線の情報まで流れこんできやがる！まさか・・・この緑色の霧は！？）

『黒崎 賢治よ』

（！？）

俺がこの緑色に輝く霧の正体に思いついた時、あの時の声が聞こえてきた。

すると目の前にユラユラと緑色に輝く霧に黒い影が現れた

『お前には本来いるはずだった世界に戻り、その世界の災厄を滅ぼしてもらおう。これはゲッター線が定めし事。否定することはできない』

「はあっ！？おい、ふざけてんじゃねえ！何そんな勝手なこと抜かしてやんだ！元の世界ってなんだ！？俺の今までの生活を否定する権利が誰にあるってんだ！！？」

『・・・お前は本来、お前のいた世界で誕生することはなかった。しかし、お前が生を受けるはずの世界で災厄が生じ、お前の魂は今までの世界に飛ばされた』

そんな・・・俺は本来いるはずのない人間ということなのか・・・

「そんなことって・・・っ」

『お前を探し当て、連れ戻そうとしても時が経ち過ぎていた・・・

だから、お前が分身できる年齢に達するまで待っていた。そして、お前を元の世界に連れ戻す時を、ずっと待っていた・・・』

「・・・一つだけ聞かせろ、俺がいなくなることで、俺の家族や友達はどうなるんだ？」

そう、俺が気になってるのは俺がいなくなることにより、今まで一緒だった家族や友達に何らかの影響がないかが心配だった。

『心配は無用だ。お前の分身をその世界に残してある。いくら元の世界に戻すとはいえ、お前をそのまま連れて行けば、その世界は崩壊してしまう。それを避けるが為にお前の分身を残してきた』

・・・そっか、俺の分身がいるっていうなら、大丈夫だよな・・・
・今まで、ありがとうな、母ちゃん、お姉、そして・・・みんな・・・

『だが、お前をそのまま連れ戻したとしても、生活はできないだろう・・・。お詫びとして、戸籍云々を全てこちらで済ませておく』

・
・
・
・
・
・
・
ん？

「いやいや、ちょっと待て。ゲッター線って確か、未知なるエネルギーだよな？ そんなことまでできるわけ？？」

俺の頭に流れてきたゲッター線の情報には確か、ロボットを動かしたり、人類を進化させる為のまだまだ未知なるエネルギーと記されてるんだが・・・

『ふっ、そんなもの容易いことだ。それに、お前の生活を滅茶苦茶に崩してしまったんだ。それぐらいはさせてくれ。そして、これはお前の本来の持ち物だ』

ゲッター線がそう言った後、緑色の霧が俺の身体に吸収されていくと同時に、身体の中に何かが構築されていくのを感じる

「こ、これはいったい・・・？」

『お前がその世界に戻ればわかるだろう・・・では、そろそろ時間だ。』

突如として、俺の後ろに光の扉が開いたと同時に吸い込まれ始めた。

「なっ！？おいしいiiii！この場面は二次小説のお約束かいいiiiiiiii！」

そして光の扉は賢治を吸い込み、扉を閉じた。

プロローグ ? (後書き)

??? 『・・・よかったの?』

??? 『ん?』

??? 『あの子の本当の過去のこと・・・知らせなくてよかったの?』

??? 『・・・今はまだだめだ。身体がもたん。時が経つに連れて徐々にゲッター線が記憶を与えていくようだ。』

??? 『・・・そう。なら信じましょう。彼らを・・・そして、未来を』

第一話 新世界到着早々のトラブル（前書き）

なんとか投稿できました・・・

意外と到着した場面って難しいですね（汗

第一話 新世界到着早々のトラブル

賢治「んっ……ここは？」

俺は日差しの眩しさに目を覚まし、辺りを見回した。
どうやら俺は何処かの公園のベンチで横になっているようだ。

賢治「……そっか、俺はこの世界に連れ戻されたんだっけか・
・」

もう、過ぎたもんはしょうがない……それならこの世界で命一杯生きよう！

取り合えずは現状確認といきますかな。えーっと、俺は今何処にいるんだ？……ていうかこの雰囲気は……日本か？

「ぐっ!？」

最初の疑問を浮かべていると、突然の頭痛に思わず悲鳴を上げてしまったが、その頭痛から頭に情報が流れてきた。

今流れてきた情報によると、ここは太陽系第三惑星地球、日本の海鳴市らしい……

どっかで聞いた事あるのは気のせいだろうか（汗

まあ、気を取り直して持ち物の確認といこう！

えーっと、まず出てきたのは印鑑か・・・大理石でできてるよ（汗
新居のカードキーに携帯電話・・・iphone? この世界に
softbankあるの?

次にパスポートに通帳が5冊・・・ん? 5冊?

ちょっと中身が気になって開いてみたら・・・5冊ともゼロがギツ
シリ詰まっていた。

ロト○何回当てりゃ手に入る額だよ、税金納めたのか疑問だぜ（汗
んでお次は財布っと。中身は・・・ひい、ふう、みい、・・・
30万・・・しかも新札（汗
そして、保険証にクレジットカード一枚・・・ブラックか（汗

・・・気を取り直して、免許証が数枚・・・数枚? 俺原付しか
持っていないはずだけどなあ。

えーっとなにになに?

大型自動二輪
大型自動四輪
特殊車両
調理師免許
河豚調理師免許
フォークリフト
パワーショベル
クレーンオペレーター
危険物取り扱い
薬剤師免許
医師免許

一級建築士
獣医師

・・・おいおい、どんだけ資格持ってたんだよ（汗
しかも実際扱ってみようと思うとちゃんと知識が出てくる・・・
はあ、今日はとことん汗を掻く日だなあ）（遠くを見る眼）

・・・とりあえず、ゲッター線、やりすぎだ

よし、取り合えず確認は終わった。
ほんじゃまあ、さっき流れてきた情報に俺の新居の住所があった

けど、今まだ昼間だし、ブラブラしながら行ってみるとするか。

そう思い、俺が公園の出口を探して歩いていると、

??? 「いや！何するのよ！離しなさいよ！！」

??? 「うるせえ！とつとと乗りやがれ！！」

??? 「兄貴！はやくしねえと誰か来るぞ！？」

何だか物騒な会話？が聞こえてきた。

声のほうに向かってみると、妙な男三人組がワゴン車に大学生ぐ
らいの女性を無理矢理乗せようとしていた。

って思いつきり誘拐しようとしてる場面じゃねえかよ！！
新世界に到着早々トラブルに遭遇しちゃったよ！！？

・・・助けるつきやないよね？うん、とりあえず。

ドドドドドドドド！ ダッ！！

賢治「いい年扱いた大人が三人揃って何しとるんじゃボケがあああああ！！！！」

男A「何っ！？ぶふえああああああああ！！？」

俺は今まさに誘拐を実行しようとしてる3人組のうちのリーダー格にジャンピングドロップキックを顔面に食らわせた。

その男はきりもみ回転をしながらゴミ箱に向かって飛んでいった。
おお、見事頭から突っ込んだぜ！！（笑）

男B「兄貴！？」

男C「てめー何もんだ！！」

賢治「てめえら下種に名乗るわけねえだろうがボケ！」

男C「あ”あ”！？調子乗ってんじゃねえぞガキが！！」

男Bは突然現れた俺に吹き飛ばされた男Aの安否に気が向き、男Cは割り込んできた俺に腹を立て、殴りかかってきた。

しかし、男Cのパンチは俺から見て全然遅く感じた。
てか・・・さっきの蹴りで疑問に思ったけど俺こんなにスペック高かったっけ？ゲッター線の影響か？

まあ、避けようと思えば避けれたけど、自分の今のスペックを確かめるために、男Cの拳を思いっきり殴り返してみた。

バキボキボキボキッ!!

賢治「・・・・・・・・うそん？」

女性「・・・・・・・・え？」

男C「なっ・・・・・・・・がつ！がああああああああああ！!!？」

俺が思いっきり殴り返した男Cの右腕が肩までぺしゃんこになってしまった。

・・・おいおい、俺のスペックやべえじゃんよ。相手の腕リアル18禁になったぜ・・・（汗）

男C「腕がああ！？俺の、俺の腕があああああ！？」

男Cは錯乱のあまり、ムス○ネタに走っていた。
んゝ、どうしよう（汗）
まあ、誘拐しようとしていたから、ボコしとくか。

賢治「さあ、お前達の罪を数えろ！Ya――――ha――――
――――！！！」

暫くお待ちください。。。。

賢治「ふう、すっきりしたぜ♪」

男Cを気絶させた後、すぐそこで腰抜かしてた男Bを発見したので関節の全てを壊しといた。

序にそいつらの車も走れないようにハンドルをぶっ壊しておいた。今のスペック馬鹿高えなおい。

女性「あ・・・あの」

ん？ああ、さっき誘拐されそうになった・・・あれ？どっかで見たことあるような・・・

女性「どうも、ありがとうございます。おかげ様で助かりました。」

賢治「ん？ああ、気にするな。アンタみたいな美人さんを誘拐しようとした下種にムカついただけだから。」

女性「び、美人？／／／／」

あら？赤くなっちゃったよ。ていうか、今のセリフで赤くなるって、どんだけ初心なのよあなた？

??? 「忍お嬢様ーーーー!!」

ん? うお!? あれってメイドか!?

やべ、リアルメイド初めてみたぜ! . . . でもあのメイドも
やっぱ見覚えあるなあ . . .

女性 「あつノエル!!」

ノエル? あのメイドの名前か . . . ん、やっぱ聞き覚えある。
それに忍って名前も . . . でも、なんか説明が面倒臭いから、さっ
さとトンズラしますかな?

賢治 「じゃあ、後はよろしくね . . . !!」

忍 「あ、待って!!」

俺は女性の声に答えず、公園を走り去った。

女性 s i d e

ノエル「忍お嬢様、ご無事ですか!？」

ノエルは私の危機を察してか、連絡もしていないのに駆けつけて来てくれた。

忍「ええ、大丈夫よ。彼が助けてくれたから」

私は彼が走り去っていった先を見ながらノエルに現状を話した。

ノエル「ご無事でなによりです。っ!？こ、これはいったい!？」

忍「これは彼が一人でしたことよ。私は何もしてないわ。」

ノエルは私を誘拐しようとした男達の状況を見て驚いている。

当たり前といえばそうね、この惨状を一人で起こしたのだから。

確かに、腕を肩まで殴って潰したり、飛び蹴りであそこまで人を吹き飛ばしたり、関節を簡単に破壊なんてまず一般人の力ではできない。下手したら、夜の一族よりも強いかもしれない。

でも、彼は殴り返して相手の肩まで潰した時、自分も驚いていた・・・どうということ？

ノエル「しかし・・・彼は何者ですか？とても人間が出来ることではないのですが・・・」

忍「まあ、この町にいる限り、又会えるでしょう。それも、意外と早くに・・・」

ノエル「は、はあ・・・」

忍「さ、ノエル。この三人組を片付けてさっさと帰りましょ？」

ノエル「かしこまりました。忍お嬢様」

第一話 新世界到着早々のトラブル（後書き）

いかがだったでしょうか。

思わずネタを使ってしまったW

感想とアドバイスをお待ちしております！

第二話 魔王たちとのファーストコンタクト（前書き）

すみません、ネタはあるのですが文章に出来ない作者です・・・

オリジナルって、案外難しいですね・・・

第二話 魔王たちとのファーストコンタクト

賢治「ふう、ようやく一息つけるぜ・・・」

俺は今、海鳴市に一番美味しい珈琲とシュークリームを出す店「翠屋」に向かっている。

店の名前を聞いた時にようやく合点がいった。ここはリリカルなのはの世界だ。

その時にうっかり「ワッオ、リリカルマジカル」と言ってしまったのはご愛嬌。

自分がもともという世界がアニメの・・・しかも魔王のいる世界って(汗

俺この世界がアニメで放映されてるからある程度未来がわかってるんだよなあ・・・

でも災いってことは違うんだろうなあ。

とまあ、俺が魔王の両親が営んでる「翠屋」に向かっている途中で、

??? 「やあ、離して!!」

??? 「離しなさい! 用があるのはアタシだけでしょ!？」

??? 「やめて! 離して!」

男A「おいさっさと乗せろ! 向こうは失敗したんだ、こっちがやるしかねえんだぞ!」

男三人組「「へい!」「」

また誘拐かよ！？この世界は誘拐がお約束か！？

うゝん、取り合えず・・・・・・殺るか。
何かないかなゝっと、お？あったあった。

よしっ

ドドドドドドドドドド！ッ
ブオン！

賢治「何やってんだこのロリコンどもがああああああああああ
あああああああああ！！！！」

バックオオオオオオン!!

男三人 「「ぎゃにああああああああ!??」」

残りの男 「なに!？」

三人娘 「「ふえ?」」

俺はすぐそこに立て掛けてあったシャベルを振りかぶり、男三人組の後頭部を死なないように加減して打ち飛ばした。

賢治 「てめえら・・・公園で人を攫おうとしたあの下種共の仲間か・・・?」

残りの男 「なっなんだてめえは!？」

賢治 「あの下種共にも言ったがな、てめえらなんぞに名乗るわけな
かろうが!！」

さあ、Let's killing!

すずか side

私は今学校が終わってなのはちゃんとアリサちゃんと一緒に「翠屋」へ行く途中でした。

でも、校門を出て少し進んだら突然大きな車から男の人が3人出てきて私達を誘拐しようとしてました。

残った男「おいさっさと乗せろ！向こうは失敗したんだ、こっちでやるしかねえんだぞ！」

向こう・・・？それで私達を狙うってことは、まさかお姉ちゃん！？でも失敗って・・・ノエルが間に合ったのかな？と、あれこれ考えてる途中、

賢治「何やってんだこのロリコンどもがああああああああああああああああああああ！！！！！」

初めてみる男の人が私達を助けてくれました。

でも、私はその人から違和感を感じました。

恐いのにな、何故か安心する・・・

なんだろう、こんな感覚初めて・・・

それに・・・シャベルで大人4人を圧倒・・・あの人・・・人間、だよな？

アリサ side

もう、なんでよ！なんで学校前でいきなり誘拐なんて起こるのよ！アタシやすずかはともかく、なんでなのはまで！

それに何時になったら警備員が来るのよ！これだけ叫んでたらい加減くるでしょう！？

何回誘拐事件がこの学校で起こってると思ってるのよ！

この学校のセキュリティはいつたいどこまで役に立たないのよ！！

ああもう、誰か助けてー！ー！！

賢治「何やってんだこのロリコンどもがああああああああああああああああああああ！！！！」

その時、アタシの叫びが叶ったのか。

アタシ達を車で誘拐しようとしていた男3人から、その人は助けてくれた。

助けてくれたのは嬉しい・・・でも、なんでシャベルなんだろう？

それに、異様に強いし・・・あ、残ってた男が壁にめり込んだ。

なのはside

なのは達は学校が終わって、今からお父さんとお母さんが営んでるお店『翠屋』に行く所だったの。

でも、校門を出て少ししたところで変な男4人が私達を車に無理矢理連れ込もうとしてきたの。

これって・・・誘拐だよね？

あのリーダーみたいな人が言ったことにすずちゃんも反応したのに気付いたの。

もしかして、忍さんに何か・・・でも、失敗って言ってたから、

多分ノエルさんが間に合ったんだね。

でも、私達には誰も助けてくれる人はいないの・・・このまま誘拐されちゃうの・・・？

助けて、誰か助けて・・・お父さん・・・！

賢治「何やってんだロリコンどもがああああああああああああああああああああ！！！！」

でも、その心配はなくなったの。

シャベルを持ったお兄さんが、私達を誘拐しようとした人達を今ポコポコにしてるの。

・・・強い、もしかしたらお兄ちゃんやお父さんと同じくらい強いのかな？

でも、シャベルって・・・あんなに鈍い音、出してたかな？

あ、シャベルが凹んだの。

賢治 side

ふう、一丁上がり！

まさか校門でて少ししたところで誘拐が起こるとはなあ、びっくりだぜ。

それにしても、俺が誘拐現場を目撃して5分ぐらい経つんだが、未だに警備員や教師、それに警察が現れん・・・何やってんだ、この学校は？

お坊ちゃまやお嬢さまが通う学校なのにセキュリティが全然充実してねえってどういうこった？

そこにある警備室には誰もいねえ・・・飾りか？

まさか校門出た後は知りません、だなんてふざけたこと抜かすんじゃないだろうなあ・・・

??? 「あ、あの！」

ん？さっきの女の子達か、ってぬお！？将来の魔王『高町』なの

は』じゃねえか!?

なのはが小学生ってことは、無印かA'sか・・・でもフェイトが居ないし、首からレイジングハートを下げてないから無印か。

なのは「助けてくれて、ありがとうございました!」

そう言って頭を下げる高町 なのは。

ということは、その後ろにいるのはアリサちゃんとすずかちゃんかな?二人も頭を下げてくる。

賢治「おお、怪我はないかい?」

三人「はい!」

賢治「そっか。お、やっと教員と警備員が来た・・・それじゃ、俺は行くから、後の説明はよろしくな」

そう言って、俺はこの場を去った。
はやくシュークリーム食いて〜。

すずかside

行っちゃった・・・まだお名前聞いてないのに・・・

忍「すずか！」

ファリン「すずかちゃーんーん！」

ノエル「すずかお嬢様、ご無事ですか!？」

すずか「あ、お姉ちゃんにファリンにノエル！」

私達と助けてくれた男の人が歩いていった方向を向きながらそう思っていた時、私達の横に私の家の車が止まり、中からお姉ちゃんとノエルとファリンが降りて来た。

忍「よかった、無事なのね！」

ファリン「よかったですくくく！」

ノエル「ご無事でなによりです」

お姉ちゃんは私が無事なことにほっとし、ファリンは私に泣きながら抱きついてきました。

すずか「うん、さっき危ない所を初めてみるお兄さんが助けてくれたの。」

私が初めて見るお兄さんと言った時に、ノエルとお姉ちゃんが顔を厳しくして顔を見合わせました。

どうしたんだろう？

忍「・・・ねえ、すずか？もしかしてその男の人って・・・黒の短髪で黒いジャケットにポロシャツにジーンズ、それに赤いカバンを背負った人の事？」

すずか「え？う、うん。」

なんでお姉ちゃん、あの人の格好がわかったんだろう？

あ、さっきこの人達が失敗って言ってたから、もしかしてあの人がお姉ちゃんを助けてくれたのかな？

ノエル「忍お嬢様・・・」

忍「ええ、一度『翠屋』に行つて聞いてみましょう。おじさまなら何か知ってるかもしれない。」

すずか「あ、じゃあ私達も一緒にいい？私達も『翠屋』に行く所だったから。」

忍「ええ、それじゃあ、こいつらを引き渡してから一緒に行きましよう。」

こうして、私達は車に乗って翠屋に行くことになりました。

第二話 魔王たちとのファーストコンタクト（後書き）

いかがでしょうか・・・オリジナルって、本当にむずかしいですね・・・

では、感想とアドバイス、お待ちしております。

第三話 翠屋に到着（前書き）

すみません、投稿が遅くなりました！！

第三話 翠屋に到着

忍side

忍「――、私からはこれぐらいね・・・」

私は公園で起こったことを簡単にまとめ、すずか達に話した。
さすがに右腕をペシャンコにしたとか、関節全て破壊したとか、
そんなグロいことをなのはちゃんたちには言えないからね・・・
それにあの細身でアレだけの力を持つてるのは異常よ・・・
なにより本人が一番驚いていた・・・なにかあるわね、あの男。

アリサ「・・・アタシ達みたいにな、目の前で起こってからじゃない
と、信じられない事ね」

ノエル「はい、私も始めに聞いた時は信じられませんでした。しか
し、あの惨状からして、間違いないと思います」

ノエルが車を運転しながらアリサちゃんの言葉に答える。

すずか「じゃあ、私達に起こったことも話すね――」

すずか「————これぐらいかな？」

アリサ「ええ、大体そうね」

なのは「うん、すっごく強かったの」

すずかが私達が着くまでの事を話してくれた。

すずか達の時には力がある程度は制御できていたみたいね。

でも、なぜすぐにその場から離れるのかしら・・・

アリサ「たんに面倒くさいのがいやだから逃げただけじゃないの？」

アリサちゃん、いくらなんでもそれは・・・ありそうね（汗

それに、不覚にもあの言葉に反応してしまった／／／

すずか「お姉ちゃん、顔赤いよ？」

忍「ッ！？な、なんでもないわ、大丈夫よ！」

いけない・・・思い出すだけでまた顔が赤くなってしまう・・・
私には、恭也がいるのに／＼／

ノエル「忍お嬢様、まもなく到着いたします。」

ノエル、ナイスタイミングよ!!

忍「そう、それでは早速おじ様に確認してみましよう、アレだけの力の持ち主ならば、おじ様が何か知ってるかもしれないし」

私が話を締めたのとタイミングよく、車は『翠屋』近くの駐車場に着いた。

車を降りて店に入ろうとした時、すずかがなのはちゃん達から離れ、私に近づいてきた。

忍「どうしたの？」

すずか「・・・お姉ちゃん、実はね、あの人から違和感を感じたの」

違和感？その言葉に私とノエル、ファリンは首を傾げる。

忍「・・・どんな違和感？」

すずか「なんか・・・恐いの、安心できる？　ような変な感じ」

・・・このこともおじ様に伝えないといけないわね。

もしその男が私達の敵になったとしたら・・・恭也とおじ様でも勝てるかどうか。

——カランカラン——

桃子「いらっしやいませ、あら、なのはじゃない、おかえり！」

士郎「おかえりなのは、それにアリサちゃん達も、いらっしやい」

アリサ・すずか

「「こんにちは！」」

忍・ファリン・ノエル

「「「お邪魔します」」」

忍「おじ様、おば様、到着早々申し訳ありません、お話がありますのでお時間をください」

士郎 side

話？何があったのかな？

少々話が難しそうなので、なのは達には向こうの席でお茶をさせ、俺達はカウンターに集まった。

忍「実は、私とすずか達がここに来る前に、誘拐に遭いそうになりました。」

何、誘拐！？ということは、夜の一族絡みか・・・しつこい奴らだ。

夜の一族のことや月村家の事情は、高町家ではなのは以外は皆知っている。

何故なのはだけ知らせていないかというと、すずかちゃんが自分で何時か話すから話さないでくれとお願いされた様だ。

恐らくなのははすずかちゃんが夜の一族・・・人間とはかけ離れていると知っても、友達のままでいると言うと思うんだが・・・すずかちゃんがいつか自分から話すと言っているから、誰もなのは達には教えていないでいる。

忍「はい。ですが、そこで私とすずか達は見知らぬ男に助けられました」

ほう？見ず知らずの者のために身体を張って助けるか・・・ふむ、今時の者は我が身可愛く見たとしても関わり合わないように逃げるのだが、どうやらその男は違うようだな。

ノエル「その男のことなのですが、異常な力を持っているようです」

・・・異常な力？

桃子「それはいったい、どんな力なの？」

忍「はい、大人の男・・・それも体格のいい男を細身で蹴り飛ばし、殴りかかる腕を殴り返して粉々に潰し、また関節全てを破壊したのです」

士郎・桃子

「「!？」」

俺と桃子は驚愕した。細身でも蹴り飛ばすならまだ出来るとしても、腕を粉々に？関節全てを破壊？

そのようなこと俺と恭也、妹の美沙斗の他では、夜の一族以外には不可能な話だぞ!？

そんなことができるのか・・・その男は本当に人間か？

忍「その男は、すずか達が誘拐されそうになった時にも現れたそう

なんです」

ファリン「すずちゃん言うには、シャベルで大人4人を圧倒していたと」

・・・何故シャベルなのかは聞かないで置こう。返答が目に見える。

桃子「その人、なにか言ってなかった？」

忍「えっ？あ、はい。ですが、些細なことなので・・・／／／」

なんと・・・あのガードのとてつもなく固い忍ちゃんの頬が薄く染まっている・・・

これは恭也、気をつけないと婚約者を盗られるかも知れないぞ。

桃子「そう、でもよかったわ、あなた達が無事で」

桃子は安堵したように息を吐いた。

士郎「それで、その男の特徴は？」

その男の特徴さえ聞いておけば、今日中にもその男をみつけるこ

とができるだろう。

忍「はい、身長は180前後、黒いショートヘアに黒い瞳の容姿は日本人に見えました。服装は黒いジャケットにポロシャツ、ジーンズに赤いカバンを背負ってました。」

桃子「それって、丁度窓の外を歩いている、あの人のような？」

忍・ノエル・ファリン

「「「え？」」」

桃子の言葉に三人はオープン硝子の方を向いた。

すると、丁度忍ちゃんが言ってた通りの男が通っていた。

賢治side

ふいふ、あっちこっち見て回ってたから遅くなっちゃったな。

それにしても、町は基本俺が居た世界とは変わらんなあ、違うのは商店街が賑やかなぐらいか。

おお、店の前にリムジンが止まってる。『翠屋』って結構人気あるんだなあ。

俺も早くシュークリーム食いたいし、入るとしますかな♪

———カランカラン———

6人「・・・あ」

賢治「・・・おう？」

俺がドアを開けて店に入ると、なのは達が居た。
少しの間沈黙が続いたが、なのは達が俺を指差して叫びだした。

アリサ・なのは・すずか・忍

「ア——————！！！」

賢治「おう！？いい、いきなりなんですか！？」

第三話 翠屋に到着（後書き）

・・・時間が掛かってグダグダ・・・

文才が欲しい・・・

第四話 桃子さんの料理美味えー（前書き）

どうも、ユニコーンです！

遅くなって申し訳ありません！！

気付けばPV20000突破！！

ユーモア5000突破！！

皆様に感謝です！！

では、どうぞご覧ください！！

第四話 桃子さんの料理美味えー

賢治「い、いきなりなんですか・・・？」

店に入って早々指を指され叫ばれたら誰だってビックリするよね？
他のお客さんはビックリしていないかと店内を見渡して見ると、

この六人の他には店員さん2人だけしか・・・

おろ？あそこに居るお二人はもしや、俺が住んでた世界で読んでいた二次小説でもその若さが謎のままに包まれている士郎さんと桃子さんですか？マジで若えなあおい・・・

入り口のところでそんなことを考えている俺に桃子さんらしい人が近づいてきた。

桃子「いらっしやいませ、貴方があそこにいる私の娘とそのお友達を助けてくれたのですね？」

賢治「え？あ、はあ、まあ・・・そんなところですか？」

桃子「そうですか、どうもありがとうございました。娘を助けてもらったお礼がしたいので、こちらまでどうぞ」

と、俺は桃子さんに促されるがままに、士郎さんと忍にメイド二人・・・ノエルとフアリンかな？がいるカウンターまで連れて行かれた。

あれ？俺ってもしかして流されやすいタイプ？

桃子「ご注文は何にしますか？」

賢治「えーっと・・・じゃあ、このシーフードパスタセットで飲み物は珈琲とデザートはシュークリームで。」

桃子「はい、かしこまりました。」

俺の注文を聞くと、桃子さんはそのまま厨房へ入っていった。

おろ？忍ちゃんがいるのにシスコンでとても有名な恭也がいないぞ？修行か？

俺がそんなことを考えながらお冷を飲んでいたら隣に忍が座って話しかけてきた。

俺の後ろにはノエルとファリンが立っている。

おいおい、なんでそこまで警戒するのよ？

忍「こんにちは、公園では危ない所を助けてくれて、どうもありがとう」

賢治「ん？おろ、公園にいた美人さんじゃん」

忍「ッ！？／／／／／」

おいおい、最初に会ったときに思ったけど、どんだけ初心なのよ・

俺の後ろにいる二人は驚きの表情をしてるってことはマジなんだな・・・

そして、カウンターにいる士郎さん、貴方は何故そんなに面白そうな顔してるんですか？

忍「んっんん！自己紹介がまだだったわね。私は月村　忍よ、貴方の後ろにいるのが左からノエル、ファリンよ」

忍は顔が赤くなったのを誤魔化すように話を変えた。

ノエル「ノエルです。あの時は忍お嬢様を助けていただき、ありがとうございました」

ファリン「ファリンです。すずかちゃんを助けてくれてありがとうございます
ございました〜！」

うん、この二人の性格は原作通りだな。

でもファリンさんや、あなた本当にエーディリヒという機械？

普通の人間と何な違和感なくとても明るいのですが・・・

士郎「初めまして、ここ喫茶『翠屋』のオーナーであそこにいる娘なのはの父親、高町　士郎だ。娘達の危ない所をありがとう」

そういつて士郎さんは俺に頭を下げてきた。

別に気にしなくていいのに……

賢治「いえいえお氣になさらず、ああいう輩を見ると無性にぶっ飛ばしたくなるモンですから。俺は黒崎 賢治。最近ここ海鳴市に引っ越してきたんです」

士郎「そうか。それでも、娘の危ない所をありがとう」

そんな他愛のないことを話していると、桃子さんが料理を運んで来た。

すげえ、めっちゃいいにおいがここまでするよ。

桃子「はあい、お待たせしました。シーフードパスタと珈琲です」

うっほほおお！美味そう！！

賢治「いただきます！」

おおー！めっちゃうめー！なにこれ、イカとかメチャプリプリだぜ！！

貝もでかいし、このトマトソースとか最高！！

でも、これだけじゃまだ腹は膨れねえなあ・・・他にも何か頼もつと。

お、この翠屋特製サンドイッチとか美味そうな響き！

賢治「すいません、この翠屋特製サンドイッチを一つ追加でお願いします」

桃子「あ、はい。かしこまりました」

桃子さんはまたキッチンに入っていた。

ん？ 士郎さんが何か俺の身体をジロジロと観察してくるんですけど・・・

士郎「ふむ、君は何か武術をやっているのかな？」

はい？ 俺の何を見てそう思ったのですか？

賢治「なぜそう思うのですか？」

士郎「なに、そこにいる忍ちゃんたちから聞いたところ、凄い力だったと言っていたからね。それに体つきもなかなかのものだ」

・・・すいません、それゲッター線の力です。

まさかゲッター線であんなに力がついているとは思わなかったから(汗)

それに向こうにいた時の脂肪がこっちにきた時全部筋肉に変わってたし・・・

オマケにニキビも全部なくなっていた。

マジでサービス良すぎだろ、ゲッター線。

賢治「まあ、こっちに来る前に色々バイトしたり武術も身を守る程度には・・・」

一番無難なのはこんなところかな？

おろ、桃子さんがサンドイッチ持って来てくれた。

もう出来たのかよ。早いな。

でもこれも美味そー！

いっただっきまーす！

うめー(´・`・´) モグモグ

なにこの卵焼き、めっちゃフワフワでうまー♪

忍「それぐらいではあの力のことは説明できないわ」

ん？忍さん、あなたいきなりどうしたんですか？目つきも何か、獲物を見定めているようなのに変わりましたよ？

賢治「どうしたのよいきなり？」

忍「あなた、何か隠しているんじゃない？」

・・・ふー、異常な力を持っている者に警戒するはいいけど、それじゃあ自分達も力持ってますよって言ってるのと同じだぜ？

賢治「それを聞きたいのなら、そちらの秘密も話さないと釣り合わないんじゃない？もちろん、俺の後ろに居る二人のこともね」

忍・ノエル・ファリン

「「「!」?」」」

士郎「・・・気づいていたのかい？」

賢治「ええ、俺はこういうのは生まれつきメチャメチャ敏感なんで」

俺は珈琲を啜りながら士郎さんに答えた。

てか感が強い人は会話で直ぐに気付くと思うぜ？

賢治「で、どうする？そちらの秘密を明かしてくれないと、こっちの秘密も明かせないよ？」

さて、
どうでるかな？

第四話 桃子さんの料理美味えー（後書き）

ゲッターはまだ出ません。

次に出せるかどうかですね。

感想とアドバイスをお待ちしております！

第五話 秘密を守ってたら予想外なことが判明した・・・（前書き）

．．．．．
 どうも、ユニコーンです。

投稿が遅くなって申し訳ありません・・・

オマケにまだゲッターが出せません・・・

なぜだ――――！！
（涙）

第五話 秘密を守ってたら予想外なことが判明した・・・

ノエル side

なぜです・・・なぜバレたのですか、忍お嬢様の場合は今の話からしてある程度推測できるかもしれませんが、私とファリンのことは話に一切触れていないはず・・・

まさか、月村家の財産と私達エーデイリヒタイプを狙う者、もしくは雇われた？

いえ、それならばお嬢様はあの時、公園で既に人質に取られていたはず・・・

逆にこの男はお嬢様を救ってくださいました。

それとも、こちらと親睦を深めてから奪おうと？

・・・理解できません。それともただ単に感が鋭いだけですか？

ノエル「・・・なぜ、そう思われるのですか？」

賢治「ああ、ぶっちゃけた話な、後ろのメイド二人から僅かにモーター音がするのよ。それに動き方が微妙にぎこちない。よっぽど神経張ってる人間でも気付くことはないと思うけどな。」

忍・ノエル・ファリン

「「「!」?」」」

モ、モーター音！？なぜそんな極小音が人間の耳に聞こえるのですか！？

犬でも聞こえるかどうかの音なのですよ！？

忍「・・・あなた、本当に何者なの？」

賢治「おいおい、それは其方から話さないと答えないって言ったばかりでしょうに。」

賢治様は苦笑しながら答えた。

賢治 side

あつはつは、原作っていうか二次小説でリリなのを見ていたから後ろのメイド二人が人間じゃないって言い切れたんだよなあ。

じゃなきゃ解るわけねえよ、一つ一つの動作がもう人間と変わらんもん。

音声も機械独特のあのカタカタじゃなく、普通に人と喋ってるのと変わないし。

逆に人間よりも喋り方がスムーズかな？

でも、ゲッター線って本当にすげえなあ。

さっきモーター音が聞こえたって言ったけど、真面目に聞こえちゃったのよ。メツチャ小さくだけど。

俺、下手したら超音波聞こえるんじゃない？ただでさえ耳と鼻が人より鋭いのにな……

近くに選挙カーが通ったら間違いなく頭痛が起こるな。どうしよう……

待てよ、ゲッター線が安定してないから無意識に五感が上がってるのか？

ならこれから安定するように修行すれば、なんとか抑えられるか。よし、ならとりあえず、こつちを先に終わらせるとするか。

賢治「まあ、別にそちらがどんな存在でも俺に害を与えなければ関係ないな。なにより、喫茶店で、しかも一般人が居るにも関わらずこんな話をしてるんだ。士郎さんもこの人たちの事情、知ってるんじゃない？」

士郎「……君はいつたい、何者なんだい？」

賢治「ふう、さっきも言ったように、俺は黒崎 賢治。最近引っ越してきた者ですよ」

俺は珈琲を一口飲んでから言った。

賢治「んで、そっちは話せない事情があるのかな？」

忍「……………」

忍お嬢さんは陰しい顔をしているなあ。
お、メイド二人も忍の後ろに移ったか。

賢治「ま、これでわかったろ？人の秘密を聞き出す時は、自分の秘密も話さないと相手も喋ってくれない。そっちに力があれば無理矢理にでも聞けたかもな」

まあ、自分は夜の一族だって言っても普通の人は「こいつ頭大丈夫か？」な反応しかしないと思うけど。
おっと、長々と喋っちゃったな。そろそろ新居に向かうとするか。

賢治「あ、桃子さんご馳走様でした。御幾らですか？」

桃子「いえいえ、今日は娘達を救ってくれたお礼ですのでお金はいりませんよ」

桃子さんは優しく微笑みながら答えてくれた。

・・・本当に娘一人生んだのかこの人。
皺一つないスタイル抜群だし。

今ミスコンに出ても絶対バレねえし、むしろ優勝するな、うん。

賢治「いえ、これだけ食べたのでそういうわけにはいきませんよ」

そう言って俺が財布を後ろポケットから取り出した時、何かが財布から落ちた。

忍「ん？名刺？」

忍がその名刺を拾ってメイド二人と一緒に見た。

あれ、名刺？そんなの公園で持ち物確認した時なかったよな？
免許集の中にでも紛れ込んでたか？

忍「◎△&%#!!？」

・・・どうしちゃったの忍さん？いきなり奇声なんかあげちゃって。

おろ？メイド二人も固まってる。

忍「く・・・クラジエンタジュエルコーポレーション会長!？」

・・・ほ？なにその大層な会社名。
あれ？ちょっと待って、今なんか会長って聞こえたんだけど。

士郎「なにっ!？クラジエンタジュエルコーポレーションって、確か年商7兆円のあの会社か!？」

ファリン「ほ、宝石だけではなく、IT・食品・医療器具、その他あらゆる分野でトップに立ち、国内だけでなく海外にまで進出していて、今や名前を知らないという人の方が少ないというあの大企業、しかも会長!!?」

おいしいおいしい!!?何コレちょっと!!?会長!!?

就職してるならまだしも会長ってどういうことよ!!?

ふざけんじゃねえ!俺は経営学なんざ何一つ知らんぞ!?

本物の!本物の会長はどうしたんだ!?

賢治「ぬが!?!」

ぐ、ぐおお、いきなり頭痛が・・・ってこの記憶はなんだ?

・・・ほうほう、12歳でオック○フォード大学トップで卒業、そしてそのままトントン拍子にかあ。

うん、とりあえず。言わせてくれ。

・・・桃子さん、ここにその張本人がめっちゃ脂汗掻いてびっく
りしてるのに貴方はなんでそんなにリアクション薄いんですか？マ
ジこの人謎だぜ。そこにいる士郎さんも固まってるのに。

忍「わ・・・私はなんて恐れ多いことをお・・・」

ノエル「お、お嬢様!？」

ファリン「お嬢様、しっかり!」

・・・やっべえ、カオスになっちゃったよ。逃げよ。

賢治「・・・とりあえず、おいくらですか？」

桃子「はい、2170円になります」

よし、金も払い終わったし、逃げよう!

———カランカラン———

「失礼いたします。こちらにアリサ・バニングスお嬢様を救って下さったお方が居られるとの事で参上いたしました。」

「……?」

「「アリサ!」」

アリサ「ママ、パパ!」

「……逃げられなかったぜ、ちくせう。」

第五話 秘密を守ってたら予想外なことが判明した・・・（後書き）

おおぅ・・・グダグダになってしまう。

なぜだ!?!なぜこの場面でグダグダになってしまうんだ!?!?

早く、早くゲッターを出したというのに――――！！！！！！

・・・すみません、もうすこしお付き合いください（涙

では、感想とアドバイス、お待ちしております・・・

第六話 遭遇とクラジエンタの一部（前書き）

・・・やっと、やっと投稿できました・・・

ですが、まだゲッターは出せそうにないです。

では、どうぞ！

賢治「えーっと、記憶によればこっちでいいんだよなあ。」

そんなこんなあって俺は今、新たな住居に向かって歩いている。

住所は海鳴市XX区XX番地X—X—4000号室。

・・・4000ってことは家は40階にあるのか、すっげえ高さだな。

まあ、今日はさっさと家の片付けや掃除を済まして風呂入って寝よう・・・今日は色々と本当に疲れた。

それにしても・・・なんでだろう、周りを見渡すと豪邸ばかりが見えない。

三階建ての家に大きな庭があってガレージが付いてる家ばかりだ。

せいぜい小さくても二階建てで中庭が大きいぐらいかな？

ここってもしかして、もしかしくても高級住宅街とかか？

そういえば、さっき守衛所が何箇所かあったからそうなのかなあ。

おお、すっげえ豪邸発見。噴水まで付いてるぜ。

てか前の世界でも思ったんだけど、家の掃除とかどうしてるんだろ？

これぐらいの家ならメイドじゃなくてダス○ンにでも頼んでるのかな？

賢治「おっとっと、こっちか。」

標識とiphoneのGPSを確認しながら記憶に流れた住所に向かう。

それにしても、ここはなかなか交通にはいい場所だ。

ショッピングモールや商店街は近いし、近くには高速バスが止まるから買い物や遠出とかにはいいな。

それにバリアフリーが充実していて車椅子やベビーカーを押すには支障のない歩道になってる。

ほっほ、高級住宅街だけに舗装が徹底してるよ。

一般の道路とか歩道もバリアフリーじゃなくてもちゃんと舗装ぐらいはしてほしいな。

特に雨の日とかに滑りにくい道とか。

お？　そういやあウチの会社って土木も扱ってたっけ？

カバンが『翠屋』を出るときに重くなったから、気になって途中で確認したらいつの間にか会社のカタログが入ってたよなあ。

んで、そのカタログの中に土木も入ってたんだよなあ。

・・・本当、ゲッター線やり過ぎだったの。

でも、確か道路の舗装とかって法律では県とか市から依頼が来ないと勝手にやったらいけないんだっけか。

たしか選挙の時とかじゃないと国から予算が下りないからどんだけ凸凹でも工事しないんだっけ。

待てよ、さっきカタログと一緒に名刺も確認した時に確か、国会議員で結構上の位の奴がチラホラいた気がしたなあ。そいつらにあたってみるかなあ・・・

よし、明日辺りにウチの今だ知らぬ社長（？）達に指令だしとくかな。（笑）

そうボヤきながら歩いていると、目の前に衰弱して倒れている猫がいた・・・っておい！？

なんでこんな閑静な住宅街に山猫がいんだよ！？

おかしいだろ、山からここまで距離半端なくあるぞ！？

やっべえなあこんな高級住宅街に動物病院なんかあるのか？
でも、幸いなのは見た感じ外傷はないことだな。
とにかく、今は近くの動物病院を検索して――――

?? 『き・・・・・・・・ま・・?』

ん？ 声？

頭に直接響いて・・・・・・・・ってまさか!？

?? 『き・・聞こえますか・・私の・・声が・・』

うお!？ これまさか念話か!？

発信源は・・・・・・・・って山猫がこっちを見てるってことはこの山猫か
!？

なんで山猫から念話が!？

．．．ん？いや待てよ？

山猫が．．．念話を．．．そして．．．衰弱し．．．

山猫？

まさか（汗）

賢治「あのく……あなたはもしかして、もしかしくても『リニス』という……お名前では？」

山猫『っ！なぜ私の名を！？』

ぎゃーーーーーーーーー！？当たっちゃったよーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！？

一方、その頃『翠屋』では――――

すずか side

鯨島「それでは、本日は失礼致します。」

デビット・奥様

「「お世話になりました。」」

アリサ「なのは！すずか！また明日ね！」

なのは「バイバイ！アリサちゃん！」

すずか「また明日ね！」

アリサちゃんのおじさんとおばさんは今日、仕事が一段落ついたので屋敷に戻る途中、例の誘拐事件が発生した事を会社から知らされたみたいです。

慌てて家に戻ると、丁度鮫島さんが今からアリサちゃんを助けてくれたあの男の人の所にお礼を言いに行くところだったみたいで、おじさん達も一緒に付いてきたみたいです。

それでここ『翠屋』に着いてアリサちゃんの安否を確認できてホッとしたようですけど、助けてくれたのがあの人だってアリサちゃんが言ったらおじさん達はものすごくびっくりした顔をしました。けど、すぐに目を光らせながらお仕事の話とかパーティに参加とか、そんな話をしていました。

そこに鮫島さんがあの男の人を庇ってるうちにあの人は逃走しました。

おじさん達はひどく残念そうな表情をしてました。

人って、本当に目が光るんですね。私達夜の一族も力を解放する時は瞳が赤くなるけど、目が光るのはアニメや漫画でしか見たことないです。

なのは「アリサちゃんのお父さんとお母さん、あの人の事を知ってるの？」

すずか「んー、なんか契約とかパーティに参加とか、そんなこと言ってたからどこか凄い所の人なのかなあ？」

お姉ちゃんなら何か知ってるかなあっと思ってカウンターの方を見たら、なぜか頭を抱えてこの世の終わりのような雰囲気漂わせていました。

さっきも変な声上げていたけど、お姉ちゃんどうしちゃったの？

忍side

どうしよう、どうしようどうしようどうしよう!!

私達の秘密を完全にはなくても知られてしまった!

それも、あの超大企業の・・・しかも会長に!

普段の私なら秘密を知られた場合はすぐに暗示をかけてから記憶を消すのに、あの男の正体を知ったら気が動転してしまった・・・その間にあの男は居なくなってるし、もう最悪の状況よ!

忍「うー、どうしようどうしようどうしよう!?」

ノエル「お、お嬢様落ち着いてください。」

フアリン「そうですよ、それに彼の住処は調べればすぐに分かる事じゃないですか。」

そ、それもそうね。私としたことが・・・

彼はこの近くに引っ越してきたばかりと言っていたわけだし、さっそくノエルに調査を――

士郎「いや、彼にそんなことをしてはだめだ。」

え・・・？

士郎さん、それはなぜですか？

士郎「・・・俺もあの仕事から足を洗ってこの職業に付いたが、裏の情報は耳には入ってくるんだよ。」

士郎さん・・・それは桃子さんのいるところでは言わない方がいいですよ？

私はあの笑顔の殺気には何度遭遇しても耐えられませんから・・・夜の一族でも、あの人には勝てない気がします・・・ほかにも色々な意味で。

士郎「非合法テロ組織『龍』を知っているかい？」

『龍』？

確か私の調べではおじ様の、御神一族とその分家、不破の一族を爆弾テロで壊滅させた非合法テロ組織のこと・・・

でもその組織は中国で何かの組織に一日もしないうちに壊滅されたって全国ニュースに・・・

ノエル「士郎様、なぜその組織の名が今？」

士郎「うむ。俺の妹である美沙斗を暗い影に落とした元凶組織。俺は一族を殺され、妹を絶望に追い込んだ組織に復讐するため、片っ端から倒していった。だがさすがに俺一人では本部にまではいけなかった。そしてその組織が昨年、フィアッセのコンサートを爆破するという情報を手に入れてね。妹もその組織を潰す為に現れたんだ。だがその組織は日本に着いたと同時にある企業により壊滅した。」

待つて・・・この話の流れからしてまさか――――

士郎「そう、クラジエンタジュエルコーポレーションだ。」

忍・ノエル・ファリン

「「!？」」

なんですって!?

なぜ、大手であれ一般企業にそんな力があるの!?

士郎「クラジエンタは日本で爆発テロ未遂を行ったあの組織を、日本国政府を通して中国政府に訴えたんだが、中国政府はその組織がやったという証拠がないと聞く耳を持たなかったんだ。それは結局、遠まわしに恐くて手が出せないと言っているのと同じだ。それを悟ったクラジエンタは、自ら率いる武装組織を中国に投入し、一日でその組織を壊滅させた。」

ノエル「そ・・・そんな、そんなことを相手国の許可なく行えば、日本の立場が危うくなってしまうです! 下手したら外交問題に発展

するのでは!？」

士郎「ああ、しかしクラジェンタは日本にまでやってきた中国のテロ組織をその場で潰し、尚且つ中国政府が恐がって手を出せなかったあのテロ組織の本部を一企業がたった30人で潰したんだ。これで他国不法侵入などと世界に訴えれば中国政府の力のなさを逆に宣伝するようなことになるからしなかったんだ。それで黙っていたんだろう。」

私達は士郎さんの言葉に絶句した。

あのテロ組織を、しかも本部をたった・・・たった30人で潰したなんて。

なにより、エーディリヒタイプを30体投入しても出来るかどうかのことを一企業が成し遂げたことがとても信じられなかった。

ノエル「そ、その30人というのはいったい・・・」

士郎「・・・それなんだが、知り合いが得た情報によれば・・・人間かどうかかわからなかったようだ。」

・・・人間かどうか？

それは外見の意味でそう言われているの？

それとも戦闘能力が異常だから言われているのかしら・・・

ますます調べたくなってきたけど・・・あのテロ組織を意図も簡単に潰したのだから、探れば直ぐにバレてしまうでしょうね。

その時は私達月村家はどうなるかどうか、想像もしたくないわ。

士郎「後に知った事なんだが、どうも見た感じ全身武装というより完全にロボットのようだったんだ。」

忍・ノエル・ファリン

「「ロボット!?!」」

え、エーディリヒ型を1体一から作るだけでも国家予算2年分はいるのよ!?!

それを、エーディリヒ型を明らかに上回る性能を30体!?!
いったいどこからそんなお金がでてくるのよ!?!

ファリン「し・・・士郎様、そのメンバーはいつたい、どのような容姿なのか、わかりませんか?」

ファリンは冷や汗を掻きながら士郎さんに聞く。
でもそれは、私もノエルも気になっていること。

人と見間違えるほどの容姿でその話の性能ならば、これは夜の一族の技術をはるかに上回っているという事になるわ。クラジエンタの会長であつても、私達をゆすつてくるという可能性はある。

事実、私とノエル二人の秘密を意図も簡単に見抜いたのだから、警戒するに越した事はない。

士郎「んゝ、確か分かりやすく赤と青と黄色にそれぞれ10体ずついたようだ。武装は、赤が斧、青がドリル、黄色が素手・・・になるのか? 網も使っていたそうだ。」

お・・・斧はともかく、ドリル!?

なによそれ!?!ドリルは相当なモーターの力が必要なのよ!?

一体どんなモーターを使ったらそんなロボットにドリルが付けられるのよ!!

しかも、それを10体だなんて・・・

忍「おじ様、その部隊の名は・・・わかりますか?」

士郎「たしか・・・名前は――――」

――ゲッターG部隊――

第六話 遭遇とクラジェンタの一部（後書き）

どうも皆さんお久しぶりです！！

いやはや・・・投稿が遅れた言い訳になるのですが、これに手間取ったのはとらハに出ていた御神一族とその分家をテロで殲滅したテロ組織をあっちこっち探しに行っていたからです。

まさかこんなに時間がかかるとはおもいませんでした・・・

それでは、感想とアドバイスをお待ちしております！

第七話 現実逃避再来くくくくく (前書き)

どうも！ユニコーンです！！

私の作品を心待ちでいてくださった方には大変お待たせいたしました！

では、どうぞ！

第七話 現実逃避再来くくくくく

賢治 side

おおおう!? す・・・すっげえ寒気がしたぜ・・・
何故か今、俺の知らない場所ですんごいことを噂されている気が・
・

リニス「賢治、どうかしましたか？」

賢治「あ、いや・・・ちよつと寒気がね。」

リニスは山猫の姿で俺に抱っこされながら言った。
いやゝ、やっぱり動物は和むよねゝゝ
思わずモフモフしちゃいますよゝゝ

モフモフモフモフ♪

リニス「ちょ、賢治／＼／・・・ニャ・・・ニャ／＼ン♪／／／」

ああ・・・リニスさん、なんてかわいい反応なんだ!!

から魔力を感じるとリニスが言ったので探してみたら、魔力を与える御札が入っていたのだ。

うわーい、ご都合主義ばんざーい！

その御札が俺の所有物だということで、間接的に俺の使い魔になっている。

でも、リニスは俺にリンカーコアじゃなくなにか別の物があるって言ってたな。

目には見えないけど、何かが心臓と同化していて取り出すこととはミッドの技術でもお手上げだと言っていた。

俺の心臓に一体何が同化してるんだろう・・・

あの空間でゲッター線が俺によこしたのって、もしかして・・・

でも・・・リリなのの世界に来て魔法が使えないって結構痛い？

これから起こる事件とかに介入しないといけないんだろ？

確か、災厄をどうのこうのってゲッター線にいたアイツ（・・・）が言ってたんだし。

俺デバイスないんだけど、どうやって介入するのよ・・・

あれ？　そういえば、俺と一緒に光に吸い込まれた超合金はどうなったんだろ？

まあ、それはおいといて。

賢治「なありニス、人ってリンカーコアがなくても魔法は使えるのか？」

リニス「無理ですね。魔法はリンカーコアを通して初めて発動するので、この紙を使ったとしても魔力供給しかできません。それに効果は今の私相手になれば一枚で半日ぐらいです。」

そっかぁ・・・やっぱり魔法は使えないのかぁ。

じゃあ自分で転移魔法は使えないか・・・面倒くせえ・・・
待てよ、御札を大量に使えば行けるか？

でも荷物になるしゴミが散漫するのは嫌だな・・・

まあ、リニスを維持するのに使えるなら別にいいか。

この御札は絵・・・になるのか文字になるのかわからんが、それを書き写して祈りを捧げれば完成するみたいだ。ただし俺の血で書かないと意味がないと記憶に流れてきた。

俺の血じゃないと駄目って・・・キョンシーに使う御札かっての。
御札の色は白だから日本流のかと思ったのに・・・

リニス「私は使い魔を維持するのにリンカーコアから流れる魔力じゃなく、この御札でできているというのに驚きなのですが・・・」

賢治「まあ、地球には魔法だけでなく、陰陽師やら魔術やら色々あるけど、表にはでてこないからな。お前達のように科学的な魔法じゃないから納得のいく説明が民衆にはできないんだ。だから表にはそんな出てこないんだよ。それにそういうのを信じてない人でも、本当はそういうのはあるって頭では分かっているんだけどね。一番謎を残している星は多分、この地球だろうよ。」

まあ、なんでもかんでも科学的に解明しようとして命まで弄ぶような馬鹿が現れるから、天の逆鱗に触れて原因不明の病が起こったり災害が起こったりするんだよ。

人が踏み入れてはいけない領域にまで土足で入り込むやつらが居るから・・・

それを考えてしまえば、地球以外には神が存在しないという事になるな。

管理局の連中とかは平気で人造魔導士とか造ってるのに何にも起きないし……

リニス「……賢治、険しい顔をしてどうしたのです？」

賢治「っ！？いや、すまん。ちょっとまた考え事をね……」

俺の知っている……というより原作知識の管理局のあり方を脳内で非難していてリニスを忘れていた。

モフモフモフモフ

リニス「……………／／／／」

おお、もう抵抗しませんか。

いや、むしろ目を細めてゴロゴロ喉を鳴らしてる……

リニス「／／／……そ、それにしても、家にはまだ着かないのですか？」

ああ、一応リニスには俺がどういう経緯でこの世界に来たかどうかどう

かは説明しといた。

だって、この世界に居るはずの俺が家を見たときの反応と家の中の物を探す時とかに必ずバレるからね。

それに、その方が後々面倒くさくならないからな。

さすがに未来を話す事はしていない。

災厄をと言っていたから原作通りには絶対に行かないはず・・・。
もしかしたらジュエルシードに何か有るのか、もしくは管理局だな。

賢治「ごめん、GPSでルート表示してるから回りを散歩しながら向かってた。」

リニス「・・・家の片付けをするのではなかったのですか？」

そ、そんなジトつとした瞳で俺を見ないでくれ・・・（涙）

そうこうしているうちに、GPSの音が強くなったので画面を見た。

賢治「お、そろそろ番地が近くなってきた。次の角を曲がったら俺の新居か。」

リニス「では、家に上がってから私の事をお話します。」

賢治「おう、まあ片付けと言っても一人暮らしだからそんな物がな
いから直ぐに終わるだろうし、掃除も直ぐに終わるだろう。ゆっく
り茶でも飲みながら聞くよ。」

お、角が見えてきた。

ではでは、俺の新居にご対面し〜!!

(。D。)

あ、あれ？ここって、確かあのカタログにあった……

賢治「お、おかしいなあ……なありニス、俺住所入れ間違えてる？」

リニス「い、いえ。ちゃんと合ってますよ（汗）」

嘘だろ……俺はまた現実逃避をしなければならないのか……？

だって

はしはし

(^o
Д
)^o

(
ス
ド
C
)
ゴ
シ
ゴ
シ

海鳴と遠見の境目にある

(
。
ド
;
)

超最高級マンション・・・総理大臣でも手に入りにくいマンシ
ョンなのだから・・・

賢治・リニス

「「嘘おおおおおおおおおおおおおおおお!!?」」

第七話 現実逃避再来……（後書き）

最近、B i t c o m m e t でも逮捕者が出てしまいました。

私はそのソフトの愛用者ですでにランクは最上位・・・

でも、アップロードしている人だけが逮捕されて行ってるんだから・・・大丈夫だね？

では、感想とアドバイスをお待ちしております！

感想、アドバイスをお待ちしております！

第八話 我家に到着（前書き）

大変お待たせいたしました！

それでは本編をどうぞ！

第八話 我が家に到着

今の俺とリニスの表情は、アニメやマンガで表されればNGになるだろう・・・

しかし、俺たちはそんな表情をするほどにびっくりしている・・・。

いや、びっくりというより現実逃避していたと言っておこう。

賢治「・・・すっげー。」

リニス「・・・ここは本当にマンションですか？」

俺たちは今、新居の第一の玄関をくぐった所で立ち尽くしている。壁と天井は大理石、まあこれはある程度の場所に俺は何回も行った事があるので慣れている。

しかし、床がホテル等でよく見る赤い絨毯なのだ。マンションでこれはないでしようよ。

・・・前の世界のホテルじゃあグランドパレスとサンパ〇スで使われてる絨毯よりも色が鮮やかだ。

天井の照明はって・・・天井高えー、三階ぐらいまでの高さがあるよ？

シャンデリアを使うかあ・・・さすがは超高級マンション、スケールが違うね・・・

玄関から向かって左側には自動販売機・・・なんで高級マンションにあるの？

そして右側には・・・おお、警備室か。

こんにちは、お疲れさんです。

守衛「「お帰りなさいませ、黒崎会長」」

・・・敬礼しながら言ったよこの人達、てか俺の職業知ってるんかい。

リリス「・・・賢治、あなたが先程私に言った事はうそですか？」

いいえ、事実です。俺だって今だ開き直り切れてないんだもん。
しかし、広いなこの警備室。ここから見ても中はざっと見て30坪ぐらいあるぜ。

モニターは結構あるのは当たり前だけど、そのスペースを除いて30坪ぐらいだもんなあ。

レレ○のレ○パレスの部屋よりも広い・・・

それはそうと、挨拶をすませて二つ目のドアのキーロックを解除して中に入ろうか。

このロックもカードキーか。家のキーと一緒にしてあるんだなあ。
これなら警備の目を盗めたとしてもここからは中には入れないな。
それにこのドア、見た目薄いけどガラスじゃなく、なんとアクリル板だよ。

こいつは台風が直撃しても床下浸水で1階が沈んでも割れないな。

まあ、超高級マンションならこれぐらいはしないとね。

よし、カードを通して中に入ったと。

そして10メートル先にエレベーターが3台か・・・ここそんなにフロアあったっけ？

VIPはなにかと忙しいからエレベーターはこれぐらいないだめなのかな？

ああそっか、どれかストップしても大丈夫なようにか。
非常階段はどうなってんだろ・・・あとで確認しよう。

—————チイン—————

リニス「賢治、エレベーターが着きましたよ。」

賢治「ん？お、おう。」

いかんなあ、どうもこの世界に来てから考え事すると周りに気を配れなくなってる。

矯めないといけないなあ・・・

そう自己反省しているとエレベーターの扉が開いた。

はあ・・・エレベーターもか・・・もういいよ。

リニス「最上階っ」

リニスが手を伸ばして40階のボタンを押してくれた。
ああ、猫が手を頑張って伸ばして何かを押す姿って・・・かわいい
いなあ〜♪

モフモフモフモフ

リニス「・・・／／／／／」

あら？もう、なにも抵抗しないんですね？
ならば・・・遠慮なくモフモフさせてもらうぜー！ー！！

———チイン———

リニス「っ／／／賢治！つきました！つきましたよ！」

ほー！？もう着いちゃったの！？まだ30秒経ってないよ！？
台○101のエレベーターでも使ってるのかこのマンションは！？

リニス「さっ！早く行きましょう賢治！」

リニスさん、なにもそこまでしてモフモフから脱線させようとしなくてもいいじゃないですか。

やらせてくださいよ、モフモフ。

リニス「断固拒否します！」

賢治「・・・俺、口に出してました？」

御札から供給されてるから意思疎通してないはずだけなんだけど
なあ・・・

リニス「手付きで分かります！／／／」

おっと、これは失礼つかまつた

ふう、エレベーターが動いた時に少しだけGが来たけど、あとは普通のマンションのと変わらなかったな。スピードがちと速かったのが別だけど。

そして、俺たちはエレベーターから降りて直ぐに違和感を感じた。

賢治「・・・あら？」

リニス「・・・玄関が一つだけ？」

そう、エレベーターから降りて直ぐに感じた違和感は、降りて直ぐ目に入る中々大きな玄関。

そして非常階段が一つに両端にある非常窓と消火栓だけ。

賢治「・・・まさかワンフロアそのまんま俺の家ってことは。」

リニス「・・・入ってみれば分かるとおもいますよ。」

俺はリニスに言われたように玄関の取っ手に付いているカードロックにカードキーを通した。

———ピピッ———

そして横に付いてる蓋を開けて暗証番号を入れる。

暗証番号入れるのにタイムリミット付きか・・・やるねS〇C〇

M。

暗証番号をチヨチヨイのチヨイつと。

———ピピピッ———カチャン———

お、開いたか。

それでは俺の新しい家の御開帳——！

———ガチャ———

賢治・リニス

「「・・・・・・」」

扉を開けて早々このリアクション、どうかお許してください。
もうね、何から何までやり過ぎなのよゲッター線。

リニス「・・・一人暮らしでこの広さですか？」

賢治「あはは・・・」

軽く見てワンフロア200坪はあるぞ。

もう次から次へと、もうキリがねえ――――――――――

――！！

リニス「・・・キッチンもすごい・・・冷蔵庫もこんなに静かで大きいなんて。」

あれ？リニスさん？いつの間に下りたんですか？

それにキッチンに行っちゃって・・・、あく確か原作とかではリニスって家事全般やってたから、その癖で行っちゃったのかな？

賢治「にしてもフローリングは桜の木か・・・めっちゃ滑らかなのに滑らんな。」

俺は今靴下で家の中を अच्छ अच्छ 歩いているのだが、何か床に

コーティングしているのか全然滑らない。

これはお年寄りとか足に障害を持つてる人とかには最高の床だな。

賢治「ん？」

なんでこんなところにこんなものがあるの・・・？

おお、予備の為にもう一つあるし。

・・・まさかゲッター線、俺にアレをしろと言ってるのか？

リニス「賢治」

賢治「ん？おおリニス、どうだった？キッチンはお眼鏡に適ったか？」

リニス「ええ、もう最高のキッチンですよ！これなら一気に沢山の料理ができます！」

おお、リニスさんが興奮してます！

そしてその興奮に応じてシッポもハチキレンばかりに揺れていますWW

やっべえめっちゃ触りてえWW

リニス「断固拒否します！／／／／」

何!?! 俺は手をワキワキしていなかったはず!?

リニス「そんな目でシッポをガン見していれば直ぐにわかります!」
／／／

ぬぐっ・・・が、ガードが固いぜ、リニスさん。

賢治「まあいいや、それじゃあ先ずは飯だな。でもさすがに色々と疲れたからどうしよう」

さすがに夜七時を回っているし、歩き回ったから幾ら『翠屋』で食ったとしても腹が減る。

でも今日はあのカオスの後も色々あったから疲れた・・・

リニス「賢治、そういえばあの御札は一枚しか使えないのですか?」

賢治「ん? いや、確か枚数に限りはないけど器に限界が・・・あゝなるほど」

今使っている御札の枚数を増やせば出来るんじゃないかってやつか。やってみるか。

えゝっと、ここの奥に・・・あったあった。

賢治「リニス、早速試してみるぞ」

リニス「はい」

御札の使い方はとても簡単。

御札に貯めてある魔力を送りたい対象に触れさせてた後、その御札を破る。

たったこれだけ。なんの呪文も必要ない。なんて簡単なんだ・・

その代償が俺の血・・・作りすぎたら貧血起こすな、間違いなく。これをとりあえず4回繰り返してみた。
さて、どうなるかな？

リニス「!？」

突然、リニスの目が見開いて体が光りだした。

ここでまた俺は新事実を発覚した。

余談だが、生き物は物を目で見る時、瞳孔が目に入ってくる光を調整して、その物を移す。

普通ならばリニスの身体から発する光は目をつぶっても眩しいから目の前を何かで覆うのが普通だ。

しかし、俺はリニスが発する光を真正面から見つめている。

眩しいのは眩しいが、目をつぶったりする程ではない。

・・・俺はどうとう人間離れしてしまったのか。

そんな事を思っているうちに、リニスから発している光が徐々に広がって行き、その光は徐々に人の形を作っていく。

大まかな形が整い、より人の形になっていく。
そして光が弾け、人間フォルムになったリニスが現れた。

おお、大成功！

リニス「・・・すごい、あの御札でこれだけの魔力を供給ができる
だなんて」

賢治「ん？あの御札一枚でお前の山猫フォルムを維持できるだけだ
ろ？」

リニス「いいえ、あの一枚で山猫の状態を魔法を使わなければ3日
間は持たせることはできます」

マジですか・・・

賢治「ちなみに・・・今のランクはどれぐらい？」

リニス「・・・S—ありますよ」

・・・ん、とてもパワフルな使い捨て電池ですね、あの
御札。

リニス「ですが、これで料理を作る事ができます！さっそく作りま
す！」

おお、リニスさんが小走りでキッチンに行っちゃったよ。
そんなにあのキッチンで料理がしたいのかね。
ん？なんで冷蔵庫開けて固まってるのかな？

賢治「リニス、どうしたのん？」

リニス「・・・賢治、この食材や調味料は全て貴方が買ったもので
すか？」

ん・・・ゲッター線がやったと思うんだけど、なにかあったの
ん？

リニス「この食材・・・どれを使ってもいいのですね？」

賢治「おお？おう、別にいいけど・・・」

リニス「では・・・さっそく使わせてもらいます！」

おおお！？リニスさんに火が点いてしまいました！
そんなに火が点くほどの食材が入ってたの？どれどれ。

（。ん。）

やってくれるね〜ゲッター線。

どれも鮮度抜群の状態で保存されてる今が旬の食材ばかり。
てかりニスさん、あなたは今から何を作る気なんですか？

何か鍋を取り出してグツグツ煮込んでますけど・・・

おお、圧力鍋まで。しかも厨房で使うやつ並にデカイ。

お？その中に鍋ごと入れました・・・

鍋をあのまま入れる料理・・・ビーフシチューか。

リニス「賢治、料理が出来たら呼びますので待っていてくださいね」

賢治「ほいほい」

まあ、リニスさんが楽しそうにしているなら別にいいか。

俺は料理ができるまでの間、カタログや色々なものに目を通しとこ。

第八話 我家に到着（後書き）

・・・バイトで平均８時間、内に三回９時間超え・・・

それに休憩時間がないのって・・・どうおもいます？

感想、アドバイスをお待ちしております！

第九話 資料の確認とゲッター線のメッセージ(前書き)

よっしゃー！

一週間掛からず投稿できたー！ー！ー！

そして店長が替わったー！ー！ー！ー！

第九話 資料の確認とゲッター線のメッセージ

ペラ・・・・・・・・ペラ・・・・・・・・

リニスが晩飯を作っている間、俺はリビングでカバンに入っていたカタログを読んでいた。

しかしそのカタログなのだが、街にいる時よりも結構分厚くなっていた・・・・何が追加されたんだ？

先ず最初に見たのがよく就職資料などで貰われる内容だった。

その内容も恐らく大学生達が見れば絶対にここに入りたいと思うようなすごい待遇だった。

その反面、役に立たないと判断された場合は直ぐに切り捨てられる。

・・・・アメリカのやり方と同じだな。

俺の発想が日本で・・・・というよりアジアで適応されるかと社長クラスが不安になっていたが、これが案外ヒットしたみたいだ。

ただ楽して入りたいやら何やらのやる気のない奴らは、この会社の方針なんざどうせ嘘だろうと思って入ったみたいだが、方針通りに使えないと判断された社員はどんどんリストラされて行き、逆にやる気のある、向上心のある者達だけが残っていった。

さらには実力主義でもあるので、計画を発案したり、積極的に会議で発言をしたり質問したりする社員も上司達から認められ、昇進

していくようだ。

そのおかげで社員の虐めや人間関係のトラブルが大手企業の中で一番少ないにまでなった。

また、人種差別や家柄の差別もなく、非常にフレンドリーでアットホームな会社である。

へー、めっちゃくちゃいい会社じゃん。この様子なら社員たちのストレスも少ないのかな？

賢治「おっし、この資料は読み終わった。さて次の資料は……ん？」

次の資料はと思って新しく入っていた封筒の中身を取り出ししてみたら、今まで見てきたパンフレットのようなものではなく、重要機密の雰囲気醸している分厚い紙の束が出てきた。

賢治「……大きな会社となると裏で何をやるか分からんのがお約束だけど、まさかウチもなんかねえ」

俺は機密事項と赤く記されている一枚目の表紙を上にくくり上げた。

しかし、そこにはとんでもない事が記されていた。

賢治「なっ！？げ、ゲッターG計画！？」

リニス「~~~~♪、？」

いっけね、声に出しちゃったよ・・・リニスに計画のこと聞こえてなきやいいけど。

しかし・・・なんでまたゲッターGを、それも量産。

まさか、OVAみたいに真ドラゴンにでもする気か？

いやいや、あれはあきらかに地球・・・いや、どこの世界にもにゅーっと足が出来たりゲッター合金が増殖したりする技術があるかってんだよ。

いくら俺にゲッター線の知識が流れ込んできたからってそう簡単に作れるわけ・・・

あれ？もうゲッターGできてるの？しかもゲッターG部隊？マジで？

どれどれ。

ゲッタードラゴン

全長 2, 2 m

重量 1 t

使用技

ダブルトマホーク

ダブルトマホークブーメラン

スピンカッター

ゲッターライガー

全長 2, 2 m

重量 1 t

使用技 ライガードリル

マッハスペシャル(時速200km)

ゲッターポセイドン

全長 2 m

重量 1 t

使用技 フィンガーネット(電流有)

ゲッターサイクロン(重さ約60kgまでは吹き飛ばす)

ほうほう、どれもまだプロトタイプの段階か。

ドラゴンも空を飛ばず、ビームも撃てずか。

ライガーもまた空を飛ばず、チェーンアタックにライガーミサイルが放てず。

ポセイドンは足がキャタピラになれず、ストロングミサイルが放てない。

加えて大雪山おろしも出来ず・・・か。

なんでゲッターサイクロンができて大雪山おろしができないのか疑問だな。

それとこいつらは偽のほうじゃなく原作の方を使ってるみたいだな。

カラーバリエーションがもろ原作、それにポセイドンのミサイルが小さい。

ライガーは右手がドリルに変形するのかな？でもゲッター合金じゃないから・・・無理よね？

まあ、これから俺が社員達と一緒に作っていけばいいか。

今の俺なら本物のゲッターとはいかないけど、近いぐらいまでは再現できる知識があるし。

それでもこのスペックであのとらハの世界で超最大規模のテロ組織『龍』を各機10体ずつで本部を殲滅できたんだから上等だよなあ。

てか自衛隊必要なくならね？

賢治「ん？」

おいおい・・・ウチはこんなもんまで持ってるのかよ。

ウチの社員って何者の集まり？あとで名簿見てみよ。

次の資料を見るのが恐いな・・・ん？何か挟まってる。なんだこれ？手紙？

その手紙らしき物の封を切って中身を取り出して広げて俺は読み始めた。

『黒崎 賢治よ

この手紙を読んでいるということはゲッターGについてある程度は目を通したと言うことだな。

先ず始めに、お前への待遇は我々が何も考えなしでした訳ではない。

これから先で起こる戦いの為の下準備でもあり、お前が活動するにあたって有効な盾となる為だ。

先とは何時のことか、それはまだハッキリしていないため教えられないが、少なくともお前が力に覚醒し、使いこなせるようになってからというのは確かだ。

そしてその時、必ずゲッターGが必要となる。

地球では使う必要は恐らくないが、使う場合はお前が判断しろ。

そのゲッターGはある程度その地球で再現できるところまでは再現した。あとはお前が完成させればいい。

お前が力に覚醒した時、また合間見える事になる。

その時まで今の状況を把握しておけ。

お前の新たな生活に幸があらん事を祈っている。

』

……え？我々？ゲッター線なのに複数扱い？

あれ？ゲッター線ってエネルギーの源だから……ん？守護者でもないのか？

待てよ、今思えばあの時に聞こえた声と話した時の声って武蔵じゃなかった気がしてきた。

リニス「賢治、食事の用意ができましたよ。」

賢治「ん？おうわかった。直ぐ行くよ。」

まあ、そのうちわかることだろ。

どうせ原作介入することになるのは、目に見えてるんだし。

第九話 資料の確認とゲッター線のメッセージ（後書き）

次回はリニスがプレシアたちの事を話します！

感想、アドバイスをお待ちしております！

やったー！時給が上がるー！ー！ー！ー！ー！ー！

第十話 原作との違い（前書き）

大変ながらも待たせいたしました！

ここに書いてあるゲッター線の能力は完全にオリジナルですので混乱のないようお願いいたします。

それでは、どうぞ！

第十話 原作との違い

あゝ、いい湯だった。今日の疲れがゆっくり取れたぜ。

まさか風呂まであんなにデカイとは思わなかったけど、もういち驚いていたらキリがないから開き直すしかない・・・ゲッター線だから仕方ないという方針で行こう・・・

にしても、リニスの飯うまかったな。

たった一時間であれだけの料理を一から作っちまうんだもんなあ。本人は俺がアレだけ食ったのに舌巻いてたけど。

――一時は一時間前――

賢治「ふう、食った食ったあ。うまかったぜリニス、ごちそうさま」

リニス「・・・・・・・・」

賢治「ん？どうしたのさ？」

リニス「いえ、小腹が空いたでコレだけの量を完食とは……」

まあねえ。本日のディナーは、

ビーフシチュー・ミネストローネ・ポテトサラダ・鯛のムニエル・
紅茶・レアチーズケーキ。

見事にフルコースが揃ってました。

いやいや、貴方の料理の腕がいいのが悪いのですよりニスさん？
俺の小腹が空いたは本来、UFOでも食べるかなうぐらいなのに
それにいくら食材や調理器具が最高級で興奮しちゃったって言っ
てもここまで作っちゃいますか？

賢治「まあ、俺は元から結構食う方だからな。それでも空腹の時の
半分以下だぜ」

リニス「そうですか……ボソ（空腹の時は腕の揮い甲斐がありま
すね）」

リニスさん……目を光らせながらボソボソ言わないでください。
恐いですよ。今の貴方なら何かに進化しそうです（汗）

賢治「あゝ……明日の仕込みとかでもしときな。俺は風呂入れて
序に入ってくるから」

しかし、リニスにこれからのことをどう説明するべきか悩むなあ……

一応俺は異世界から戻ってきたって説明したんだけど、ロビーでの事もあるし、リニスの事だ。もう俺がただ異世界から戻ってきたってだけじゃないことは気付いてるだろう。

でも、俺の事を教えるにしてもゲッター線のこととかはどうしようか。

まだ俺の戦闘能力を試してってたか二回……けどあれじゃ試したにならんしなあ。雑魚かったし。

仕方ない、ゲッター線のことはまだ俺も把握しきれていないから使えるようになってから説明しよう。

俺は頭の中で考え事をしながら階段を下りて行き、リビングへと向かった。

リビングに着くと、リニスが丁度キッチンから出てきたところだったのでリニスに風呂に向かわせた。

え？服はどうするのかって？風呂場の……なんていうのかな、着替え場？みたいなところの棚空いたら男用と女用の浴衣と下着があったのよ。

……勿論、別々だよ？ゲッター線もさすがにそれは弁えてるでしょう。

さて、風呂上りの冷たい飲み物でも飲みますかな。

冷蔵庫には何が入っているのかな〜って・・・食材と調味料ばかりじゃん！

なんで飲み物がないの！？って、あれ？冷蔵庫の上のあれはなんだ？

見た所、手動で開ける型じゃないから何かスイッチがあるのか？え〜っと、近くにそれらしき物は〜、ん？冷蔵庫の手摺にボタンが、ポチツとな。

——ガチャ——ガラガラガラ——

冷蔵庫の上に付いているの扉が下を開き、そして俺の腰のあたりまで伸び降りてきた。

おお、これは俺が子供の頃に憧れていた昇降式冷蔵庫ではないか！うっひょー！飲み物の天国が今ここに！

何にするかな〜、やっぱり風呂上りにはヤクルトでしょう。

それにはカルピスを取って、スイッチをポチツとな。

——ウィーン——ボタン——

うーん、これは小さい子が絶対に興奮するな。

今の俺でもかなり感動してるもん。

さて、お菓子はどこだ。

上が飲み物、中央のデカイのが食材、下は・・・多分冷凍だな。
じゃあ他になにか・・・お？床下収納とか今時のマンションでもあるの？

おー、開けてみたらまたもや天国！

床下にはポテチとかの暗所のお菓子か。

ということは、チョコとかは別の冷蔵庫にあるんだな。今度探してみよ。

時は少し経って、俺がリビングでポテチとカルピスを賞味しながらニュースを見ていると、リナスが階段から降りてくるのが見えた。

賢治「おお上がったか。疲れは取れたか？」

リナス「ええ、ただ・・・お風呂があんなに大きいとはさすがに思いませんでした・・・」

・・・んー、このスケールの説明もどうしよう。

まあ、とりあえずプレシア達の情報を教えてもらわないとな。

ゲッター線が言っていた災厄・・・最初はジュエルシードを巡っての事件だろうな。

恐らくだが、リナスがあそこにいたということは無印がスタート

したかしていないかだ。
無印がスタートしていれば、フェイトとアルフが直ぐに気付いているはず。

賢治「リニス、そろそろ教えてくれ。何故使い魔であるお前がそこで契約破棄されて倒れていたのかを」

リニス「・・・はい」

リニスは近くにあるソファアに座り、目を閉じて深呼吸をして気を落ち着かせ、ゆっくりと語り始めた。

なるほどね、ここまでは二次小説でよくあるパターンだな。

魔力炉の暴走により、愛娘アリシアを失う。

そして、ある男からの提案のプロジェクトFでアリシアを創り、成功したものゝか。

しかし、なんで初めから分らなかったんだ？

人は物じゃないんだ。魂が一つしかないんだから換えなんぞ作れるわけなかるうに・・・

リニス「私は、フェイトをプレシアから守る為に、プレシアと対峙しました。ですが、その時に契約破棄をされたと同時にランダム転移を受けました」

・・・ここからが原作との違いか。

リニスは契約破棄されたといった。

原作だと確か魔力が切れて消えたかなんとかだった気がするが・

・
ん？ランダム転移？

なんで契約破棄されたりニスがランダム（・・・）転移をされただんだ？

契約を破棄したら使い魔は魔力が底を尽いたら消えるのに・・・
・・・まさかプレシア、俺が今思った事を望んでリニスに託したのか？

賢治「リニス、そのプレシアが契約破棄をした時、どんな表情だった？」

リニス「表情・・・表情ですか？」

賢治「うん、お前がランダム転移される時にプレシアを見たんだろ？」

リニス「・・・あの時は私も切羽詰っていてよく覚えていませんが、何か口を動かしていた気がします」

・・・やっぱりな、なら俺が思っている事は当たり前かな？

賢治「よし、大体わかった。ならリニス、お前は暫くの間俺の使い魔ということでもいいな？」

リニス「はい、そうしなければ私は生きられないので貴方が迷惑でなければ・・・よろしいですか？」

賢治「いいよ、むしろお前が作る飯が楽しみだからな。そのフェイトって子を助ける為に暫くウチで休んでいけ。そういえばさつき風呂に行く途中に俺の仕事部屋を見つけてな。そこに大量の世界各国の料理本があった。ウチのキッチンが使える時に使っておけ」

おっと、リニスさんの目が光りましたね。

俺はタイ料理とかの酸味というか・・・ああいうすっぱいのが出ない限りは食えるけど・・・まあ、リニスは山猫だから酸味の強いのかは好んで作らんだろう。

間違ってもイギリス料理は作らないよね？あの味のない精進料理みたいな・・・

リニス「では・・・賢治、貴方の事を私に教えて貰ってもよろしいですか？」

賢治「・・・ふー、どうやって説明するかなあ。俺自身、まだよくわかってないんだよ」

リニス「？自分のことなのによくわからないとは、どういうことで

すか？」

まあ、リニスなら俺の個人情報を探るのはお茶の子サイサイだろう。

なんてったってバックアップのスペシャリストなんだし。

けどこっから先のこと・・・リニスに教えてもいいんかね？

まあ、ゲッター線のこととは軽く触れさせるぐらいでいいかな？

賢治「そのまんまだよ。俺はこの世界に来る前までは向こうの世界で生まれ育ったんだ。ところがな、ゲッター線っていうエネルギーが、『お前は这个世界で生まれるはずだった存在だったが災厄によってその世界で生まれる事になった。よって、お前を今連れ戻すと同時にこの世界の災厄を取り除け』って言って、俺の分身を向こうの世界に残して本体の俺をこの世界に連れてきたって訳。

そんでもって、いきなり放り出されても無一文で衣食住できんからゲッター線がここまでしてくれたってことぐらいかな。」

まあ、ゲッター線についてはあまり触れないでくれ。俺もまだ完全に理解していないし、間違った解釈をしているかもしれないから。とりあえず教えられるのはここまでだ」

うわー、リニスさん納得いってないって顔してますよ。」

仕方ねえじゃんよ、まだ俺は自分がなんの能力を使えるかどうかわからんのだから・・・

・・・でも、ゲッターの武装を使うのはもう目に見えてるけどな。

賢治「まあ、とりあえずはここで話は終わろう。後はこれから起こ

る災厄にどう対処するかが問題だ」

リニス「・・・ふう、そうするしかないようですね。分かりました。」

といってリニスはソファから立ち上がり、俺の前までやってきて右手を差し出す。

リニス「賢治、プレシアを止めるまでの間、どうぞよろしくお願いします」

俺も立ち上がり、リニスに右手を差し出し、握手をした。

賢治「こちらこそ、よろしくな、リニス。短くなるか長くなるかは、これから起こる事によって左右するがな」

さあて、どうやって介入しますかねえ・・・ジュエルシード争奪戦に！！

第十話 原作との違い（後書き）

感想、アドバイスをお待ちしております！

第十一話 戻ってきた能力の欠片（前書き）

御久しぶりです。とても難産でした・・・

戦闘描写がとても難しいです・・・

第十一話 戻ってきた能力の欠片

リニス side

??? 『助けて・・・誰か、魔法の力を・・・』

皆様初めまして、こうして自己紹介をするのは初めてですね。リニスです。

私は三日前、魔力切れで倒れていたところを賢治に助けられ、今は彼の身の回りのお世話をさせてもらっています。

そして今日の明け方、私が眠っている最中に全体念話をキャッチしました。

その発信源は傷ついた少年の様です。

何があったのでしょうか、念話は魔法が使える者にしか聞こえないはずなのに、何故魔法文化のない地球で念話を・・・これは賢治に伝えた方がいいのでしょうか。

賢治「ん？おはようリニス。何か朝っぱらから思い悩んでるようだが、何かあったのか？」

おや、賢治が丁度いいタイミングで起きてきたようです。
さっそく今日の念話の事について伝えておきましょう。

リニス「おはようございます・・・実は、私が眠っている時に念話をキャッチしました」

賢治「念話？」

リニス「はい、その念話はどうかやら少年が発していて、助けを求めています」

賢治「・・・・・・・・」

リニス「賢治？」

賢治「リニス、その少年ってのは・・・どこかの民族衣装みたいなのを着用していた金髪に近い色をした子じゃなかったか？」

リニス「その通りですが・・・賢治も念話をキャッチしたのですか？」

賢治「いや、俺はこの世界で起こる大まかな事を断片的にしか知らんが、どうやらこれは当たりのようだ」

リニス「賢治、まさかこの念話が、貴方の言っていた災厄の・・・？」

賢治「・・・ああ、ついに上がったか」

プレシア・テストロッサ事件の狼煙が・・・

賢治 side

今朝、リニスが言っていた傷ついた少年ってのは十中八九ユーノだろうな。

ということは、ついに始まったか・・・さて、どうやって介入しようか。

まだ力の方は何も試していないんだけど・・・

俺はこの三日間何をしていたかというと、自分の書齋に籠って自分の知識が今どれくらいあるのか確かめていたんだよ。

いくらなんでも何の経営学も持っていなかったら事業仕分けで真っ先に消されるし（汗）

まあ、さすがは初期設定でオツ○スフォード大学主席卒業となっているだけに、俺の知識がとんでもなく膨大だった。

できればこの知識量の一部でもいいから元の世界の俺に分けてあげたい・・・そうすれば、麻○大学の獣医学科に行けたのに（涙）
数学なんてクソ食らえ！なんだよ数列って！意味分からんよ！何に使うんだよ！！

え？それ以前から苦手だったろって？

そうだよ！数？Bから既に躓いてたよ！文句あっかちくしょう！！

まあ、それはおいといて、知識の確認が終わってさあ身体能力テストかね！と思った矢先にこれか・・・

まだ戦闘能力試してないのにどうやって介入しよう・・・てか、時期をどうしよう。

なのはちゃんが力に目覚める時に介入するか、あのKYがやってくる時に介入するか、迷うな。

どっちにしる介入しない限りはプレシアのところにはいけないんだし。

うーん・・・かと言って、ゲッターG部隊を導入すればカオスになるしなあ。

たぶんなのはちゃん達にあの光景を見せれば下手したらトラウマを植え付けてしまうだろうし・・・

リニス「賢治、なにかお悩みのようですが？」

賢治「ん？ああ、この三日間、俺は書斎に籠って知識量を確認していたろ？戦闘能力はその後に確認しようと思ってたんだけど、それをする前に事件が起こっちゃうからね・・・ぶつけ本番で行くかどうか迷ってたんだ。さすがに一人でやるには厳しいしな、こればかりは。」

リニス「そうですか・・・でしたら、私と今から試してみませんか？」

賢治「え、お前と？いやいや、お前は遠距離を主としてるんだろ？俺は近接よ？」

リニス「いえ、ご心配なさらず、私も貴方と仮契約をしてから手に入れた力を試してみたいので」

手に入れた？あの御札になんかオプションでもついているのか？

リニス「ではさっそくあの公園に行きましょう。あそこで結界を張っておけば周りに被害は及びませんし、人に見られることもありませんから」

――海鳴公園――

てなわけで作ってきました海鳴公園。

いやゝ、結界の中って妙な感覚がするんだねゝ。

なんかこう、落ち着かないというか、居心地の悪いような感覚？しかし、その中でリニスは結界を維持する為か、御札をバンバン使っています。

おいおい、結界を維持するのにそんなに魔力使うのか？

賢治「おいおいリニス、いくらなんでも使いすぎじゃね？」

リニス「いえ、私はこの御札に含まれている魔力しか使えない上に底を尽いてしまったら消えてしまいますから。それにこれからあな

たの戦闘能力と私の新しい力を試すにはこれくらいは必要です」

さいですか、でもその御札の残りを数えてから使ってくださいね。
あなたの足元に目を移せば焚き火でもするのかってぐらいに溜ま
ってますから。

リニス「では、始めましょうか」

そういつてリニスは構えをとった。

リニス「私は今、魔法で身体強化をしています。この世界で言うな
ら車に撥ねられても無傷で居られるので遠慮なく打って来てくださ
い。」

賢治「ほいほい、ほんじゃま遠慮なく。」

まあ、武器がないから今は徒手で行くしかないな。

まずは俺が何を習得しているかなんだが・・・やっていけば出て
くるだろ。

多分、ゲッター線が俺に返した物の中にそれがはいってるはず。

賢治「しっ!」

俺はリニスに右ストレートを繰り出したが、避けられた。速いな

賢治「おりゃあ!!」

次は左ストレートを繰り出し、その勢いを利用して左右からのラッシュをリニスに放つ。

リニスが後ろに跳んで避ければ、踏み込んで追いかけて、左右に動いても追いかけて攻撃をしていく。

リニスは俺の攻撃をギリギリで避けていたが、俺のラッシュできつくなったのか、途中から俺の攻撃を捌くようになった。

途中から俺は蹴りも混ぜて攻撃し、捌けないと思った攻撃はシールドを張って防いでいた。

そこで動きが止まるのを俺は易々と逃さない。

シールドを張り、俺の攻撃を防ぐのにリニスは精一杯のようだ。

それに、僅かにシールドからミシミシと輝が入る音が聞こえた。もう一踏ん張りってどこか。ならば!!

右腕を腰にまで引き付けて右拳に闘気を纏わせ、左手を添える。

この動作に何かを感じたのか、リニスは避けようにも間に合わないという悟り、シールドにありったけの魔力を注いだ。

俺はその拳を開き、左手を合わせてその闘気を解き放つ!

賢治「獅子戦吼!!」

ゴォォウ!!

放たれた闘気は獅子の形を模して、前方で展開しているシールドにぶつかった。

その闘気がリニスの張ったシールドを破壊し、リニスにも衝撃が襲い掛かる。

リニス「くっ!？」

リニスは後ろに飛ぶ事でダメージを軽減したが、俺の闘気に当てられたのか冷や汗を流している。

リニス「・・・恐ろしいですね。こて試しに出した技がこれほどとは・・・」

賢治「ははは、俺も驚いてるよ。まさか戻ってきた能力の中にこんなまであったとはね」

まあ、テイルズ系の技はゲームとかで熟知しているから使いやすいっっちゃぁ使いやすいかな。

これから鍛練していけば奥義辺りまではいけるかな？

リニス「それに・・・今ので結構な魔力を消費しました」

賢治「・・・え？消費って、シールド破壊しただけで？」

リニス「いいえ、途中から身体強化に魔力を更に加えてです。何者ですか貴方は・・・速いに加えて攻撃が鋭い。魔法が使える者でも出来ませんよ」

賢治「まあ・・・これが俺の力の一部さ。まだまだこんなもんじゃないが、ここで今日は御開きだな」

リニス「ええ・・・残念ですが、やはり正規の契約ではないので直ぐに魔力が・・・」

獅子戦吼を食らわしてからリニスから感じる魔力が弱まっている。このまま俺と組み手を続けていたらもう魔力が空になるだろうからここで終わり。

まあ、これぐらいの強さが分かったただけでも十分な収穫だな。

あとは、何時再び念話が飛んでくるかだよなあ・・・夜つてのは分かってんだけど何時だっけか？」

賢治「リニス、次に念話をキャッチしたら俺に教えてくれ。その時俺が行く」

リニス「ですが、魔法が・・・いいえ、貴方なら魔導師相手でも十分に倒せますね。例えばバインドをされても闘気で破りそうです」

おいおい、そんな顔を背けながら呆れた表情で言うなよ。
さすがにバインド食らったらやべえって。

賢治「ほんじゃま、家に帰るとしますか」

リニス「はい。帰ってお茶にしましょう」

さて、後は夜になるまでのんびりと寛いでいますかあ。

・・・原作通りに進めばいいけど。

アンケート結果発表!!

感想版とメッセージボックスに送られてきたアンケートの集計結果、

一番の『なのはが初めてジュエルシードを封印するところから介入』に決定いたしました!!

他の選択をしてくださった方々もありがとうございました!!

皆様のご協力によって物語が進めるようになりました!!

今回の投稿は一週間後になると思いますが、

これからこの作品をよろしくお願いいたします!

ご協力ありがとうございました!!

それでは次回をお楽しみに!!!

第十二話 原作の始まり、そして災厄と介入（前書き）

ウイーーーーー！

やっと更新できまっせ！

大変お待たせしました！

待っていてくださった方が居られれば大変嬉しく思います！！

それではどうぞ！！

第十二話 原作の始まり、そして災厄と介入

なのはside

今日の放課後、アリサちゃんとすずかちゃんと一緒に塾に向かう途中で、アリサちゃんが近道が公園にあるとのことで公園に入りました。

でも、その近道が・・・薄暗くてちょっと恐かったです。

アリサちゃんが言っていた近道を歩いている途中で、なのははふとあることを思い出しました。

そう、ここは私が今朝夢を見た場所とそっくりで、変わった服を着た男の子が何かと戦っていた場所なんです。

アリサ「なのは？」

すずか「なのはちゃん、どうしたの？」

なのは「え？ううん、なんでもないよ、行こう！」

そのことに戸惑っていたなのはを、二人は心配してくれました。でも、夢に出てきた場所と実際にある場所が一緒になることは良くある事ですよね・・・

??? 『助けて・・・』

なのは「ふえ？」

今、なにか聞こえたような・・・？

アリサ「なのは？」

アリサちゃん達は聞こえなかったのかな？

なのは「今、何か聞こえなかった？」

アリサ「何かって？」

なのは「なんか、声みたいなの・・・」

すずか「んゝ、何も聞こえなかったよ？」

アリサ「別に聞こえなかったけど・・・」

そっか・・・って、やめて！そんな貴方頭大丈夫みたいな目で見ないで！

だってだって聞こえたんだもん！助けてって聞こえたんだもん！
・・・もしかして、なのはだけ幽霊とお話が出来るように？

??? 『助けて・・・!』

にゃー!ーまた聞こえたの!

もう夜中にこっそりお菓子食べたりしないから出てこないでー
!・・・

あれ? でも助けてって言うてる・・・あ!?

アリサ 「なのは!？」

すずか 「どうしたのって、あ!」

近道の真ん中に首に宝石を付けたフェレットに似た動物が怪我を
して倒れていました。

もしかしたらこの子がなのはを呼んでいたのかな?

アリサ 「どうしたのよなのは、急に走り出して!？」

すずか 「あ、見て動物が怪我してるみたい!」

アリサ 「この近くの病院ってどこよ!？」

すずか 「獣医さんだよ! 待ってて、今お家に連絡して聞いてみるか
ら!」

フェレット君（♂だったから）は傷は酷くなかったけど衰弱していたから獣医さんのところで一日入院する事になりました。

すずか「可愛かったねーあの子。」

アリサ「うんうん、でもなのはのことをずっと見ていたのがちよつとね・・・ムカツク。」

なのは「にゃ！？な、なんでそんなにムカついたりするの？アリサちゃんの家には犬がいっぱいいるじゃん・・・」

アリサ「うるさいうるさいうるさい！それはそれ！これはこれ！」

あ、アリサちゃん。それは中の人のネタなの・・・

あれ？なのはは一体何を言って・・・？？？？

アリサ「あんたなんか今日出された課題に埋もれて寝不足で学校に来てまた寝て怒られてしまえー！！！」

なのは「にゃ！！！？わ・・・忘れてたの。」

すずか「あはは、がんばってね、なのはちゃん。」

なのは「あううう・・・課題・・・」

――高町家 夜――

うう、やっと課題が終わったのお。

授業中に居眠りしてたのはが悪いのは悪いけど、その罰としてこの量はないよう。

よりにもよって国語なんて・・・先生は絶対なのはが苦手な科目を選んだの・・・

寝てたのは社会の時間なのに：

ふふふ・・・先生、なのはとOHANASIなの・・・

さてと、アリサちゃんとすずかちゃんにあの子がウチで引き取れる事になったことを伝えないと。

――ピッ――

送信完了っと。

もうこんな時間・・・明日も学校あるし、早く寝ないと――――

??? 『聞こえますか？僕の声が、聞こえますか？』

ふえ、これって昼間の声と同じ声！

??? 『聞いてください。僕の声が聞こえるあなた、お願いします。僕に少し力を貸してくださいっ』

誰、まさか、あのフェレット君が話し掛けているの！？

??? 『お願い、早く僕のところへ！時間が・・・危険な・・・』

そう言った後に、声は聞こえなくなりました。

気になったのはは、家族にばれないように家を出てて向かいます。

そう、榎原動物病院・・・

なのはが今一番思いつく場所はあるそこだけだから・・・

賢治 side

リニスから念話が届いたと聞いた俺は、家を出て榎原動物病院へと向かって走っている。

下手に乗り物を見られた時に直ぐにバレるのを防ぐ為だ。

俺の記憶が正しければ、確かあの近くでジュエルシードの思念体がユーノを追っかけまわしていたはず。

といっても、リニスがあそこで倒れていたってだけで既に原作とは変わっているんだけどね・・・

問題は災厄がどういった形で現れるかなんだけどなあ。

賢治「・・・ん？」

なんだ、この禍々しい感じは？

あの動物病院の方角から感じる・・・！！

まさか！やばい！！

俺はリニスとの戦闘の際に見つけた体技を使って向かう。

なんとか間に合ってくれ！！

・・・検討違いな答えが返ってきたに加えて相当なダメージ受けたの・・・って？

なのは「資質？」

??? 「ぼ、僕はある探し物のためにここではない世界から来ました。でも僕一人の力では思いを遂げられないかもしれない。だから、迷惑と分かってはいるんですが、資質を持った人に協力して欲しくて、お礼はします！必ずします！！僕の持っている力をあなたに使ってほしいんです！僕の力を、魔法の力を！！うつぶ・・・」

なのは「ま、魔法・・・？」

すると地面になのはとフェレット君以外の影が重なったんでふと上を見ると、さっきの毛むくじゃらが形を変えながら降ってきました。

なのは達は電柱に隠れてなんとか被害を逃れましたが、何時襲ってくるかわからないので、直ぐにまた走って逃げだします。

な、なんだかよくわかんないけど、この状況をどうにかできるみたいだから協力するしかないかも！？

なのは「わ、わかったの。じゃあどうすれば！？」

??? 「これを！」

そういつて渡してきたのはフェレット君の首に付いてた宝石でした。

その宝石を手にとってみると、トクンと鼓動を感じました。
優しく、包み込んでくれるような暖かさを・・・

なのは「これでどうするの!？」

??? 「僕の言うことを復唱して！」

??? 「我使命を受けし者なり」

なのは「我使命を受けし者なり」

??? 「契約の元その力を解き放て」

なのは「えっと、契約の元その力を解き放て」

??? 「風は空に、星は天に」

なのは「風は空に、星は天に」

??? 「そして、不屈の心は」

なのは「そして、不屈の心は」

「「この胸に!!」」

「「この手に魔法を! レイジングハート、セットアップ!!」」

その言葉と共に私はフェレット君からもらった宝石を上にかかげる。

レイジ「Stand by ready set up!」

レイジングハートから音声が流れると共に巨大な光が現れ、私は光の中に。

??? 「す、凄い・・・! 何て魔力なんだ!」

フェレット君はなのはが発する巨大な魔力に驚いていた。

しかしすぐに立ち直ってなのはに指示を出した。

??? 「落ち着いてイメージして! 君の魔法を制御する魔法の杖の姿を! そして君の身を守る強い衣服の姿を!!」

なのは「そんな急に言われても、えっとえっと・・・!」

いきなり言われたものの、なのはは急いで考え始めた。

なのは「と、とりあえずこれで！」

となのはがイメージを纏めると、なのはと宝石に変化が起きました。

なのはの服が普段から着ている制服をベースとし胸元に赤いリボンが付いたものへと変わり、宝石は杖へと変化したのです。

???? 「成功だ」

なのはの変化を見てなのはの足下にいたフレット君が呟く。

なのは「ふえ、ふええ！？ 嘘何なのこれ！？」

なのはの姿は学校の制服にちょっと付け足したようなものです。だって、そんな直ぐに自分になりたいような姿なんて思いつくわけないもん。

???? 「グオオー！！！！」

そうこうしている内に、毛むくじやはまた形を変えてなのは達
に突進してきました。

なのはは反射的に杖になったレイジングハートを前に掲げてしま
いました、その時レイジングハートが動きました。

レイジ『プロテクション！』

毛むくじやはレイジングハートが張ったシールドに阻まれ、直
ぐに弾き飛ばされました。

ていうか・・・今の形・・・シ〇ムシエル？

??? 「すごい・・・魔力だけであれだけ強固なプロテクションを・
・・・よし、これなら行ける！・・・っなに！？」

なのは「ふえ？」

フェレット君がレイジングハートが張ったシールドを見て、これ
なら行けると思った矢先に何か有ったようです。

なのはもそれに釣られてフェレット君の視線の先を見ると、毛む
くじやらに変化が起っていました。

具体的に言うと・・・なんか、ボコボコ内側から膨れてきてドン
ドン大きくなっている様な・・・ってあれえーーーーー！
！！！？

??? 「そんな馬鹿な、思念体が巨大化した！？」

なのは「ふええええ！ど、どうしたらいいのフェレット君！？なのは戦えないよ！？」

「……まずい！このままじゃこの街がめちゃくちゃになってしま
う！！」

「……め、めちゃくちゃになって、なのは魔法は今日初めて知ったんだよ
！？」

魔法の魔の字も触れたことないのにどうすればいいの！？
って、なんか突っ込んできたーーーーー！！？

「……（あれではいくら魔力があっても防げない！）危ない、避
けて！！」

なのは「にやあああああああああ！！？」

誰か……誰か助けて！！

??? 「吹っ飛べ! 獅子戦吼!!!」

ゴォォウ!!!

なのは「ふえ・・・? なんの音?」

なのはは、もう駄目だと思い、しゃがんだら人の声とライオンさんが吼えた様なのが聞こえました。

それに、なのはに来るはずの痛みが感じません。・・・誰が助けてくれたの?

恐る恐る目を開けて見ると、顔を下に向けていたから人の影が見えました。

でも影は一つだけしか見えません・・・あれ?

??? 「ふう、なあんであんな化け物をなのはちゃんが一人で相手をしているのかねえ?」

この声・・・!

なのは「賢治さん!!!」

賢治「やあ、なのはちゃん。大丈夫かい?」

第十二話 原作の始まり、そして災厄と介入（後書き）

更新が遅れて申し訳ありません！！

言い訳をすれば、バイト先の店長が入院することになって私ことユニコーンが半端なくシフトを入れられてしまったのです……

感想、アドバイスをお待ちしております！！

第十三話 理由はまた後日（前書き）

しまった・・・いきなり強くしすぎた・・・

第十三話 理由はまた後日

ふう、間一髪のところで間に合ったか、闘気が効いてくれてよかったぜ。

じゃなきゃ今の俺になのはちゃんを守る術は逃げることしかねえからな。

しかし、まさか災厄がこういう形で現れるとは思わなかったなあ・・・原作よりも思念体がデカくなってやがる。

軽く二倍に膨れ上がってるな・・・って、おいおいまだ進化してるよこいつ。

さつきからボコボコうねうね、オマケに眼まで赤くなりやがって・・・
○タリ神か？

なのは「い、いくら動物病院から出てきたからって、イノシシじゃないですよ？」（汗）

??? 「え？タ○リ神？」

あゝ、やっぱりこの例えはだめだったか・・・ユーノ混乱してるし。

なのはちゃんが今丁寧に教えてるけど、ってかなんでなのはちゃんにはジ○リ知ってるの？

その前にユーノ、お前さんの声丸聞こえだぞ。

念話で会話しろよ。

『グオオオー!』

??? 「っ危ない!」

いや、だからユーノ、お前まだ自分の姿がイタチだってのを忘れてないか?

その姿で人間の言葉喋ったらいかんだろうよ・・・

自分が獲物を仕留めたと思った矢先に横槍を入れてきた俺に腹を立てたのか、進化し終えた思念体は俺に襲い掛かってきた。

俺はそれを裏拳で何なく弾き飛ばし、思念体は吹っ飛んで壁を貫通して倒れた。

獅子戦吼は効いたけど、素手は流石に無理があるから気を纏ってみたけど、通用するかどうか内心ハラハラだったが、これで格闘攻撃が出来るかと判明した。

・・・これで効かなかったら身体にゲッター線纏わなきゃならなかったから、効いてよかったぜ。

にしても、コレだけすごい轟音がしたってのに誰一人、さらには窓にすら人影が見えない。

結界が張ってあるのか? 空の色が夜なのに薄紫色になってるけど。原作じゃ張ってなかったような・・・

??? 『グウウウウ・・・!』

ダメージが大きかったのか、フラフラしながら思念体は起き上がってきた。

しかし、思念体は今だ目の前の獲物を諦めていないようで、仕留めようと赤い瞳をギラギラ光らせている。

まあだやる気かこのバカタレは。おいおい、力の差はもう歴然だろうに、面倒臭え・・・まあいい、リニス相手じゃ使えなかった技、こいつで試させてもらうか!!

??? 『グオオー!』

賢治「遅いぜ!!」

俺はゲッター線を授かってから発覚した内の一つ、『ゲッター2』の脚の力を使った。

『ゲッター2』はゲッターロボの中でスピード戦を得意とする機体で、旧型でもブーストで飛べば音速を超え、走りでは亜音速で走れる機体だ。俺はその機体の能力を少し借りて、生身で亜音速を走るにはゲッター線を身体に纏ってないと危険なので、亜音速より少し遅く走った。

思念体と俺の距離は約10m。その距離を俺は約1秒で走って思念体の懐に入り、正拳突きを放つ。

思念体はその巨体を殴られた場所を支点にくの字に折れ曲がり、また吹っ飛ばされていく。

俺は吹っ飛ばされていく思念体よりも速く走って先回りし、飛んできた思念体の二本の触手を掴んだ。

賢治「くらえ!大雪山おろおし!!」

そして俺は『旧ゲッター3』の搭乗者、『巴 武蔵』の十八番大雪山おろしを繰り出して、思念体を空高く放り飛ばした。

『旧ゲッター3』の使う大雪山おろしは、両アームが螺旋状に伸びて相手を空高く投げ飛ばす技だが、俺は腕が伸びない代わりに、思念体の触手を代用にして螺旋状に振り回しながら空高く放り飛ばした。

その後俺は右手に力を込めてその場から飛び上がり、自由落下してくる思念体に力を込めた突きを食らわす！

賢治「臥龍空破！」

俺の突きで思念体は吹き飛ぶことはなかったがその場で固定された。俺は身体を無理矢理捻って思念体の上を行き、両脚に力を込めて背後を突き刺し、地面へと垂直に急降下していく！

コレで終わりだーーーーー！！！！

賢治「鷹爪蹴撃イイイ！！！」

ドッゴオオオオオン！！！！！！

轟音と共に砂埃が巻き上がった。俺は思念体から跳んでなのはち

やんより前に着地した。

賢治「ウチの縄張りに土足で踏み入れたことを後悔しな！」

ガーッハッハッハ！あゝゝすつきりした♪

なのはside

ユーノ「・・・えゝゝ、凄すぎて逆に・・・」

ユーノ君が驚き通り越して唾然としてます。でもそれはなのはも一緒です。

あ、ユーノ君とはついさっき自己紹介をしました！

いつまでもフェレット君じゃ呼びにくいし、なのはの事も君とかじゃ嫌だから。

でも賢治さん・・・すご過ぎですよ。

数日前に助けてくれた時も強いと思ってましたけど、ここまですごいとは思いませんでした。

あの大きくなった毛むくじやらを素手で圧倒してるんですよ？

しかも、消えたと思ったら凄く鈍い音がして慌ててそっちを見たらまた毛むくじやらが吹き飛ばされてて、それよりも速く賢治さんは動いて待ち構えて空へ乱暴に振り回しながら投げ飛ばして・・・

もう、何ここ、不思議の国ですか？ ってなりますよ・・・最後に決
め台詞をいいましたし。

賢治「あゝ、こいつはどうしようかねえ・・・思わずボツコボコに
しちまったけど」

ユーノ「・・・はっ！なのはさん、今のうちにジュエルシードの封
印を！また思念体が暴れだす前に！」

ええっと、暴れ出すも何も、地面にめり込んでピクピクと死にか
けてるんですけど・・・なんか毛むくじやらの方がかわいそうに思
えてきました・・・賢治さん、幾らなんでもやりすぎじゃ（汗

なのは「で、でもどうやって封印するの？」

ユーノ「心を澄ませて、心の中に貴方の呪文が浮かぶはずです。」

なのは「う、うん。やってみる。」

そして、なのはが心を落ち着かせて呪文を思い浮かべていたら、
浮かび上がってきました！

なのは「リリカルマジカル！」

なのは「封印すべきは忌まわしき器ジュエルシード！」

二人「「ジュエルシード封印!!」」

なのはの呪文にユーノ君が重なって言う。

レイジ「Sealing Mode Set up!」

レイジングハートが伸び、その伸びた部分から翼が生えた。

そして杖から帯のような物が思念体を包み込み、思念体の背中に21の数字が浮かび上がった。

レイジ「Stand by ready!」

なのは「リリカルマジカル!ジュエルシードシリアル21、封印!」

レイジ「Sealing」

その言葉とともにさらに大量の桜色の帯が毛むくじやらを貫いて、毛むくじやらはひし形の宝石に変わって宙に浮きました。

ユーノ「これが、ジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

なのは「う・・・うん。」

レイジ「Receipt number 21」

レイジングハートを宝石に近づけていくと、水晶体の中に宝石は入っていき、なのはの服が普段の私服に戻りました。

なのは「こ、これで終わったの？」

ユーノ「はい・・・協力、ありがとうございます・・・ま・・・」

なのは「ゆ、ユーノ君!？」

どうしよう!? ユーノ君が倒れちゃったよお!?

賢治side

あらら、ユーノが力尽きて倒れちゃったか。

まあ、原作のように怪我してあれだけ動けば普通は倒れるわな。

さて、まずはなのはちゃんを落ち着かせるか。さっきからオロオロしてるし。

賢治「大丈夫。見たところ、気絶してるだけだから慌てる必要はないよ。」

なのは「よ、よかった。」

俺の言葉になのはちゃんは胸を撫で下ろした。

さて、これからどうやって切り出そうかなあ・・・

なのは「あ、あの・・・」

ん？どうしたんだ？

なのは「じ、実はさっきのとか・・・色んなことなんですけど・・・
なのはにもよく分からなくて・・・この子が、私を呼んでいて・・・
それで・・・」

・・・はは、今日始めて遭遇していきなりなんのこっちゃと聞いても答えれるわけないよなあ。

賢治「じゃあ、そのフェレットなら詳しい事はわかるのかな？さつきから人間の言葉を話してたし。」

なのは「にゃ！？え、えーと、それは・・・」

賢治「ははは、まあ訳は落ち着いてからにしよう。まずは君を家まで送って行くよ。」

なのは「え？で、でも」「こんな夜遅くに小学生が出歩くのを親が許すわけがない・・・こっそり抜け出してきたんだろ？」うゝ・・・」

こうして、俺はなのはちゃんを送るために一緒に歩き出した。

・・・うゝん、この破壊し尽くされた場所、ウチが直すしかないよね？

・・・管理局が介入してきたらコッテリ搾り取ってやる（怒）
まあ、半分は俺が暴れて壊したんだけどねww

なのはside

今、なのはは賢治さんに送られて家の門に着きました。

なのはは賢治さんに御礼をして家の門を静かに潜ると忍び足で玄関まで向かいました。でも・・・

恭也「おかえり、なのは」

なのはの後ろから声が聞こえて振り向くと、そこには兄・恭也が居たのです・・・うう、やっぱりバレてました（涙）

恭也「こんな夜遅くに、何処に行ってたんだ？」

なのは「えっと、その・・・どうしてもフェレットのことが気になって、それで・・・」

どうやってこの場を切り抜けようか考えた結果、フェレットが気になったと言い、胸に抱いたフェレットをお兄ちゃんに見せました。これでなんとか切り抜けるはず・・・！

恭也「・・・そうか、だからといって、俺達に内緒で勝手に、しかもこんな夜遅く一人で出る事が許されると思ってるのか？」

なのは「うう・・・」

わかってくれても、許してくれそうにないの・・・（涙）

賢治「ははは、心配してくれる家族がいるなんて、幸せじゃないかなのはちゃん」

け、賢治さ～～～～ん！助けて～～！（涙）

賢治 side

なのはちゃんは今、兄に説教されているがそれも今の内だけだ。
もうちよつと成長して行くと、親は何も言わなくなるから自分の
為に怒ってくれてる内はありがたく怒られときなよ。

でも、さすがに今回は訳があるからなあ。助け舟出すとするか。

賢治「ははは、心配してくれる家族がいるなんて、幸せじゃないか。
なのはちゃん」

恭也「・・・お前は？」

賢治「そう警戒しなさんなって。俺は黒崎 賢治。仕事の帰りにそ
の子を見かけたからな。ここまで送ってきただけだ」

はっは、必要以上に警戒してるよこいつ。

まあ、夜遅くに自分の妹と一緒に現れたってなれば誰でも警戒す
るはするが、初っ端からお前よばわりだし、やたら態度がでかい・
・これじゃあ誰からも反感買うに決まってるわな。

恭也「そうか・・・（この男が忍や父さん達が言っていた・・・そ

うは見えないぞ？」わざわざすまない。俺は高町 恭也だ。妹が世話になった」

おろ？もつと突っかかってくると思ってたけど、急に何か納得した表情になったぞ？

この恭也は二次なりとらハナリの重度のシスコンではなく、ある程度自制が効くみたいだな。

??? 「なのは帰って来た〜？って、そちらは？」

恭也「ああ、どうやらなのはをここまで送ってくれたみたいだ」

賢治「どうも。黒崎 賢治です」

美由希「どうも、高町 美由希です！妹がお世話になりました！（この人が父さんが言ってた：とてもそうは見えないけど）」

はっはっは、今度は美由希さんが来ちまったか。

そろそろ帰るかな、遅くなりすぎるとリニスに悪いっ……はあ、まったく。

賢治「まあ、そう怒り散らすと返って逆効果になるからな。頃合いを見計らって終わりにしな。ねえ士郎さん？」

俺は恭也の後ろを見て言った。

恭也達は頭に？を浮かべた顔をしてる。

士郎「・・・何時から気付いていたんだい？」

三人「「！？」」

士郎さんが恭也の後ろから現れた。

賢治「美由希ちゃんが玄関から顔を出した時からですね。大方、俺が帰ってる途中で何か聞こうとしたのでは？」

士郎「・・・君は、本当に何者なんだい？19歳で、恭也と美由希にも気付かれなかった俺を君が気付くのはどうも腑に落ちない・・・」

賢治「まあ、後日店の方に伺いますよ。話しはその時にでもしましょう。今日はもう遅いですから」

士郎「・・・うむ、そうしよう、すまないな」

はっは、納得いかないけど、なのはちゃんが居るからここで深く追求はできんよなw

さて、そろそろ帰ろう。

賢治「では俺はこれで、お休みなさい」

なのは「お休みなさい！」

ふう、今日の介入はコレで終了・・・次は確か、チラッとしか出てこなかったが学校の校舎じゃなかったっけか？まあいい、リニスに反応があったら教えてもらおう。

第十三話 理由はまた後日（後書き）

はい、皆様毎回遅れて申し訳ありません。

主人公をいきなり強くしすぎてしまいました。

ですが、ゲッター線を授かった賢治なら、コレぐらいしないと釣り合わないですよ？・・・え？そう思うのは私だけですか？

はい、調子に乗ってすみませんでした！！

感想、アドバイスをお待ちしております！

第十四話 帰宅後、家族会議（前書き）

難産でした・・・時間が掛かったにも関わらず、これだけ短いとは・
・

それでは、どうぞ！

第十四話 帰宅後、家族会議

——ガチャ——

賢治「だたいま」

リニス「おかえりなさい、賢治」

高町家から家に帰ってきて今の時間は11時過ぎ。リニスはまだ起きてソファで本を読んでいた。

何をそんなに熱心に読んでいるのかとテーブルの上に積まれているのを見てみると、技術、医療関連の他に何とラノベの書物が積まれている。

・・・どこにあったんだよこんなにラノベ。しかも、『ゼロの使い魔』とか三期分まで山積みだし。

そして今リニスが読んでいるのは『とある魔術の禁書目録』……しかも17巻。俺が外出してる間にどんだけ熱心に読んでたんだよ。まさかマルチタスクで読んでるってことはねえよな、ラノベを・・・

賢治「何か調べたい物でもあったのか？」

リニス「ええ、この世界、管理外世界で魔法文化のないここ地球は、どの様に文明を進めているのか気になりましたので。」

賢治「ほうほう・・・んで、評価は？」

リニス「やはりミッドチルダに科学力は劣りますが、他の文化等は管理世界を含めて群を抜いているでしょうね。武道の他等も、管理世界の者が魔法を使わなければ地球に敵うことは恐らくはでしょう。料理もまた、プレシアが地球から情報を仕入れていたから知りましたし。」

おお、それは初耳だぜ。まさか料理関係の知識をプレシア自ら調達しに来ていたのか。

恐らくはまだ発狂していない時期にきたのかな？
それはそうと、なんでまたラノベを？

リニス「たまたま書齋の中を漁っていたらそのコーナーがあったので読んでみました。」

・・・感想は？

リニス「主人公の不幸具合が最高ですw」

リ、リニスが毒されてしまった！？

おお、何と言う事だ、何と言う事なんだ・・・使い魔までオタクの世界に引きずりこんでしまうとは、恐るべし、ジャパニーズサブカルチャー。まだ見ぬアルフは大丈夫なのだろうか？プロレスとか見て影響受けてなきやいいけど・・・

リニス「しかし、この世界の法律を見たところ子供は重宝されていますね。主に先進国では15歳までは義務教育としてを受け、卒業後は自由に選択できる。進学もよし、働くもよし。しかし、進学した方がプラスになるのは確実で、もし学費が全額払えないとしても補助金も申し込めば出る。管理局とは大違いですね。」

賢治「ああ、まあその補助金も足りなくて学校に行けないって家庭もあるけど、大抵はそれで間に合ってるな。それに、特に日本は子供は国の宝とされているからな。子供をさも当たり前のように血生臭い戦場や汚い権力争いに巻き込む管理局とは絶対に分かり合えないよ。」

まあ、俺が管理局を嫌うのはそれも含まれてるんだけどね。

子供・・・それもまだ右も左も知らない7歳の子供を戦場に送り込むんだからなあ。

無印でもなのはちゃんは管理局に一時的に協力したけど、それも結局は誘導して入れたもんだし。

どうしようか・・・録音でもしてネタにしようかなあ。それともゲッターG部隊を待機させようか？

あ、ついでに俺が管理局のことを知ってる事はリニスは知ってるよ？

いっけね、そんなこんな考えていると腹の虫が鳴ってしまった。
さすがにあんだけ暴れたら腹が減るかあ。なんか作って食うかな。

リニス「夜食でも作りましょうか？」

おおう、作ってくれるのか？じゃあ頼んだぜリニス。

——高町家——

高町家のリビングでは、なのはとユーノを除く全員が家族会議を開いていた。議題はもちろん、黒崎 賢治の事だ。恭也はあの男が本当に企業のトップというだけなのか、あの男は危険だとずっと言っている。

自分達の様な厳しい修行をした者でも父親が背後に居た事に気付けなかったのに、あの男は誰よりも速く気付いていたのだ。それも、美由希が出て来た時からだという。

しかし、士郎もあの男はクラジェンタの会長で、非合法テロ組織『龍』に真っ向から立ち向かう戦力を持つ企業のトップだということしか知らないのだ。この事は二人も昨日聞いていて、それだけで

は納得いかないとやっている。

しかし、黒崎 賢治の情報のセキュリティは首相のよりも硬く、無闇に探ろうとすれば直ぐに潰される。

何時の日か、裏でクラジェンタの情報を盗もうとハッキングを掛けたり、社員を攫ったりした馬鹿が居たが、見事に一日で潰され、さらにはそのバックもどんどん潰されていった。それはもう完膚なきまでに。

おかげで裏の者達に利用されていた組織や人達は解放されて、クラジェンタの傘下に進んでなっていた。クラジェンタがバックに就けば自分達が守られるからだ。

しかもその影響力は国が後ろに就くよりも効果的だとも言われるほどだ。

そんな大企業の会長の裏を探ろうとすれば明日から朝日は拝めなくなるのは眼に見えている。

士郎「恭也、お前の言うことはわかる。だがその会長本人が後日改めて店に顔を出すと言ったのだ。その時が来るまで待っていればいい」

恭也「けど父さん！」

桃子「恭也、そこまでにしなさい」

恭也「母さん!？」

桃子「彼はちゃんと説明してくれると言っていたのよ? どうしてそこまでしつこく相手を探ろうとするの?」

恭也「母さんはおかしいと思わないんですか!? 俺達でも父さんの

存在に気付かなかったのにあの男はさも当たり前のように気付いていたんですよ!？」

美由希「んー、確かになんとなく雰囲気が普通の人とは思えなかったけど、そんな恭ちゃんが思ってるような人じゃなさそうだったよ?」

士郎「とにかく、あちらが来るのならば恐らく家族全員が揃える日、つまりは日曜日だろう。その時に聞こう。くれぐれも、相手に粗相のないようにな。どこに耳があるかどうかわからないからな」

この言葉を締めくくりとして、高町家の会議は終わった。
後は、黒崎 賢治が翠屋に現れるのを待つだけとなった。

第十四話 帰宅後、家族会議（後書き）

お久しぶりです！！

いやはや、まさかここまで難産になるとは思いませんでした。
オリジナルって、本当に難しいですね。

感想とアドバイスをお待ちしております！

第十五話 クラジェンタ社員達との会談 改（前書き）

申し訳ありません、改めて内容をみていくと納得のいかない部分がいくつかありましたので修正して再投稿いたしました。

あっちこっち修正しているので、確認をお願いいたします！

それでは、どうぞ！

第十五話 クラジエンタ社員達との会談 改

さて、これから起こるのは確か・・・夜のどこかの学校とその後
に神社の犬だっけか？

はぁ・・・やっぱり9歳の子供にこんな危険な事させると、何だ
か居た堪れないなぁ・・・アニメとか小説では主役だから～な感じ
で平気で流してたけど、実際戦うとなると危険だ。あんな殺伐とし
た場所に平気で子供を送り込む管理局の正気を疑うぜ・・・いや、
既に末期か。

ぶっちゃけ俺が思念体やら取り憑いた奴らを半殺しにしてリニス
に封印させようかと思ったけど、リニスに「デバイスがないから無
理です。」ってキツパリ言われたしなぁ・・・クラジエンタの技術
部に作らせてみようか？いやでも、前の俺が技術部にはアレ（・・・）
らを10年以内で完成させるよう指示出してたみたいから、技術部
にそんな暇はないし・・・どうしよう、なんか情けねえぞ俺orz

リニス「何を落ち込んでいるのですか？」

賢治「んぁ？あぁ・・・小さい子を危険に巻き込まないと解決でき
ない自分が、情けなく思ってた・・・」

リニス「・・・確かに、魔法とは無縁な世界で育った子供がこの事
件に関与するのは居た堪れませんね。フェイトに頼もうにも、私が
接触してしまえば私がプレシアに見つかってしまう・・・」

賢治「ああ、だからなのはちゃんが保護したフェレットに変身した
奴にやらせようと思ったんだが、魔力を供給する御札があると知れ

ば、奴は間違いなく管理局に進言する。そんでもって管理局は無理矢理奪いに来る・・・だから困ってるんだよ」

リニス「それで、どうするのですか？」

賢治「それをなんとかするために本社に向かっているんだよ」

俺はリニス（人型）と車の中で話しをしながら、クラジエンタの本社へと向かっていた。どうやら俺は昨日の思念体をボコした翌日、元々この世界にいたはずの”黒崎 賢治”と完全融合したらしく、社員のなかに特別な事情を持つ者や、表に出るに出れなくなった者達がいることがわかった。

どうもその社員達は、管理世界で居場所を追われたのが多く、もしかしたらデバイスを持っているかも知れない。俺はその社員達にジュエルシードをなんとか暴走する前に回収してもらおうと思っている。しかし、問題はもう管理局と関わりのあることに触れたくないから逃げてきた人達が受け入れてくれるかどうかなんだよなあ・・・

- ・約九割が管理局が原因でクラジエンタに来たんだし。

さうて、俺の依頼に了承してくれるかどうか、いっちゃってみますかな！

因みに、今運転してる車は、黒ベンツのSCL500だ☆やっぱベンツは乗り心地がいいねえ！

さあてやってきましたよクラジエンタジュエルコーポレーション
本社！いやはや、この世界の俺と完全融合したから見慣れてるとい
う感覚だけど、すごい大きさだよ。大学病院以上の大きさはある
ね。それに正面玄関が何処の高級ホテルって言いたくなるような造
りだし・・・リニスも呆然とオフィスを見上げてるよ。

ガードマン「お早うございます、黒崎会長」

賢治「ああ、朝からご苦勞様。車を頼むよ」

ガードマン「畏まりました」

車の鍵をガードマンに渡して、俺達はオフィスへと入って行った。
エントランスは広くて太陽の光が優しく入ってきていてとても明る
い。床も壁も内装が全て大理石か：奮発したなあこの世界の俺。そ
れにエスカレーターとエレベーターも5台ずつあるから、ある程度
の混雑は避けられるな。

会長室に向かう途中で社員たちとすれ違いに挨拶を交わしていて
気付いたけど、ここの社員達からは仕事や友人関係のストレスを感
じられない。本当に自分が望んでいた仕事に夢中になれて嬉しいと
いう感情を感じる。俺はそれを嬉しく思う。誰だって、自分が開い
た会社で嫌々ながら仕事をやられたら気分が良くないはず。

だけど19歳のガキが会長だというのに妬みを感じないのもまた

何ともいえない妙な感じが・・・

エントランスの正面にあるエレベーターに乗って最上階に向かう。
どうやら最上階は会長室だけの様だ。

リニス「・・・ところで賢治。」

賢治「ん？どうした？」

リニス「・・・このオフィスに入ってから魔力が締め付けられる感じがするのですが、何故ですか？」

・・・ははは、やっぱり使い魔には締め付けられる感じがするか。

賢治「そりゃあそうさ。この会社は管理局の他に魔法が絡んでいる世界から避難してきた人達が働いたり隠れたりする所だぞ？追っ手やここの技術を盗もうとする輩もいるしな。結界を張られて魔法で攻撃、またはサーチャー使って侵入してくることも考えて結界をクラジェンタ本社以外にも支社にも張ってあるよ。基本、避難してきた人達は本社勤務を義務付けてるけどな。俺がいるここのほうが直ぐに行動出来るし」

リニス「す、すごいセキュリティですね・・・ですが、ここまで管理世界に影響が大きい企業があるなら私やプレシアも耳にしていると思うのですが・・・」

賢治「さあな、管理局が規制したんじゃないか？自分達よりも優れている技術を管理外世界、ましてや、魔法文化のない世界ってこと

をな」

俺の言葉を最後にエレベーターの扉が丁度開いた。このフロアにあるのは大きな扉が一つとインターホン、非常階段に大きめの窓だけ……。もろ俺の家と同じ作りじゃんよ。ロックを解除して中に入ると、豪華ではあるがどこか品のある部屋だった。周りに金ピカな置き物等はなく、代わりに社員達の功績や賞状、社員旅行、または小さい子供たちが描いてくれた絵が額に入って飾っている。

リニス「……大企業の会長の執務室だからどんな装飾をしているかと思いましたが、派手な装飾は一切なく落ち着いた部屋ですね」

賢治「ははは、まあ俺自体が金ピカな作りが嫌だからな。お、来たか」

——ピンポーン——

???『会長、ただいま参りました』

賢治「ああ、入ってくれ」

インターホンが鳴り、俺の許可を得て入ってきたのは男性が二人、女性が一人の3人だ。

三人「「おはようございます」」「」

賢治「おはよう。朝早くから呼び出して悪いな」

男A「いえ、お気遣いなく・・・それで、本日はどのようなご用件で？」

賢治「・・・実はな、魔法に関わりのある者にしかできない頼み事があるんだ」

さて、ここからが正念場だな。魔法から身を引いた人達だから協力してくれるといいけど・・・

女「頼み・・・と、いいますと？」

賢治「・・・この世界、それも海鳴市の周辺にロストログア【ジュエルシード】が転がり込んできたんだ」

三人「「!?!?」」「」

女「どういう事ですか!?!? 何故魔法と無縁なこの世界にロストログアが!?!?」

まあ、管理外世界にロストログアがあるのは知ってはいるけど、まさかここ地球に転がり込んでくるとは思わんよなあ。三人とも目を見開いて驚いてるし。

リニス「それは私から説明いたします」

女「あ・・・会長、失礼ですがこちらの女性は？」

賢治「ああ、紹介が遅れたな。こちらは――「いえ、自分でさせて下さい。」――わかった」

リニスは俺が紹介するのを遮って自分がすると言い、一歩前に進み、自己紹介をした。

リニス「初めまして、私はプレシア・テストロッサの使い魔のリニスと申します。今は訳あって黒埼 賢治の使い魔をしています。よろしく願います」

男1「・・・会長、まさかあの御札を？」

賢治「まあな、数日前に色々あったからその辺は察してくれ」

三人「「は、はあ・・・」」

リニス「では、御説明いたします」

男2「成る程、輸送中の船にトラブルが発生してこの世界に・・・」

男1「そして、一般市民の少女が魔法に触れてデバイスを・・・ですか。これはまずいですよ？遅かれ早かれ管理局は確実に地球に介入してきますし、その少女も管理局の目に留まってしまいます。そうなればその少女は監視されてしまいますよ？」

説明を聞き、大まかに纏めた社員二人は危機感を感じていた。それもそうだろう、ここに避難してきた社員達は管理局の闇を知っている。タダでさえ人手不足な組織なのに、後先考えずあっちこっちの世界に介入していったからさらに人手不足となった管理局は魔法の素質を持つだけで無理矢理管理局に入れる。拒めば力で・・・そんな非人道な組織がまた自分達の住む場所に介入してくるのだ。ウチの社員達や地球の人達には堪ったもんじゃない。

賢治「ああ、管理局が介入するのも被害が大きくなってからしかないからな。その間は様子見や情報収集と言いながらの高みの見物をして、おいしいところで介入だろう・・・避難してきた人達からもそう聞いている。それに地球に土足で我が物顔で侵入してくるんだ。その為にもこちらで可能な限りジュエルシードを集めて封印、そして管理局が介入してきた時の交渉材料にするんだよ」

女「・・・何故かしら、私には会長が管理局相手にまともな交渉をするよりも脅しを掛けるといふビジョンしかどうしても浮かばないのですが」

男1「安心しろ、俺も浮かばない」

男2「私もだ」

おいこらお前ら・・・俺を何だと思ってるんだ。給料減らすぞ？#
さすがに会長の座である俺がヤクザのような行動を取るわけないだろう！

リニス「・・・聞きますが、何故そう思うのですか？彼が只者ではないというのはある程度分かっていますが、まだ一部でしかない気がして・・・」

賢治「おいこらリニス、お前まで言うか」

男1「ええ・・・実はですね、何時の日か管理局から逃げ延びて来た次元犯罪者がここ海鳴市に転がり込んで来ましてね。この社員一人が人質にされたのですよ。それにその犯罪者はランクAAでそ

れも質量兵器を扱う危険人物で局員も迂闊に手を出せなかったんです・・・管理局も勿論やってきたのですがその時には既に事は終わった後でした」

リニス「AAランクを!？」

男2「会長が社員を助けに入って無事救出できたのはいいのですが、その後が大変でした・・・犯罪者は会長に原型が分からないほどにボコボコにされましたね。管理局がやってきて誤って会長を逮捕するほどでした。その時は会長がその局員に犯人を突き出して『てめえらがすることトロクせえからウチの社員がまきこまれたじゃねえか!』とその局員もまたボコボコに・・・局員は辛うじて復帰できましたが、犯罪者は半身不随になってしまって・・・私は夢を見ていたのかと錯覚しましたよ。魔力強化していない人間が放たれたリボルバーの弾丸を素手で掴むとか」

女「そして、その時やってきた局員は海でも三大提督の部下でして、普通なら大問題なのですよ。ですが会長は三大提督の所にまで乗り込んで面と向かって会長が言ったのですよ。『今後地球で好き勝手した余所者はクラジェンタが処罰する。されたくないければお前達がとっとと捕まえろ。また管理局が地球で好き勝手した時は・・・わかってるよな?』と・・・私は近くに控えていたのですが、三大提督に脅しをかけるとは考えも付かなかったので寿命が縮む勢いでしたね・・・」

・・・思い出した、あれは去年のことか。確か人質にされた社員は避難してきてまだ一月も経たない者だったな。まだ護身術を学んでなかったし次元犯罪者は相当な手馴れ。

はつきりいって俺がこの世界に来なくても災厄潰せたんじゃないね？

てか俺いらなくね？

そしてリニスさん、そんなジト目でこちらを見ないでください（涙

リニス「・・・貴方が只者ではないというのは分かっていましたよ。あの時、思念体と戦っているのが気になってサーチャーで見えてしまったから・・・なんですかあの物理法則を嘲笑う様な戦い方。私はもはや貴方が人間なのかどうか疑ってしまいますよ？」

・・・なんかどんどん俺が常識外な人間の如く聞こえてくるのだ
が（汗

賢治「ま、まあそっちの話はまた今度な。それでだ、ジュエルシードを集めるのに協力してくれるか？勿論ボーナスも奮発する。何よりここがメチャクチャにされるのは堪らないからな」

男1「・・・わかりました。私は協力いたします。会長に助けを頂いた恩がやっとここで少しでも返せるのであれば」

男2「私も協力します」

女「私も協力いたします。この星がロストログアでメチャクチャになるのを黙って見ている訳には行きません」

おお！協力してくれるか！よかった、魔法にはもう関わりたくないって言ってたから断られるかと思ってたんだよ！

賢治「助かる。ならお前達は部下を引き連れて海鳴市の外を搜索して来てくれ。落ちた場所は地球では日本の関東地方だけらしいんだ。海鳴市は俺が探す。ジュエルシードはクリスタルの型をしていて魔力に直ぐに反応するから極力魔法は使わないでくれ」

三人「「「了解しました。」「」」」

そういつて三人は会長室を出て行った。よし、これで一先ず原作では出てこなかった場所での被害は

食い止められそうだな・・・後は基本、なのはちゃん達と行動しておけば遭遇するし被害も小さく終わらせれる。あのサッカー少年の時のためにも俺も準備しておくかな。なのはちゃんは遅かれ早かれ管理局に入るからなあ・・・どうしよう。

第十五話 クラジェンタ社員達との会談 改（後書き）

さて、ここで厚かましいですが募集を取りたいと思います！

今回登場した社員の名前と容姿を募集いたします！！

どしどしご応募ください！！

そして作者は、感想とアドバイスを心よりお待ちしております！

第十六話 次の日 of 出来事と会談に向けて (前書き)

おまたせいたしました！

第十六話

次の日の出来事と会談に向けて

なのはside

おはようございます。高町　なのはです！

昨日は変わった夢を見ていたような気がしました。動物病院からフェレットがなのはを呼んで、それから・・・長くなりそうなので省略します。とにかく、変わった夢でした。

ふう、そろそろ起きて学校行かないと。ところで、あのフェレットってどうなったんだろ？もう怪我治ってたらいいけど…あれ？なのは、部屋に籠なんて置いてたっけ？

気になって覗いてみると――――

ユーノ「あ、おはようなのは」

――――中から出てきたのは喋るフェレット・・・昨日の出来事は夢じゃなかったのねorz

なのは『そっかあ、ジュエルシードを運んでる最中に事故があったからずっと一人で・・・』

なのはは学校についてからもユーノ君とずっと念話をしています。この念話は、頭で思っていることをその人に伝えようとするとき出来るみたいで、どうやら魔法が使える人なら誰でもできるみたいです。結構便利なの♪ああ、これで国語のテストが有利に・・・！！

ユーノ『うん、それで今回、この星に落ちたジュエルシードを封印する時に魔力が底を尽いて倒れちゃって・・・だから、本当に君には感謝してるんだ。ありがとう。それとなのは、テストは自分の力で受けないと駄目だよ?』

にやはは、困った時はお互い様だよ?それとユーノ君?なんでなのはの心の中をノゾイタノ?

ユーノ『念話で願望丸聞こえたかったよ?』

むぐっ・・・でも、これからどうやって集めていけばいいんだろ
う・・・授業がある時にジュエルシールドが発動したとしても授業か
ら抜け出すことは出来ないし、かといって無視していたらあんな化
け物が町をめっちゃくちゃにしちゃうし・・・

なのは「はぁ」

アリサ「な〜に朝から溜め息ついてるのよ？」

なのは「にゃ！？お、おとおおはようアリサちゃん、すずかちゃ
ん！な、何でもないよ！？」

なのはがこれからジュエルシールドをどう集めるのかを考えて溜
息をつくど、それに合わせたかのようにドンピシャでアリサちゃん
とすずかちゃんがやってきました。

び、びっくりしたあ・・・すずかちゃんのはなののはの考えている事
は直ぐにわかつちやうし、アリサちゃんのはなののはが吐き出すまです
っど迫ってくるから恐いんだよ。この間なんか頼った引っぱ張ら
れたし。

アリサ「ふ〜くん・・・そう、ところでなのは、今朝のニュース見
た？」

なのは「ふえ、ニュース？」

アリサ「昨日の夜遅くに、あの動物病院とその近くの住宅街がめち
ゃくちやになってたって話しよ！」

——ドキッ！——

なのは「そ、そうなんだ」

アリサ「アタシも朝ニュース見て学校に来る途中に見に行ったわよ！その時にはもう修繕作業に入ってたけど、壁も木もメチャメチャだったから本当みたい！」

すずか「あたしも朝、アリサちゃんと来る時に一緒に見てきたよ。何があったんだろうね？」

なのは「そ、そうだね・・・何があったんだろうネ・・・」

へ、平常心平常心！ここで話を合わせないとアリサちゃんに・・・
・（；。Д。）ガクガクブルブル

ユーノ『ところで、話しは変わるんだけど・・・』

なのは『うん？うん、何かな？』

ユーノ『昨日僕達を助けてくれたあの男の人って、なのはの知り合いな？』

昨日助けてくれた人・・・ああ、賢治さんのことかな。

なのは『えーっと・・・なのはも数日前に危ないところを助けてもらった時に知り合ったから、賢治さんのことはよく知らないんだ。ただ、父さん達がね。賢治さんはものすごい大きな会社の会長さんなんだって言ってたけど・・・』

ユーノ『か、会長！？見た目、二十歳ぐらいの人が！？で、でもなんで会長さんがあんなに強いのか？仕事が忙しくて運動する暇がないってイメージしか僕には浮かばないな・・・』

なのは『にやはは・・・それは解らないよ。昨夜はリビングでお父さん達がなんか賢治さんのことで話し合ってたみたいだから・・・そうだ、昨夜といえば賢治さん、また翠屋に顔を出すって言ってたからその時ユーノ君もいたらいんじゃない？お父さん達の話が終わったら私達だけで話すようにして！』

賢治さんも昨日、ユーノ君が喋ってる所を見てそんなにビックリ

していなかったからもしかしたらユーノ君のような事情を持つてる人を他にも知っているのかもしれないし。(↑なかなか鋭い)

ユーノ『そうだね、その時は僕も一緒に参加するよ。僕が居ても両親に警戒されることもないしね』

なら、これで決定だね！後は賢治さんが手伝ってくれるかどうか
が不安だけど・・・弱い女の子を一人で戦わすようなことはしないって、昨夜帰りながら賢治さんは言ってたし、大丈夫かな！

なのは『でも、賢治さんって魔法使えるのかなあ？』

ユーノ『ん？どうしてそう思うの？』

だって、昨夜はユーノ君が苦戦してやっと封印できるぐらいの化け物だよ？なのに賢治さん、虐めでもしているかのようにボコボコにしていたから。それにありえないぐらいの速さで走ってたし。

ユーノ『いや、少なくとも彼から魔力は感じなかったよ？それに、魔法が使える人は必ずデバイスを持っているんだ』

なのは『デバイス？』

ユーノ『なのはが今も首から提げてるソレだよ。デバイスの種類はソレを含めて4種類あるけど今は省くね。ジュエルシードを封印し

て保存したり、魔法の補助をするにはそのデバイスが必要なんだ。思念体・・・昨日の化け物は、魔力で出来た物体だからいくら倒しても直ぐに一つに集合して復活するんだよ・・・昨日みたいに思念体が再起不能になる方が逆にビックリだったよ。』

にやはは・・・でも魔法が使える人ならそんなに思念体を圧倒するのって難しくないんじゃない？

ユーノ『・・・僕はまだ九年しか生きてないけど、これでも色々な世界を渡ってきて戦いも見てきたんだ。でも、ロストログアの思念体を素手で圧倒していた人は生まれて初めて見たよ・・・何、あのなのは助けた時に繰り出したアレ。魔法じゃないのにライオンの顔が出てきたと思ったら思念体が恐ろしいほど吹っ飛んだよ？』

あ、あはは・・・うん、昨日のアレが夢じゃないってことは賢治さん、ものすごい強いんだね・・・壁とか樹とかを簡単に壊しちゃうあの化け物を怪我一つ負わずに殴って蹴って投げ飛ばして・・・うん、この人本当に人間？って疑問に思っちゃうよね？

ユーノ『・・・僕は攻撃魔法の才能がないから使えなくて苦戦していたのもあるけど、魔法を使えるからって誰でもできるわけじゃないんだよ？思念体を相手にするのって・・・魔法が使えないであんなに強い人は始めて見たよ。この町には他にあんなに強い人って居るの？』

なのは『うーん・・・ウチはお母さんとなのは以外が御神流ってい

う武術をやってて、窮めたらどの武術にも負けないぐらい強いって
お父さんは言ってたけど・・・賢治さんに勝てる人はいないと思う
よ?』

昨日のあの戦い方を見ていたら・・・うん、武術?なにそれおい
しいの?な話しになっちゃうし・・・あれ?そういえば、賢治さん
何時お店に来るんだろ?

———とあるホテルの一室———

さくら「なんですって、夜の一族の秘密がバレた!?!」

私の名前は綺堂 さくら。私は今、ホテルで休んでいる所に姪の
月村 忍から電話が掛かってきて出たところ、思いもよらない事を
言ってきた。自動人形のモーター音を聞き取れ、尚且つそれに驚か
ない・・・こんな男、私は直接は知らないわ。もしこの男がよから
ぬ事を企んでいたら忍達や関係する人達まで大変なことになってし
まう・・・!

忍『ごめん、さくら・・・私が油断している隙に向こうは帰っちゃ
ったけど、相手が誰なのかは分かったわ』

さくら「そう・・・それで、相手の名前は？」

直ぐにその相手の裏の情報や生い立ちを調べ上げて、悪巧みをしていないならば交渉の場を設けないといけない・・・よからぬ事を企んでいる相手の場合は私が潰さないと・・・！それで、相手の名前は？

忍『クラジエンタジュエルコーポレーション会長の、黒崎 賢治よ』

・・・・・・あ？

忍『えーっと、さくら？もしもし！』

桜「っは！？ご、ごめんなさい、今の聞き間違えかなーと・・・もう一度、言ってくれないかしら？」

忍『・・・クラジエンタジュエルコーポレーション会長の、黒崎 賢治よ。残念なことに、あの超大企業の会長よ』

・・・聞き間違えではなかったのねorz どうやって調べればいいというのよ！？あそこは今では自衛隊よりも優れている武装組織を所有しているし、その武装組織が『龍』の本部を滅ぼしたのよ！？会長の情報は裏の世界ですら調べ上げられないほどプロテクトが強いのに！・・・あら？でも待って、クラジエンタには企業以外

に確か・・・

忍『さくら？さくら~~~~~！』

さくら「あ、ごめんなさい忍、ちょっとクラジエンタの事で何かを忘れてる気がして・・・」

忍『もう、いきなり黙り込まないでよ！それで、クラジエンタの事で何か知ってるの！？』

さくら「ええ、そのことは本人に遠まわしに聞いてみたら・・・多分解ると思うわ。彼、また貴方達の元に現れるって言ったの？」

忍『ええ、恭也から聞いた話だけど、その時には私も参加するって言ったわ』

さくら「そう・・・なら、私もある程度彼のことを調べてみるわ。あまり情報は入らないかもしれないけど、ないよりはマシのはずよ。その話し合いに私も参加させてもらうわね」

忍『わかった。恭也にそう伝えとくわ』

・・・私はクラジエンタの事で何か重要なことを忘れてる気がする・・・何だったかしら？

第十六話 次の日が出来事と会談に向けて（後書き）

ああ・・・やってしまった。

さくらさんを出さないとの話は終わらせられないからしかたない！！

感想、アドバイスをお待ちしております！

第十七話 夜天の書の主とのファーストコンタクト（前書き）

明けまして、おめでとうございます!!

今年は更新速度を速めるを目標として頑張って生きたいと思います!

それでは、どうぞ!!

第十七話 夜天の書の主とのファーストコンタクト

あの後、リニスだけ本社に残った。

今回、プレシアが引き起こすであろう事件の被害から被害を抑えるために協力してくれる社員達に色々と打ち合わせをする為だっと言ったけど、俺は必要ないみたいだから町を散策中。

いやね、仕事しようとデスクに向かったはいけど、仕事がないのよ。会長なのに仕事がないってどう思うよこれ・・・

まあ、リニスが生きてる時点で原作ブレイクしているからね。何時何処で何が起こるかわからんし、他に何の世界と交わっているか解らんから色々と調べておかないといけないからな。

ならば、ゲッター線の出力調整も踏まえて俺が海鳴市を散策すればいいかとなって思ってた散策中・・・ユーノの事だ。ジュエルシード集めを自分一人でやるとか言って、結局はなのはちゃんを巻き込むから、俺がなのはちゃんと一緒にいないといけないんだが・・・ん？あれは。

??? 「んっせ・・・んっせっ！」

荷物を持って車椅子に乗っている女の子が無茶な渡り方したのか、左後輪が溝に挟まって歩道に乗れないようだ・・・仕方ねえ。

??? 「んっせ・・・ひゃっ!？」

賢治 「ほいよっと。大丈夫かい？」

「???」「へ?」

俺は車椅子の取っ手を持って車椅子を歩道に乗せた。この車椅子は手動・・・手でタイヤを動かすタイプだから買い物の時とかには向いてはいないんだが・・・病院は電動タイプを出せなかったのか?

賢治「まったく、なんでまたこんな挟まり方したんだ?まさか無茶な渡り方でもしたのかい?」

「???」「え、えーっと・・・実は、そのスーパーで買い物をして、車も来てないし信号もちよつと遠いから渡っちゃおうとして・・・」

まあ、その膝に乗せてる荷物と対面にあるスーパーを見れば解るけどな。それでも車椅子に乗ってる奴がすることじゃねえよ。

賢治「まあ、家まで送っていくよ。その荷物だと、まともに車椅子を押せないだろ?」

「???」「えっ!?!いや、その、いいですよ、家も近くですし、そこまでしてくれなくてもっ・・・えっと、じゃあ、お願いします」

賢治「あいあい、お願いされました。俺は黒崎 賢治。最近近くに引っ越してきたんだ。君は?」

まあ、もうこの子が誰かわかってるんだけど一応確認をね・・・

??? 「あ、ウチの名前は八神 はやていいます！」

この子が・・・夜天の書の主 八神 はやて か。

はやて side

ウチがスーパーで買い物を買って家に帰る時、いつもなら横断歩道を使って反対側に渡るんやけど今日はどっちからも車が来てへんかったからそのまま車道を渡ったんや。でも、後ろの左車輪が歩道に乗らずに溝に嵌ってもうた。

はやて 「んっせ・・・んっせっ！」

うゝ、全然動かへん。かといって、今バックしたら倒れてまうし、どないしよう・・・

はやて 「んっせ・・・ひゃっ!？」

??? 「ほいよっと。大丈夫かい？」

その時、知らないお兄さんが車椅子を歩道に乗せてくれたんよ。まあ、ちよっとしたお叱りを受けてもうたけど、ウチが悪いから何も言えへんけどな。

そしたら、ウチをこのまま家に送ってくれる言うてくれるけど・
・ここは断らなあかんよな！？よくニュースとかで出てくる親切さを逆手にとって盗みを働く人かもしれへんし・・でも、何やろうかこの感じ・・このお兄さんがいると何か、ポカポカ暖かく・・ほっとするような感じがしてもうて、思わずお願いしてもうたんよ。とても、このお兄さんがそんなことをするように思えへんかったし。

それでその後自己紹介したんや。そしたらこの辺に最近引っ越してきた人みたいなんや。

賢治「そうだ、この辺に美味しいシュークリーム屋があるんだが、寄って行かないか？」

はやて「え？シュークリームですか？」

賢治「ああ、『翠屋』って言うんだがはやてちゃんの家の帰り道に丁度通るからね。多分一人じゃ行きづらい店作りだから覚えていると思うよ？一緒に行こうか」

はやて「行く！」

思わず即答してもうたけどウチは甘いもんが大好きやねん！あ、でもお金は今そんなに持ってないけど・・・誘ってくれたのは向こうやし、いつもならスーパールのプリンとかしか食べてへんから今日はたっぷり食べさせてもらおうかなあゝ、あはは、久しぶりのケーキや！グヘヘヘヘ（ジュルリッ）

賢治 side

おっと、シュークリームに誘ったら目の色変えちゃったよはやてちゃん。おまけに涎まで垂らしてるし。こりゃ俺の奢りでたらふく食う気満々と見たぜw。

まあ、子供一人で買いに行くにはちよいと勇気がある店作りだから仕方ないよな。

車椅子で入るにはドアが狭いし・・・改善点に追加しておくか。確認したところ、海鳴市はクラジェンタの縄張りだから、指令を出せば直ぐに取り掛かるだろう。

士郎「いらっしゃいま・・・君か、よく来たね」

賢治「どうも、数日振りですね」

桃子「あら、いらっしゃい。どう、この辺りにはもう慣れた？」

出迎えてくれたのは士郎さんと桃子さん。いつみても年齢詐欺してるんじゃないかと思うぐらいの若さだ。

はやて「もきゅもきゅもきゅもきゅ♪」

はやてちゃんと一緒にカウンターでケーキを頂いているんだが・・・はやてちゃんの食べる勢いが凄い事凄い事。10個目に突入してもその勢いは止まらない止まらない。ちよつと休憩したらって言うたいけど、こんだけニツコリしながら食べてたらもっと食べなくなるよね。

士郎「・・・賢治君、あの子とは知り合いなのかい？」

賢治「いえ、町を散策してる時に困っているところを助けたただけですよ」

士郎「・・・そうかい。それにしても、よく食べるねあの子」

ははは、士郎さんは楽しく話しながらもケーキを美味しく食べてるはやてちゃんを見て微笑んでいる。

ん？桃子さん、どうかしたの？何か怪訝な顔してるけど・・・

桃子「・・・あの量の買い物をするのに一人でいるのがちよつと、おかしいと思ってね」

・・・そのことか。まあ、大人やある一定の歳を重ねた人なら気付くわな。

賢治「・・・士郎さん、桃子さん、もし、身体が不自由な小さい子が家族もいない家で一人だけで暮らしていたら、どう思いますか？」

士郎・桃子「「!？」」

俺の話を聞いた二人が弾かれるようにはやてちゃんを見た。今の話はもろあの子に当てはまるからわかるも当然だ。その本人はいつの間にか来てた美由希ちゃんとお話をしているから見られてる事に気付いていない御様子。まあ、気付かれたらこっちななんて返したらいいか困るんだけどね・・・

士郎「・・・それは、本当なのかい？本当にあの子が一人で今まで暮らしていたと・・・？」

賢治「こんなことを冗談で言う奴は、俺が三途の川を無理矢理渡らせてやりますよ・・・」

俺の言った事が嘘じゃないと解った二人は険しい顔をしていた。当たり前だろう、初めて一人暮らしをするだけでもホームシックに掛かるのはザラにいるのに、親の助けを必要とする歳の子が一人で暮らしているんだ。地球にいるどこの誰が聞いても信じられないだろうな。

桃子「・・・どういう、ことなの？引き取り先の人が出払っているともいうの？」

賢治「・・・そのことについては、こちらで調べてみます。勝手な行動と指摘されるかもしれませんが、子供を一人で暮らせること自体考えられませんからね。それに、このことを国が黙っているわけが無い」

実は、はやてちゃんのことについては原作を見ている時から疑問に思っていたんだ。数ヶ月前に熊本であった児童引き取りのニュースで、一年に何回か職員の者が必ず家を訪れて状況を確認するはずなのに、それをしていなかった・・・まあ、アニメや漫画の世界だから法律の方面とかまでは回っていないのかもしれないけど、今俺が居る時点でここは現実世界・・・国が必ず動いているはず。それなのにはやてちゃんはここ、『翠屋』に来る時まで色々話したけど、

誰も家に来なかったと言っていた・・・これはクラジエンタを堂々と動かせる口実となる。

士郎「・・・ところで賢治君、話は変わるが、ゆっくり話せる時間はあるかい？この間、君が助けた忍ちゃんのこと何だが・・・彼女の事情を少しとはいえ、知ってしまったからには俺達とよく話し合わなくてはならないことがあるんだ」

賢治「そちらの都合がいい時間帯で結構ですよ？ですが、こちらはこう見えても一応会長なので、何時急な仕事が入るか解らないので、その時は勘弁して下さいね？」

士郎「ああ、わかっている。ならば今週の日曜日の午後三時でいいかな？恭也と忍ちゃんが都合がつく日はその日だけだからな」

賢治「わかりました。ならば今週の日曜日、午後三時にまた会いましょう。丁度はやてちゃんも満足したようですしね。それと、はやてちゃんのことなんですが・・・」

桃子「ええ、こちらで見かけた時には積極的に話しかけるわ。なのはとお友達になってくれればこちらはもっと嬉しいわ」

賢治「・・・ありがとうございます。恐らく今週の日曜までにはある程度調べがつくと思うので、その時にお二人にお話しいたします」

こうして、はやてちゃんと共に『翠屋』を後にした俺ははやてちゃんを家まで送った後、クラジエンタに国がはやてちゃんにしている対応を調べるよう連絡して家に帰った。

原作では確か、管理局のギル・グレアム提督と使い魔の猫姉妹がはやてちゃんを一人にさせて監視していたはず・・・実際、はやてちゃんと行動してから妙な視線を感じた。

多分原作通りなのかもしれないが、一応俺は原作通りならば、グレアムが今のうちにこちらに申し出てきたら示談で終わらせようとは思っているが・・・向こうの態度しだいでこちらも行動させてもらおう。オマケに家にあったアレは恐らく、ゲッター線が俺が原作を知っているの配慮だと思うし・・・

さて、ジュエルシードと平行してはやてちゃんの問題も解決していきますか。仕事、今のところ回ってこないし。

はやて side

ふっふ、満腹満腹！ 本格なスイーツ食べたの何時ぶりやろか。少なくとも一人で暮らすようになってからは食べてへんよなあ。

それにしても・・・なんで、賢治さんはここまで優しくしてくれたんやろか。ウチとは知り合いでもないし、また会うかどうかすらわからないのに、なんの利益があるんやろ・・・おいしかったけどなんちゃって高いケーキを沢山食べても、なんも言わへんで家まで送ってくれたし。

ウチもウチやなあ・・・あの人の傍にいたら、不思議と暖かくなってもうた。こんなに長く人と話したのも、一人で暮らし始めては石田先生以外は初めてやなあ・・・あれ？ ウチ、なんで泣いてるんやろ・・・涙が、止まらへん・・・ヒック、フウ・・・っ！

はやてはこの日、何年ぶりの涙を流した。そして、後にその涙が、彼女をこの一人ぼっちと言う名の鳥かごから解き放たれる事になる・・・！

第十七話 夜天の書の主とのファーストコンタクト（後書き）

いかがでしたでしょうか？

はやてとはこの段階でコンタクトを取らせてみました。

A Sは原作崩壊間違いなしです！！

感想、アドバイスをお待ちしております！

第十八話 何時の間にフラグ立てたっけ？（前書き）

お待たせいたしました！

今回は短いですが、どうぞ！

第十八話 何時の間にフラグ立てたっけ？

はやてちゃんを家まで送った俺は、家に戻ってこれから来るであろうリンディ達と管理局を地球でしゃばらせない為の材料を纏めていた。

その材料とは、地球・・・主に先進国で悪巧みを働いていた次元犯罪者や違法者達を今までクラジェンタが捕まえていたので、それを材料に地球に我が物顔で介入してくるなど、ついでに犯罪者達を連れて行って貰おうと思っている。

まあ、管理局がトロ臭いのと後先考えずに世界を侵略していったせいで人手不足なのを見せ付ける為でもあるし、クラジェンタには魔法に対抗できる力を持っているっていうのを知らしめる為でもあるからな。

各国の支部と本社に収容している犯罪者を合わせると、ざっと数えて500人・・・おい、どんだけだよもうorz

ユーノside

ユーノ「なのは、ほら起きて！」

なのは「うゝゝゝ、今日はお寝坊さんさせてゝ・・・」

ユーノ「いやいやそんなことしたらサッカーの応援に間に合わないよ!？」

なのはを魔法の世界に巻き込んでしまっただけで一週間近く経った。昨日は夜遅く、何処かの学校でジュエルシードが発動を感じたからなのはと向かったけど、あの人・・・黒崎 賢治さんが先に学校に着いていた。賢治さんからは魔力を感じないから魔法が使えないはずなのに、何でジュエルシードが発動したのが分かるんだろう・・・本人に聞いたなら――――

――賢治『禍々しい気配がしたからな』

って言ってたけど、なんだよ禍々しい気配って・・・魔法の気配を探るのならまあ、リンカーコアを持ってる人なら少し練習すれば出来るけど・・・この世界は魔法がないかわりにそういうのがあるの？

確かにジュエルシードが醸す魔力は荒々しいけどさあ、禍々しいかどうかは見た目でしかわからないよ。

なのは「んっ・・・んにゃっ? おはようユーノ君、どうしたの?」

ユーノ「え? あ、おはよう・・・いや、昨日賢治さんが僕達より先にジュエルシードが発動した学校に居たからさ、魔法使えないのにどうやって解ったのかって聞いたけど結局意味がわかんなくて。気配で気付くって無理でしょう? 遠く離れてる所から気配を感じる事って」

僕が賢治さんが言っていた意味を考えている途中でなのはがやつと起きた。

今日は、なのはのお父さんが監督をしているサッカークラブの応援に行く予定なのにいつもより起きる時間が遅かったから僕が起こした。

その間、ある程度魔力が回復した僕だけでジュエルシードを確保しに行こうとしたんだけど・・・レイジングハートがなのはを主人としたから僕にはもう使用権がないんだ。本当、魔法と無関係な人を巻き込んでしまった・・・

なのは「んっ・・・えっつと、気配とかは修行すればある程度会得する事はできるってお兄ちゃんが言ってたけど、それは視線とか殺気だって。それに、そこまで行くには相当な修行と精神を鍛えないと無理って言ってたし」

ユーノ「・・・うん、それを聞いて更に謎が深まったよ」

もう何なんだよ、賢治さんって・・・

はてさて、今日は確か原作イベントがおっぱじまるはずだったんだが・・・なんだっけか？ぶっちゃけ原作に無かった場所でも発動してたから忘れちゃったよ。とにかく外歩いてたら気付くかな？てな訳でやってきました海鳴商店街。活気があっていいね、やっぱり商店街が賑やかだと買い物にくる楽しみがあるよ。

??? 「あ、賢治さんや！」

ん？この声はと、後ろを振り向いてみるとそこに居たのはなんとはやてちゃんだった。買い物かな？

はやて「こんにちは！昨日はお世話になりました！今日はどないしたんですか？」

賢治「ん？まだこの街を把握してないから散歩。今日は商店街を回ってから河川敷でも歩いてみようかなってね」

はやて「へえ、そうなんですか」

ん？河川敷・・・なんだっけかね？原作では確か・・・まあ、行ってみれば思い出すかな？それにしても・・・

賢治「・・・あゝ、それと俺には敬語使わなくていいよ？」

はやて「え！？でも賢治さん年上やし・・・」

賢治「ははは、別に俺には気にしなくていいよ」

はやて「えゝ、でも・・・」

いやいや、何もそこまで渋る事ないだろうよ・・・

賢治「まあ、すぐに直せと言うのも酷なことか。ゆっくり直していつてくれ」

はやて「は、はい・・・」

まあ、敬語をいきなり直したら違和感があるかなあ、ゆっくり直して行ってもらうしかないさ。

賢治「ところで、今日は買い物か？」

はやて「はい、今日は切らしてた調味料の特売日でしたから」

といって片手に持った袋を俺に見せるはやてちゃん。そっか、昨日まとめて買わなかったのは少しでも安く済ませるためだったのか。しっかりしてる子だなあ。

賢治「それじゃあ今日の買い物は終わりかい？」

はやて「はい、この後は『翠屋』に行ってシュークリームを買って帰ろうかなって」

そっかそっか・・・ん？『翠屋』・・・河川敷・・・アーリー
ーアーリーー！思い出した、サッカー少年のジュエルシードだ
！！何か引っかけてる気がしてたのはこの事か！

いやあしかし、あの少年は好きな子のために取っておいたジュエ
ルシードを危険だから渡せって言われても絶対に渡さないと思うし、
どうすっかなあ・・・おろ？そういえば確か俺、今日の朝社員から
試作品を提出して貰って・・・あったあった。よし、これと少年が
持っているであろうジュエルシードを交換するとしようかな。

えーっと、ここから近いのは河川敷の方か。この時間ならまだ試
合してる頃だろ？

賢治「そっか、それならちょっと俺と散歩でもしてみようか」

はやて「え！？今の流れからなんでそっちに行きますか！？」

関西の血が流れているからか、ツツコミが入ったぜ。

賢治「『翠屋』なら丁度俺も今日、用があるからな。まあ、急ぎじ
ゃないからちよっと遠回りで行くのもいいと思ったけど一人で散歩

するのねえ・・・寂しいから一緒に散歩しようか？」

はやて「・・・じゃあ、お願いします」

ありゃ？はやてちゃん顔が赤くなっちゃって小動物みたいになっちゃったよ。俺何処でフラグ立てたっけか？

まあ、そんなことを思いながら俺ははやてちゃんの車椅子を押して河川敷へと向かった。

第十八話 何時の間にフラグ立てたっけ？（後書き）

さて、これから起こるであろうあの樹の暴走体を出すかどうか迷ったのですが、出さない事にしました。

原作や他の小説では普通に戦って封印や、これから気持ちをさらにくとしていますが、町を大混乱にまで陥る程のことは大人でも誰でも心に深く傷つきます。最悪発狂して壊れる事もあります。

このことをユーノ一人で責任取れるはずも無く、ましてや管理局が遅れただけでは済みません。

ですから、私ことユニコーンはこの場面は穏便に終わらせます。その代わり、KYことクロノが現れた時は・・・クックック（黒笑）

第十九話 回収と新たな家族（前書き）

お久しぶりです！ようやく更新ができました！！

ですが、今回もやっちゃった的な内容です・・・主に経済でW

第十九話 回収と新たな家族

賢治「おゝ、都会の中にまだこんないいところがあるのかあ」

はやてちゃんを連れて河川敷にやってきた俺は、土でできた道を車椅子を押しながら口にした。

はやて「ウチはまだ父さんと母さんがおった頃は、ようここに来とったんやけどなあ・・・」

はやてちゃんは昔を思い出すような寂しい顔をしてボソツと聞こえないように呟いたが、俺の耳にはしっかりと聞こえていた。
おっと、今のうちに聞いておくか。

賢治「ところではやてちゃん」

はやて「はい？」

賢治「ちよつと気になった事が有るんだけど、今までに君の家に国の役員とか訪ねたことはなかった？」

はやて「へ・・・？何で、国の人がウチに？ウチ何も悪い事してないですよ？」

賢治「ああ違う違う。実はね、義務教育を受ける年齢では一人暮らし

しは許されず施設に入らなきゃいけないんだ。それに、例え誰かが引き取ったとしても、年内に何回か国の役員が様子を見に訪れるのが決められてるんだ。」

はやて「へー、そうなんですかあ。・・・あれ？でも、今まで誰も来ませんでしたよ？」

賢治「・・・そうか、誰もか」

まだ商店街を散歩している時にクラジエンタから連絡があった。内容はもちろんはやてちゃんのことだ。社員がクラジエンタの力を使って海鳴市役所に問い合わせたところ、役員ははやてちゃんの家にはちゃんと定期的に訪れているとのことだ。

しかし今、はやてちゃんは誰も家に来なかったと言った。つまりこれは、役員を装って嘘の報告をしているという事・・・好き勝手してくれちゃって、どう落とし前つけてもらおうかねえ・・・。

賢治「ん？」

そんなこんな考えながら進むと俺達は河川敷で何かをやっているのが見えてきた。おゝ元気にサッカーやってるやつてる！

おっと、土手になのはちゃん達を発見！何とか間に合ったようだ。

賢治「やあ、また会ったね」

なのは「ふえ？あ、賢治さん！」

アリサ・すずか「「え？」」

賢治「やあ、君達は数日振りだね」

おっと、すずかちゃんがなんか目を見開いてびっくりしてますよ？
家で姉に何か言われたのか、少し震えてる。

アリサちゃんはまあ・・・普通にびっくりしてるだけだな、うん。

すずか「え、何で、はやてちゃんと一緒に？」

はやて「あ、すずかちゃんやんか！」

あれ？なんではやてちゃんはすずかちゃんの事を知ってるのって、
ああ思い出した。確か図書館で知り合ってるんだっけか：コンタクト
取るの原作より早くないか？

けどまあ、同じ年の友達がいるってだけで何かと安心感が生まれる
からなあ。よかったよかった。

場所は変わり、今俺達は喫茶『翠屋』に移動して打ち上げをしていた。

丁度俺達が着いた時にドンピシャで士郎さんが監督している『翠屋FC』がシュートを決めてホイッスルが鳴り、試合終了となったみたいだ。

肝心なゴールを決める所を見れなかったのがよっぽど悔しかったのか、アリサちゃんは怒涛の勢いで飛び掛って来た。流石はバーニング・アリサと言われる事はある。

俺はそれを受け流しながらなのはちゃんに声を掛けるが、アリサちゃんの猛攻を避けてる俺を見てなのはちゃんはどうすればいいのか分からず、苦笑いしていた。

俺が居るのに気付いた士郎さんは俺とはやてちゃんも一緒に『翠屋』に来ないかというお誘いを頂いたので今に至る、というわけです。

最初はいきなり大人数、それも知らない人ばかりの中に入るのに戸惑っていたはやてちゃんは、すずかちゃんの紹介が入ってなのはちゃん達と直ぐに溶け込んで行った。

なのはちゃんははやてちゃん達の所からぐったりしてるユーノを連れて俺の所に一時避難しているから、はやてちゃんはアリサちゃんとすずかちゃん、桃子さんに美由希ちゃんと一緒にオーブンテラスで楽しそうにしている。後はまあ、原作通りの展開だな。

そして、祝賀会が開きとなった時になのはちゃんは弾かれるように後ろを向いた。

ユーノ「どうしたの、なのは？」

なのは「えっ!?! ううん・・・なんでもないよ」

ユーノがなのはちゃんの様子に声を掛けるが、なのはちゃんはそうユーノに言う。

俺はなのはちゃんが目で追っていた先を見た。その先にいたのは、今日のサッカーでキーパーとして活躍した少年だった。

・・・まあ、原作では少年がジュエルシードを持っているのは知ってはいるけど、どの少年かわからんからここは様子見になるか・・・ん？先からチラチラ女の子を見ながら手の中を見てってあの青い石は！？

賢治「・・・なのはちゃん、君の感じたのは気のせいじゃなかったね。あの少年が持っているのがジュエルシードだ」

ユーノ「な、何ですって！？」

俺の言葉にユーノは小声ではあるが驚愕の声を上げた。魔法が使える自分が気付かなかったのもそうだろうが、一般市民が持っているということが大きいだろうな。

それに、あの少年はジュエルシードをあの少女にプレゼントするようだし、同じ年が回収するには極めて難しい・・・

よし、ここは俺に任せなさい！

賢治「よし、ちょっくら回収と行きますかな」

ユーノ「えっ！？で、でもどうやって回収するんですか！？あの子から強引に回収したらあの子の感情で暴走を・・・」

賢治「おいおい、そんな手荒な真似しないって。ちゃんと物々交換をするのさ」

ユーノ・なのは「「・・・物々交換？」」

賢治「まあ見てな」

首を傾げる二人・・・一人と一匹を置いて俺は少年の下へと行った。

賢治「もしもし、ちょっといいかなそこの少年」

少年「ツ・・・はい？」

少年はいざあの少女が待っている公園へ気合を入れて向かおうとした時に俺に声を掛けられてコケかけた。

まあまあ、そう焦らさんなってw

賢治「少年、君はそのポケットにしまった石を、あの女の子にプレゼントするんだろう？」

少年「っ!!!?!?／／／／」

はっはw少年が面白いほど吃驚してるww

賢治「そりゃあ女の子を見た後に掌を見て気合を入れてたら誰でも分かるさ。でもなあ少年、その石も中々奇麗でプレゼントとしては喜ばれるかも知れんが――」

俺はジャケットの右ポケットに手を入れてトレード物を取り出す。

賢治「こっちの方をプレゼントしたほうが、女の子は絶対に喜ぶと思うぞ？」

と言いつつ終わった俺は取り出した箱の蓋を開けて、少年に中身を見せた。

少年「すっげえ……！」

少年は目を見開いてして箱の中身のブローチを見ている。

まあ、これは今朝家を出る時に社員から届いた荷物をそのまま持って歩いている物なんだけど……

うわー、秘書にバレたら折檻ものだな（汗）

賢治「少年、俺は今な、君が持っているその石と同じ石を集めているんだが……君もその石をあの子にプレゼントするつもりでいるから簡単には譲ってくれないだろう？そこでだ。これと交換って

のはどうだ？」

少年「え！？これと交換でいいんですか！？」

あらあら、食い下がるかと思ったけどあっさりと崩落しちゃったよ。

賢治「おう、そのためにこれを見せたんだ。それじゃあ、早速交換して彼女にプレゼントしてきな」

少年「うん！」

よし、トレード完了！

賢治「少年、がんばれよ！」

俺は小声で少年にエールを送った。

少年は最初、顔を赤くして恥ずかしそうにしていたが、はい！と強く頷いて彼女の元へと向かった。

少年を見送っている俺にユーノが走ってきて足を伝って肩に立った。

なのはちゃんはアリサちゃん達に捕まって動けない様子だな。

ユーノ「危なかった・・・もしジュエルシードの存在を見落として

いたら今頃どうなっていたか・・・」

賢治「まあ、確かになのはちゃんが気付かなかったら本当に危なかっただろうな。こいつはお前さんが言う、生き物の『意思』に敏感に、しかも無差別に反応するっていうなら、あの少年が彼女に告白していたら間違いなく暴走していただろう・・・危うく多大な被害と、なのはちゃんの心に大きな傷を付ける所だった。いや、下手したらなのはちゃんの精神が崩壊していたな。お前さんもとんでもない物を地球に持ってきてくれたもんだ」

よし、これで原作ブレイクだ。町はともかく、なのはちゃんの心に大きな傷を付けずに済んだぜ。

・・・しかし、あのブローチをあの子にプレゼントするとしても、見た目があんなに豪華な代物を受け入れるかどうかがちよっと心配だなあ・・・ちよっくら様子を見るとするか！

ユーノ「・・・心配になるなら別の物にすればよかったのに」

聞こえないようにボソつと言ったみたいだが聞こえてるぞ。ユーノよ。

はいやってきました海鳴公園の噴水近くの茂みの中！

少年を追ってやってきたんだけど、見つかってしまったら折角のイベントがおジャンになっちゃうから茂みから少年を探すことにした俺達。

おっと？少年よりも先に例の少女を発見。少女はベンチで少年を待っているようだなあ。

・・・ん？何か向かい側の茂みがガサゴソ動いてるけど、誰か居るのか？

ユーノ「・・・どうやらあそこに居るのは二人のお母さん達みたいですよ？途中で時間差で公園に入っていく二人を見つけて追いかけてきたみたいです」

何でお前さんわかったのっておい、お前何サーチャー使ってたんだよ。

ユーノ「いえ、何となく・・・」

お、少年が到着したか。ふむふむ、さっきのサッカーの話をしてから渡す作戦か。

少年「実は君に渡したいものがあるんだ」

少女「え？」

少年「これを――」

少年は話の区切りをつけた後、少女に俺と交換したブローチを開けて見せた。

少女はそれを見て吃驚している。それはそうさ、贈られてくる物がまさか本格的なブローチとは、小学生では夢にも思わないだろう。

少年「僕は、君の事が好きだ！」

少女「えっ!？」

少年「僕と・・・真剣に、付き合ってくれないか？」

おおっ！少年よ、良く言った！今時面と向かって告白する奴はいないぞ！

しかしなあ、告白には勇気がいるから力むのは仕方ないとして、周りに丸聞こえ・・・あれ？いつの間に結界が？

ユーノ「なんとなく、やっておきましたΣd」

ナイスだ、ユーノ！Σd

おやっ、少女はモジモジしているなあ・・・でもあれは、満更でもないご様子でw

少女「・・・はい！」

おおおめえでええとおおおおお！！

何と言うことだ、何と言うことなんだ！前世界でも生では見たことない純愛な告白を、そしてそれを受け入れる超貴重なシーンに俺は立ち会ってしまったあああああ！

母二人「「おおめえでえとおおう！！！」」

少年・少女「「うわあああいい！！？」」

少年母「さすがあの人の血を受け継いでいるだけのことはあるわ！あなたの告白、あの人が私にしたのと一緒によ！」

どうやら向こうの親二人は少年の告白と全く同じ方法で結ばれたみたいだな。これは初耳だぜ、ていうかあの少年達の名前って何だ？

少女母「ちよっとちよっと、未来の義息子から何を贈られたのか見せてちょうだい！」

といって娘から箱を引ったくる少女母。既に未来の義息子決定か、まだ早いよ御母さん。

少女「ああ！もう、壊さないよ？」

少女母「大丈夫よ、ちょっと見るだけなんだから♪」

少年母「それにしてもこの箱、上等な造りねえ。高かったんじゃない？」

少年「あ、いやそれはさっき『翠屋』を出て直ぐに店に居た男の人が僕の持っていたのと交換してくれたんだ。その人が僕が持っていたのを集めてるから交換してくれて・・・」

少女母「へえ、変わった人がいるのねえ。Σちよっこれっ！？クラジェンタ宝飾部門の最新作じゃない！？」

少年母「ええ！？」

少年・少女「「？」」

新生カップルは母親二人のテンパりに訳の分からないような反応をしているが、母親二人は落ち着いていられない。

何故ならば――――

少年母「あんた、これ誰から貰ってきたのよ!? これ買ったら80万はするわよ!？」

少年・少女「「……うええええええええ!!?」」

「……………」そう、これはクラジエンタ装飾部門の最新作、ダイヤにエメラルド、ルビーをファンダンに使っている代物で、かなりのプレミアが付き半端なく高いのだ。

それでもブローチの大きさが大きなので、ある程度は安い一般人ではローンを組んでも買える品物ではない。

ユーノ「……何か、とてつもなく凄い物と交換したみたいですね?」

賢治「はっはWジュエルシードの暴走による被害に比べれば安いもんよ。それに、新しい家族ができたきっかけに役だったのなら文句なしだ」

さて、次のイベントは何だっけかね?

第十九話 回収と新たな家族（後書き）

感想、アドバイスをお待ちしております！！

第二十話 誤解の解消（前書き）

大ッッッ変お待たせいたしました！！！！！

それでは、どうぞ！！

第二十話 誤解の解消

賢治 side

さて、今日は日曜日。

昨日思い出したんだけど、原作では今日なのはちゃんと兄・恭也はすずかちゃんの家に行くはずなんだけど・・・何故か『翠屋』に全員集合な状態なのよorz

しかもピンク色の髪をした美人さんまでもが参戦してるし・・・この人確か、忍ちゃんの伯母の綺堂 さくらさんじゃね？

まさか裏の者が来るとは思わなかったよ・・・

士郎「・・・これで全員揃った。では、始めるとするか」

忍「黒崎会長、紹介するわ。こちらは私の伯母の 綺堂 さくらです」

さくら「初めまして、綺堂 さくらと申します。クラジエンタジュエルコーポレーションの会長とお話ができる事を大変嬉しく思います」

忍ちゃんが開始と同時に参戦した人、さくらさんを紹介してくれた・・・おいおい、何が大変嬉しく思うだよ。愛想笑いしているけど目が猛禽類の類だぜ。こちらの情報をドンドン奪う勢いがヒシヒ

シと伝わってくるよ・・・

仕方ねえ、まどろっこしいのは好かないからさっさと本題に入るかな。

なのはちゃん達は部屋のほうにいるみたいだから大丈夫だろう。

賢治「ありがとうございます。私の事をご存知の通り、クラジェンタの会長をしております 黒崎 賢治と申します。さて、まどろっこしいのはあまり好きではないので早速本題に入りましょうか」

俺の前置きのない言葉に相手側桃子さん以外は身構えた。

忍「では早速聞かせてもらおうわ。あなたの目的は何？」

賢治「ん？目的？」

俺が話そうとしたのを妨げるように割り込んできた。しかも訳が分からんことを聞いてきたんですけど・・・？

忍「惚けないで！ノエル達の正体に気付いておきながら何も起こさないなんて逆におかしいのよ！いったい何を企んでいるのよ！！」

恭也「し、忍、落ち着け！」

あゝ、そういうことね。別に金に困っている訳じゃないし、ちょ

つかいを出してきたわけじゃないし、人には言えない秘密があると思うんですけど……そこまで怒り狂うことかね？

賢治「……はあ」

忍「何を呆れた顔してみてるのよ！」

賢治「……忍ちゃんが言っている秘密というのは、夜の一族とエーディリヒタイプの自動人形のことかな？」

さくら「っ！？……どうやって、調べたのですか？自動人形と解釈するのは分かりますが、エーディリヒタイプを知っているのは……」

賢治「ええ、知ってますよ。何せウチの社員にも夜の一族は居ますからね」

一同「「……え？」」「」

さくら「……………い、今なんと、おっしゃいましたか？」

賢治「だから、ウチの社員にも夜の一族は数人居るんですよ。もつとも、種族が種族なので本人達は研究室に籠ってますけど。ああそれと、ウチの本社の一部の社員達は夜の一族の事は知ってますからね？」

まあ、彼等の技術力のおかげで試作とはいえ、ヒューマンサイズのゲッターGが生産できたからね。後は俺が力に目覚めれば本物のゲッターGに取り敢えずは近付くかな。

賢治「それに、さくらさんは人狼なのでしょう？」

さくら「っ!？」

士郎「……………何故わかったと、聞いていいかな？」

忍「……………まさか、人狼もクラジエンタに？」

賢治「その通り、ウチの社員が俺に言っていたんですよ。『私達以外にも同じ人狼の匂いができる方が居られる』ってね」

美由希「・・・えっと、クラジエンタに入社して一年間は共通のカリキュラムを受けた後に適正の部門に移すって言ってたけど・・・医療機関や化粧品が未だに群を抜いているのってまさか・・・」

賢治「その通りさ。人狼は主に鼻と耳を生かした部門に行ってるよ。それに医療器具を製作したりね」

さくら「は、ははは・・・必死で一族の秘密がバレないように私達は隠していたというのに、まさかクラジエンタに堂々というなんて・・・」

忍「・・・私達の今までの苦労は一体、何だったのよお」

あれゝ、何かさくらさんはorzになって忍ちゃんを顔を手で覆って泣いてるし・・・なんかカオス？

士郎「なるほど・・・それでクラジエンタ製の保存食やパスタは人氣が高い訳だ」

桃子「ええ、お香や香水の香りはしつこくないのに香りがいいから、ウチでは愛用させて頂いているわ」

賢治「おお、それはありがとうございます。今度新作が出るので、其方をプレゼントいたしますね」

まあ、別の意味でカオスな展開になっちゃったけど、とりあえず誤解と目的は終わったかな？

賢治「ところで桃子さん、はやてちゃんは今も顔を出したりしてますか？」

桃子「ええ、あれからチョコチョコおやつの時間に来るようになったわ。今日はそろそろ来るぐらいかしら・・・」

———カランカラン———

はやて「こんにちは」

桃子「いらっしやい、はやてちゃん」

美由希「あ、はやてちゃんいらっしやい」

タイミングドンピシャではやてちゃんが来店した。

おお、はやてちゃんの表情が段々と活き活きしてきたか・・・よかった。

はやて「あ、賢治さんやっ♪こんにちは」

賢治「ああ、こんにちは」

はやてちゃんは俺の隣まで来て満面の笑顔を向けてくれた・・・
おおふ、これは・・・効くぜっ

思わず頭を撫でてしまったが、はやてちゃんはそれをはにやはに
やとした笑顔に崩れて受け入れてくれた・・・何この生き物、マジ
可愛い・・・

桃子「あらあら♪」

士郎「ふふふ」

さっきまでの空気は何処に行ったのか、今は皆が俺達に暖かい視線を送ってくる。

原作では確か猫姉妹が監視を付けていたし、自分達の計画の邪魔をする奴等は排除してきたような本編でもちよこっと言っていた気がしたから・・・そろそろ何らかのアクションを起こしてくるのかな？

・・・その時は地球で好き勝手してきた事を後悔させてやる。

その後、はやてちゃんは俺の隣でシュークリームをもきゅもきゅと頬袋に貯める勢いで幸せそうに食べていた・・・はやてちゃんから受けた視線、こういっちゃ何だけど、恩人に対する視線とかそういったのじゃない、もっと別なものを感じたなあ。

さくら side

さくら「まったく・・・今日は驚く事ばかりね」

忍「本当よ、夜の一族を知られたからには契約か記憶消去のどちらかをさせるはずがまさか社員に夜の一族がいるだなんて・・・」

本当に、今日は彼と話ができてよかった・・・彼の口ぶりからして自分達にちよっかいを出したら全力で潰すということが分かったから、こちらからは何の保険もかけないで大丈夫ね。

恭也「・・・契約と記憶消去のはしなくていいのか？一族の秘密を知られているんだぞ？」

さくら「その必要はないわ。彼言ってたでしょう？『私達以外にも同じ種族の匂いをする方が居られる』と社員から聞いた』って。自分達一族の絶対の秘密をバラしたりするのは、せいぜいあの馬鹿ぐらいしか居ないわ。それなのに彼は社員から聞いたって事は、社員達が彼に絶対の信頼を寄せているって事よ」

そう、私達一族の秘密を恋人に打ち明けることでも大変危険な事なのに彼に普通に言った。これだけの絶対の信頼を得ているんです

もの・・・今更契約云々なんて必要ないわ。

忍「それに契約や記憶消去を強制すれば、クラジェンタにいる夜の一族はおろか、社員達からも潰されかねないしね」

恭也「・・・確かにそうだな」

これで一安心。寧ろ私達が彼に護られているっていう感じが強いわね。

――とある山の中――

??? 「バルディッシュ、ジュエルシード・・・封印」

バル『sealing』

眩い光を発しながら、ジュエルシードはバルディッシュと呼ばれた杖に封印されて吸収された。

??? 「やった! さっすがあたしのフェイト♪」

フェイト「ありがと、アルフ。でも、まだまだ足りない・・・」

私は母さんのお願いでこの星に散らばったジュエルシードを回収している・・・今回はジュエルシードだけが見つかったから直ぐに回収できた。

次を・・・早く次のジュエルシードを探さないと、母さんに迷惑が掛かってしまう・・・

アルフ「・・・ねえフェイト、今日は思ったよりも早く終わったし、帰って休もう？」

フェイト「ううん、大丈夫だよ。疲れはないからもっと探す」

早く全部集めて、母さんを笑顔にしたい・・・！

ここでは本来起こりえたであろう猫が巨大化する事件が、賢治が介入したことによってなくなり、フェイトは一切の邪魔や被害を出すことなくジュエルシードを封印する事が出来た。

そして、後に彼女は偽りの幸せから真の幸せを手にする事になることを、まだ知らない

第二十話 誤解の解消（後書き）

これだけ時間をかけてこれだけの中身・・・orz

感想、アドバイスをお待ちしております！

第二十一話 賢治の過去と賢治の願い（前書き）

大変お待たせいたしました!!

ですが・・・内容は納得できるものではありませんorz

早くゲッターにさせたい・・・

それでは、どうぞ!!

第二十一話 賢治の過去と賢治の願い

士郎「珈琲のお代わりはあるかい？」

賢治「ああすみません、お願いします」

さてさて、はやてちゃんが来たのを桃子さんはなのはちゃん達に知らせて、原作には無かった上の階へとはやてちゃんは連れて行かれた。

いつの間に増築してたんだこの店・・・マジ謎だよ海鳴市。

まあ、桃子さんがはやてちゃんを抱えているから、はやてちゃんは抵抗できなかったんだけど。

しかし俺は見逃さなかった。はやてちゃんは桃子さんに抱えられた時チャッカリと桃子さんの胸を揉んでにやけていたのを・・・あの子、友達の親にまで手を出すとか、本当に自重しろよ。

士郎「さて、忍ちゃんの用件は終わったようなので今度は俺の番だね」

賢治「ははは、内容は概ね、何故気配に敏感なのかってやつですか？」

恭也「……」

おーおお、自分より強い奴には誰でも警戒はするかもしれんが、

その滲み出してる敵意を隠す事は出来んのかね？だからお前はアホなのだ〜☆

……自分で言ってる気持ち悪い事この上ないな。

賢治「まあ、修行をしていますからね。生まれつき五感が強いのもありますが加えて気配も敏感ですからね」

士郎「ほう？」

実際は、この世界の”黒崎 賢治”は勉強については1を理解すれば10を理解する頭脳と運動神経が抜群という文武両道でチートな身体なんだ。

両親は”賢治”が飛び級で大学に行ってる最中に事故で他界して、当時俺はまだ15歳。

バイトが出来ない年齢だったけど親戚は居らず困ったが、両親の葬式が終わった時に父の会社で古参の人が『貴方の御父上には、私が失業して途方にくれているところを助けてくれた恩があるので、その恩を今君に返したい』と俺を引き取ってくれた。

あのセリフを聞いた時、”賢治”は号泣していたなあ・・・その後、クラジエントを立ち上げたのも父が立ち上げた会社を”賢治”が大学卒業後に引き継いで、古参の人達が力を貸してくれてここまで大きくしたみたいだし。

・・・その古参の人達は、俺がこの世界の賢治と融合する一ヶ月前に皆他界したみたいだな。

なんていうか、俺の都合でゲッター線が用意した器にしても何かストーリーがあるのに横取りした様な気がして、遣り切れないな。

まあ、話しはそれちまったけど、この世界の俺の過去はこんなだな。

桃子「そう・・・そんなことが」

戻ってきた桃子さんが俺にシュークリームを出してくれた。
ありがとうございます！

賢治「修行については、まあ内緒です。それにもう、ウチの社員達は特殊なのはご存知でしょう？他にも色々と問題を抱えている人も数多く居ますから・・・不法に土足で踏み入ってくる輩が今でも居ますが、当時はもっと多かった為に一番上の俺が護らないと、誰も社員達を護れませんからね。そのために心身共に鍛えているというわけです」

さくら「確かに・・・夜の一族など誰も知らないし、その事で国に保護を求めようとも相手にされないわ」

美由希「オマケに緑色の救急車を呼ばれるかもね」

カラカラと美由希ちゃんは苦笑いをする。

まあ、それもそうだね。ちよっと洒落にならんけど（汗）

賢治「まあ、俺がその質問に答えられるのはこれまでです。さて、ではこちらの話・・・というよりもお願いですね」

士郎「君が頼みごとするというのは・・・はやてちゃんのことかな

？」

賢治「ええ、そうです。あの子の今の状況がはっきりと判明しました」

おお、そうかと喜ぶ士郎さんと桃子さん。

他の6人は何のこと？のような表情をしている。

ああそうか、士郎さんと桃子さん以外はこの話をした時は居なかったのか。

俺ははやてちゃんが今どういう状態なのかを改めて全員に話した。士郎さんと桃子さんは知っているが、新たに入った情報もあるからそれも踏まえて話した。

話している途中からみると皆の表情が険しくなっていた。まあ、なるのが普通なんだけどな。

さくら「・・・それで、その引き取り人は今、どうしているの？貴方の事だから、犯人はもう知っているのでしょうか？」

士郎「今のはやてちゃんの現状を見逃すほど、国はそこまで腐ってはいないはずだ。それに『ギル・グレアム』というイギリス人がやっている事は国際問題にも発展する許されない事だ。何故それを世間に公表しない？」

賢治「・・・それをすれば、あの子に災厄が降り注ぐからです」

忍「何ですって？」

今このことを世間に公にすれば、管理局が介入してくるからだ。管理外世界で身内が何仕出かしたのかを調べて証拠隠滅をするためにな。

だが、その被害者であるはやてちゃんを調査されれば闇の書のこととはバレてしまうし、闇の書の主となってしまったはやてちゃんが生きている限り、闇の書は消滅しないと認識されている・・・

今度は本局が『保護』を装って裏ではやてちゃんをモルモットにするか、始末するかどちらだろう。

だから、何としても『闇』を『夜天』に戻さなければならない・

・

それに、俺がどんなに管理局を追っ払って三提督に起訴したとしても、今度は過去に闇の書で大切なものを失った者達が地球に押し寄せてくるといふ最悪の現象が起こりうる。

だから今は現状維持をしなければならない・・・とても歯痒い。

賢治「今手を下す事はできませんが、証拠などはこちらで着々と集めています。ですから、あなた方はあの子と積極的に接して心の氷を溶かしてあげて下さい。あの子の心は一人で平気で居られる様、心が氷を覆ってしまって今の生活が当たり前と錯覚してしまっているんです」

桃子「勿論よ、なのはの友達になってくれたんだもの」

忍「すずかの新しい友達だもの。どんな理由があろうともはやてちゃんを守って見せるわ」

・・・本当、この人達は優しいよ。

前の俺の世界では・・・ここまで眩しい人達はいないに等しいぜ。

賢治「では、俺はそろそろ行きますね。日本政府とイギリス政府、そしてイギリスと日本のクラジエンタが秘密裏に『ギル・グレアム』の居場所を追っています」

まあ、原作通りに辞職をしてイギリスでひっそり暮らそうとしても無駄だ。

既にイギリス政府が奴の所有する土地と権利を押収しているからな・・・俺は、奴がはやてちゃんの所に直に訪れて謝罪し、はやてちゃんが許せば賠償金と監視だけで済ませるが・・・それをせず永久凍結なんざ実行すれば問答無用で”消す”・・・

—————さあ、懺悔せよ 愚かな人形共よ 貴様等が相手にして
いるのは、管理局を上回る武力を持つ クラジエンタだ—————

第二十一話 賢治の過去と賢治の願い（後書き）

原作では確か、猫巨大化事件の次は温泉旅館でしたっけ？

しまった・・・フェイトとなのはのイベントを潰しちゃってたから
どうやって絡ませよう・・・

感想、アドバイスをお待ちしております！！

第二十二話 認識魔法の考察（前書き）

大ツツツツツツ変ッ！遅くなって申し訳ありません！！

やっと更新できました！！

それでは、どうぞ！！

第二十二話 認識魔法の考察

「妙だなあ、忍ちゃんやさくらさんともあろう人達が俺が言っ
つと気付いたって表情をするなんて・・・もしかして、はやてちゃん自体に魔法をかけられてるのか？」

「だとしたらあの時、サッカー少年事件の時にユーノが気付くと思うんだが・・・」

『翠屋』から家に戻った俺はリニスに暗示、または阻害魔法について聞いてみた。

賢治「リニスく、ちと聞きたいことがあるんだが・・・マジかよ」

リニス「はい、何でしょう？」

リニスはラノベ・・・今度は『俺の妹はこんなに可愛くない』を読んでいたのを中断してこっちを向いた。

・・・もう、リニスが何を読んでいるかに突っ込むのはやめよう、個人の自由を尊重するんだ。

賢治「あ、ああ、魔法の中に相手に暗示、または思考を弄る魔法ってあるか？例えば普段なら怪しいと思うのに、その媒体を前にするとその思いが無かったことのようになるとか」

リニス「・・・ええ、ありますよ。認識阻害魔法なら結界で覆われ

た範囲なら阻害する対象を選択すればその結界内では発動しますか？」

賢治「その効果範囲は最大でどれぐらいまでだ？」

リニス「・・・約10キロが限界です。それ以上は魔力がかなり掛かりますから、それなら直接その対象にかけたほうが魔力もさほど多く掛かりません」

賢治「そうか・・・因みに、魔法が使える奴はそれに気付くか？」

リニス「いいえ、普通にしていたら気付きません。探查魔法を使って初めて気付く感じですね」

なるほどね・・・ならば認識阻害魔法を二重にかけりゃあ確かか。はやてちゃんの行動範囲で遠くても図書館だから、10キロ範囲内になるし、学校も休学して一人孤独でいるから友達もおらず、遠くに出かけることもない・・・

クソツタレが・・・二次創作の作者達はただ『ウザイ』で主人公にグレアムや猫姉妹をボコボコにさせたりしてるけど、俺は今実際にこの世界に住んでいるからこれがどれだけ反吐がでることか・・・これはもう救う必要ない気がするんだが・・・はやてちゃんの意志を尊重しよう。

原作ではグレアムを何か許してみたいだし。

さてさて、話は変わるけど月村家で猫巨大化事件を潰しちゃったから、フェイトとなのはちゃんのファースト・コンタクトイベントを潰しちゃったんだよなあ・・・

確か俺が覚えてる限りの時系列では。

- ・思念体の暴走、なのはちゃんの魔法少女化
- ・神社で犬に取り憑き暴走
- ・夜の学校で暴走
- ・サッカー少年による暴走
- ・月村家で猫の願いによる暴走 フェイト初登場
- ・温泉宿で暴走寸前、アルフ初登場
- ・町の中で二人の戦い、暴走して次元震が起こる
- ・KY、及びアースラ初登場
- ・なのはちゃんアースラに搭乗
- ・異星で不死鳥モドキを封印
- ・海上でフェイトが無理矢理暴走させて封印
- ・海上で二人が決戦
- ・プレシアと最終決戦

ざっとこんなもんか。

ん〜？何か前の世界ではwikiにもう一つ事件が載ってた気がするんだが・・・まあいいか。

問題は、どうやって旅館に入ったアルフとなのはちゃんにコンタクトを取らせようかだ。

肝心の月村家でフェイトとコンタクト取らせてないから多分、アルフは絡んでいかないよなあ・・・

マズイなあ、こうなったら旅館の際のジュエルシードは俺は手を出さないようにするか？

「・・・賢治、微弱ですが先日、フェイトの魔力反応を感知しました」

・・・あれか、月村邸の猫巨大化の時か。
微弱なのは大きな魔法を使っていないからか。

「やはり、私が出てフェイトを直接説得・・・」

「いや、駄目だ。お前の気持ちはわかるが、ここでお前が出ればプレシアが地球に何しでかすかわからん。ここは堪えるんだ」

「ですがっ！・・・ッ！」

リニスはそれでも反論しようとしたが、今のプレシアなら目的の為に例え管理外世界でも平気で攻撃する可能性があると思うのだろう。

フェイトの世話役だったリニスの気持ちはわかるが、今ここでフェイトを説得したとしてもフェイトは『母親の為』という子供相手には絶対の暗示にかかっているから、リニスの呼びかけも右から左に流すだろう・・・

身近に常に居るアルフの言葉も聞かないぐらいだから、いくらリニスでも揺らぎはしても説得は無理だろう。

フェイトが欲するのは『母親の願いを叶えて優しかった母親』に戻って貰うこと・・・その為だけにアニメでは自分の身を削ってまでしてあそこまで危険を冒してるんだ。

本当なら俺やリニスが心配していることは起らないと思うんだが、もしもという事がある。

暫くは寂しい思いをさせてしまおうが、アースラ組がやってきた時に本格的な計画を実施だ。

一応三提督には釘を刺しているが、アースラ組はそれを知っていたとしても知らぬ振りで行動するだろうからクラジェンタの恐ろしさをあいつらに見せ付けてからプレシアの事をしなければ、調子に乗って『管理世界の問題は管理局がしてこそ』なんてふざけたことをKYは必ず抜かす・・・あの管理局絶対正義バカなら必ずだ。

それに、向こうはこっちが魔法を使えないからってデシヤバってくるだろうし、一方的に条件を押し付けてくるだろう・・・ならば、奴らをデシヤバラせない様な情報を突き付けるしかない。

となると、管理世界の情報は管理世界の者に調べて貰うしかないな。

俺は自分の仕事部屋に行き、デスクに付いてる端末を操作して管理世界にいる元社員に連絡した。

まだ起きてるかなあ・・・

《ブンツ》

『お久しぶりです会長、お呼びでしょうか？』

「ああ、久しぶりだな。夜遅くにすまないが早急に調べてほしいことがあるんだー」

幸い連絡相手はまだ起きていたから、俺はプレシアに関する情報とリニスから聞いたプレシアが錯乱する前後の出来事、そして管理局の管理外世界での横暴さの調査を頼んだ。

「これらを今週末までに調べ上げてくれ。夜遅くに無茶を言っすまないな」

『何をおっしゃいますか、私は貴方に保護して頂いてから今だ何も返せてません。これぐらいは任せて下さい』

「ありがとう、よろしく頼むよ」

『畏まりました。直ぐに調査致します』

《ブンツ》

これでよし、後はどうやってなのはちゃんとフェイトのお友達イベントを起こすかだなあ・・・

これがないとフェイトが一生心を閉ざしたままになっちまうよ。

「賢治、今の回線は管理世界とのですか？」

リニスが俺の仕事部屋にコーヒーを持って入って来た。

「ん？ああ、ありがとう。前にも言ったけど、ウチは管理世界の難民を保護してるんだ。だけど、ただ保護するんじゃウチは荷物を何時までも背負い込むだけになるから、ウチで働いて貰ってるんだ。中にはウチを独立して、故郷で会社を立ち上げたりしてるのもいるし、ウチでずっと働いてるのも居る」

ウチに留まってる難民達は基本、地球の文化に魅了された人達や、外の世界に出るのを拒む人達が大半だ。

魅了されたのは主にサブカルチャー・・・アニメだね、うん。

他の人達はウチで企業のノウハウを覚えて故郷で会社を立ち上げたり、難民を救う為に活動したりしている。

今俺が連絡していた相手はウチを出て故郷でクラジエンタの支社の社長をしている元社員だ。

あいつは情報収集に元から秀でてるのもあったが、裏とも精通していて新しい情報が直ぐに手に入るから、俺と個人的にパイプを繋げてもらっている。

「そんなことが・・・貴方には本当に恐れ入りますね」

「それほどでもない」

「何処のネタですかそれは？」

リナスがジト目で見てくる・・・このネタはイマイチだったか。

それはさておき、地球でははやてちゃんの方の準備は整ったから、今はフェイトのことを重点的に進めていこうか。

なのはちゃんには悪いけど、やっぱり旅館のジュエルシードは二人で解決して貰おう。

なのはちゃんが魔法に関わってしまったからには色々なトラブルに巻き込まれるのは確実だし、何時もクラジェンタが見てる訳じゃないからある程度は自分で逃げれる程の力は持つて貰わないとな。

まったく、いらんトラブルを持ち込んでくれたもんだぜ、ユーノは。

さてさて、プレシアを説得する材料を見つけて二人には幸せになっってもらわないとな。

第二十二話 認識魔法の考察（後書き）

更新できたのにグダグダですね・・・すみません（涙）

しかし問題はこれからです。

どうしよう・・・旅館偏はキングクリムゾンでいくのか、それともなのは視点オンリーで行くのか・・・

悩みますorz

A・SとStSならもう幾つか出来上がってるんですけどねえ・・・
どうしよう本当に（汗）

感想、アドバイスをお待ちしております！！

第二十三話 温泉と接触と忠告（前書き）

大変お待たせいたしました！

なかなか…無印は進めにくいです…orz

それでは、どうぞ！

第二十三話 温泉と接触と忠告

なのはside

今日は待ちに待った旅行の日!!

海鳴温泉旅館に高町家と月村家とアリサちゃんとユーノ君で一泊二日のお出掛けです!

アリサちゃんの両親はどうしても抜けられない仕事があって行けないみたいで、バニングス家はアリサちゃん一人です。

すずか「温泉楽しみだね、なのはちゃん!」

アリサ「パパとママも一緒に来る筈だったのに…先に約束してたのに…これも全部あいつのせいよ…ブーッ!」

なのは「にゃはは…アリサちゃん、仕方ないよ」

アリサちゃんは朝から今もずっとほっぺをパンパンに膨らませてムスツとしています…何気に可愛いくてユーノ君に頼んでほっぺを潰してもたったらプヒューって音をたてて空気が抜けました。

その後、車内は笑い声が止まらず、顔を赤くして怒ったアリサちゃんはユーノ君の全身撫でくり回してユーノ君はグロッキーです…ユーノ君、君のことは忘れないよ?

アリサちゃんのご両親は先日、なのは達が誘拐されそうになったあの日です。『翠屋』へ急いでアリサちゃんを迎えに行ってバツタリ賢治さんと会ってから積極的にアプローチして、ついに賢治さんが折れたみたいです。

それで賢治さんの会社との共同プロジェクトをバニングス社が主動で始めて今が絶頂期で休む暇がなく、今月まで忙しいみたいです。その事で一緒に旅行が行けなくなったってアリサちゃんはずっとムスッて膨れてます。

あと、はやてちゃんも誘ってみたんだけど、今日は賢治さんと一緒に居るって言ってたからいつものこのメンバーで旅行です！

今日までなのははずっとジュエルシードを集めていたから録に寝てなくて・・・

といっても、戦闘のほとんどは賢治さんが暴走体を一方的にボコボコにしていたから・・・なのははタダ封印するだけだったけど。

・・・賢治さん、アリサちゃんのご両親は今忙しくしてるのに、何時仕事してるんだろう？

賢治「ぶえつくしよい！」

はやて「風邪ですか？ 夏風邪は長引きますよ？」

賢治「んー、そうかな？ 気をつけよう」

その頃、賢治とはやては海鳴公園でリニスが作ってくれた特製シーフードサンドイッチを仲良く草むらに寝っ転がって食べていた。

行儀が悪いから、みんなは真似したらだめだよ？

桃子「へえ、いい感じの旅館じゃない」

車に揺れる事一時間半、山の景色を眺めながら会話を弾ませていると目的地の海鳴旅館に着きました！

竹林に囲まれていて、近くに川が流れてるので夏なのに涼しくて気持ちいいです！

アリサ「わぁ、なのはなのは！あっちに池があるよ！」

すずか「行こう行こう！」

なのは「あ、待ってよ二人ともー！」

アリサちゃんは旅館に着いてから機嫌が直っていつもの元気な姿に戻りました！

今日と明日の二日間、なのはは普通の女の子として休日をごすごす日です！

桃子 side

チェックインを済ませて荷物を置いて、私は士郎さんと一緒に散歩道を歩いている。

竹林に囲まれた散歩道は涼しくて、時々吹く風が気持ちいいわあ。道中歩いていると、徐々に道が広くなって行き、抜けると目の前には川が流れていた。

桃子「いいわねえ」

士郎「ああ、そうだな」

『翠屋』は基本、年中無休だけど、こうして連休の日はお店は若い子達に任せて家族で旅行をするようにしているの・・・

士郎さんが事故で入院して家族がバラバラになりかけてからは、なのはにはずっと寂しい思いをさせてしまったから・・・今はこうして、家族、又は大勢で旅行に行くのだけれど、これであの子の傷が癒えないのはわかってるわ。

でも、だからといって何もしないなんてこと・・・私にはできないわ。

士郎「このまま平和な日々が続けば・・・いいんだがな」

桃子「ええ・・・士郎さんも」

士郎「ん？」

桃子「もう、どこにも行かないで…士郎さんッ」

士郎「……ああ」

私は士郎さんの胸に頭を押し当てながら言った。
もう、あんな思い…したくないからっ

士郎「……『龍』が滅びない限り、その願いは護れないと思っていた」

桃子「そんなっ！ え、思っていた？」

士郎「ああ、『龍』は仁義なんて微塵もないテロ組織だ。そして、その矛先が日本である限り俺の前にまた、必ず現れる可能性があった。だがそれも、そこまで気を張る必要が無くなった…クラジエンタのおかげでな」

そう、あの時…ファイアッセちゃんのチャリティーコンサートを狙った『龍』はクラジエンタに阻止され、本部も滅ぼされた。

最初、士郎さんの後輩さんから聞いた時は耳を疑ったわ。

『龍』を叩いたのはつきり香港警察だと思っていたけど、まさか一企業がだなんて思い付くわけないわ。

でも、私はそんなことはどうでもいい…士郎さんが、家族が無事なら、どうでもいいの。

なのはside

旅館の楽しみは料理もだけど、やっぱり温泉ですよ！

お父さんとお母さんは二人で山道を散歩に行ったので後の皆で温泉に入りました！

はぁ、気持ちよかった。

ユーノ君が何故か必死で逃げようとしていたけど、アリサちゃんがしっかりと捕まえて女湯に連れて行きました。

ユーノ君、オスだからって気にしすぎだよ。

でも結局、アリサちゃんにまたしっかりと捕まったユーノ君はピカピカに洗われました。

すずか「気持ちよかったね」

なのは「広いお風呂は皆で入れるからいいよね」

アリサ「さあて、次は夕食よ！山の幸に海の幸があたり達を待ってるわ！」

アリサちゃん、夕食まであと2時間もあるよ？

それだけでも車の中でお菓子あんなに食べたのにもうお腹空いたの？

??? 「はぁい、そのオチビちゃん達い♪」

三人娘 「「ふえ?」」

三人で温泉から上がって廊下を歩いていると、向かい側からオレンジ色の長い髪、額に赤い石を付けた女の人がこっちにやってきました。

なのはは知らないから二人の知り合いかな、と思って二人の方を見ると、二人は首を横に振りました。

誰だろう?

??? 「ん、あ、君かな? あの時ころを集めてる子は?」

「!?!」

なのは『こ、この人もしかして・・・!?』

ユーノ『うん、ジュエルシードのことを言ってる!』

石と聞いてもパツとしない表情をする二人を置いて、なのはとユーノ君は直ぐになのは達と同じジュエルシードを集めてる人だと気付きました。

だって、なのは達がジュエルシードを集めているのは賢治さん以外知らない筈だし、時空管理局なら必ず名乗るってユーノ君が言ってたから考えられるのはそれしかないの。

??? 「実はね、ウチの可愛い子も同じのを集めてるんだよ。でもねえ、何処を探しても売り切れだったから、よかったら譲ってくれないかな? あ、勿論お金なら払うよ?」

なのは「:すいません、私もあの石を集めてるので:」

そう言って女の人は財布を取り出してましたけど、これって、見間違え? なのは勘違いなのかな?

でもジュエルシードは確かに綺麗だけど、何も知らない人が持っているには危険過ぎるから譲れないし、ユーノ君と集めるって約束したから、ぼかしながら頭を下げた断りました。

??? 「:うーん、そっかあ、そうだよねえ。あれだけ捜しても売り切れのままなんだから、『素直に渡せば見逃してあげたのに、バカだねえ』」

え、念話?

耳から聞こえる声と同じ声の念話が入り、下げた頭を女の人に向けて、なのはにだけ見えるように、怖い笑みをしていました。

??? 『折角あたしがタダじゃなくお金を払ってやるって言うてるのに、あんまりオイタが過ぎるとガブツといくよ?』

「「ッ!？」」

??? 「『今回は忠告だけにしとくけど、次はないからね?』邪魔して悪かったね、ゆっくり楽しみなよ♪」

あの女の人からの念話だったみたいです。

二人に気付かれないうちに表面はにこやかにしていたから、石の事以外は二人には特に何も聞かれなかったからよかったけど…

あの女の人…なんでジュエルシードを集めてるの?

ユーノ「(なのは……)」

結局、夕食の時間になってもあの女の人のが気になって食事の味が分かりませんでした。

??? side

あゝ、極楽極楽♪いいもんだねゝ温泉って♪
おととと、ご主人様に連絡しないと。

??? 『あゝ、もしもしフェイト？こちらアルフ。例の石を集めてる子を見てきたよ？』

フェイト『…そう、どうだった？』

??? 『ぜんぜん、アタシがお金で済ませてあげようとしたのに断られちゃったよ』

フェイト『…そう、それじゃあ今回は、戦闘になりそうだね』

??? 『気にする事ないよ、あたしのご主人様がこんな魔法のない世界で警戒する相手なんかいないって。それよりさ、フェイトもこっちにおいでよ！極楽だよ』

フェイト『…うん、ジュエルシードを封印したらね。こっちももうすぐ特定できそうだからその後でね』

??? 『さっすがアタシのご主人様ッ！絶対だからね！』

フェイト『うん、今夜に落ち合おう、アルフ（・・・）』

アルフ『了解♪』

行動するのは夜なんだから今来ればいいのに…フェイトったら、なんであんなババアのために身を酷にして動くのさ…

リニス…あんたは今、どこにいるのさ…アタシじゃ言う事聞いちゃくれないよ、帰ってきておくれよ・・・ッ

彼女、アルフは自らの主をサポートする為ならどんな手段も選ばない。

しかし、彼女達は知らない……

一言助けを求めれば、例え誰が相手であろうとも共に立ち向かってくれる人がいることを……

一言助けを求めれば、例え相手が世界を司る組織だとしても真っ向から立ち向かってくれる人がいることを……

第二十三話 温泉と接触と忠告（後書き）

次回、やっと戦闘に入ります！

賢治・・・戦闘にだそうかどうか迷うなア・・・でもそろそろゲッター出さないといい加減飽きますよねえ？

感想、アドバイスをお待ちしております！

第二十四話 戦いと…(前書き)

大変お待たせいたしました!!!

今回は頑張って長文を書いたつもりです!

それでは、どうぞ!

第二十四話 戦いと…

ふくむ、先日の夜遅くに魔力反応が起こったとリニスが俺に言っていたけど、方角が丁度温泉街だったから俺は放つといた。

リニスからは「フェイトの魔力反応も出たのに何で行かないのか」って怒られたけど、なのはちゃんのこと、そしてフェイトちゃんとプレシアのことを説明して渋々ながらも納得してくれた。次は確か、街中での戦闘だし、暴走して次元震が起きていたから流石に介入するさ。

ウチの社員が海鳴市以外を調査してくれていて既に7つ、会社に嚴重に封印してある。

多分アニメの時に放映されてない分のジュエルシードだろうし、原作で出てきたのは合計十四個、丁度数が合う。

今のところ、フェイトちゃんが2個、なのはちゃんが4個…あ、旅館での戦闘でなのはちゃんは幾つか持って行かれるんだった…まあ、合計は一緒だからいいか。

それにしても、海鳴公園の海の中にある6つは取つといた方がいいのかなあ？危ないし、フェイトちゃんが無茶するし、プレシアの寿命が縮まるし。

でもそれを俺がしちまうとなのはちゃんとフェイトちゃんとの絆が深まらなくなるし、うーん…

賢治「ん？」

町を適当に散策しながらウンウン唸っていると、前から暗い顔をして俯いて歩くなのはちゃんを見つけた。

こりゃあ、フェイトちゃんに負けたのと学校でアリサちゃんに言

われたのでまいつてるのかな？

賢治「なのはちゃん」

なのは「……………」

真横で話しかけても反応しないとは、こりゃ重症だな。

賢治「おい、なのはちゃん？」

なのは「ッ！？」 け、賢治さん？」

賢治「おお、やっと反応してくれたよ。そんな状態で歩いてると事故に遭っちゃうよ？ 何か有ったのかな？」

なのは「……………」

<ジワッ、ポロポロポロポロ>

賢治「ちょッ！？」 え！？ なのはちゃん！？」

俺の顔を見ると、なのはちゃんの顔が悲しげに歪み出し、目じり

んとの戦いと、後日にアリサちゃんと喧嘩(?)をしたことだった。フェイトちゃんとの戦いの時、彼女の眼からとても悲しい、感情がないのではないかと錯覚するぐらい悲しい眼をしていたと。

その後、フェイトが何故ジュエルシードを集めているのかを今までずっと考えていて、アリサちゃんが声を掛けても上の空でいた。自分を心配しているすずかちゃんとアリサちゃんに心配をかけない様に気にしないでと言ったけど、その事でアリサちゃんが怒り、今日は別々で帰ったと。

…なんか、すごい罪悪感がする(汗)

賢治「なのはちゃん」

なのは「ヒック・・・ふぁい？」

涙目で俺を見上げるなのはちゃん…不謹慎だけど、可愛い。

賢治「なのはちゃんは…そのフェイトちゃんは何故、ジュエルシードを集めているのかが知りたいんだよね？」

なのは「…はい」

賢治「それを知って…どうするのかな？」

なのは「え？」

賢治「そのフェイトちゃんが集めている理由を知って、なのはちゃんはどうしたいのかな？」

なのは「そ、それは…」

なのはちゃんはまさか俺からそんな質問をされんと思っていなかったのか、返答にどもってしまった…多分、フェイトちゃんが昔の自分と重なって見えたのだろう。

俺が覚えている限りでは、しつこいかも知れないが『翠屋』ができたばかりで毎日が忙しくて、美由希ちゃんと恭也も学校が終わったら店の手伝いをしていた為、今より小さい頃のなのはちゃんの相手は、店が終わってからしかできなかった。

だがまもなく、士郎さんがボディーガードの工作中に大事故が起こり、士郎さんが危篤状態だと知らされた時は精神的にも大変だった。

桃子さんは店と病院で忙しく、恭也は自分の力の無さに憤り我武者羅に修行、美由希ちゃんは桃子さんの支えとして学校を時々休みながら店の手伝いをしていた。

それ故に、なのはちゃんはさらに構ってもらえなくなり、自分が何かを手伝おうとすれば『外で遊んできなさい』と返されるばかり。幼いなのはちゃんは『私はいらない子なんだ』『邪魔にならないようにしよう』と、この時期から子供としての心が破損した。

…この辺もまた、矯正しないといけないな。Stsの時にあんなことを起こさせない為に…

まあ、この世界が俺の記憶通りにStsに行けばの話だけど、まずないだろうが、それはおいといて。

賢治「なのはちゃん、君が過去に何があったかは俺は聞かない。だが、相手の事を聞いても答えてくれないなら、先ずは観察…様子を見る必要がある」

なのは「様子…？」

賢治「そう、何でもかんでも聞いたら教えてくれるだなんて思っちゃいけないよ。社会に出れば、知らないことばかりだ。自分の質問に常に答えてくれる人なんていない。だから、自分で探していくしかない…俺は思う」

なのは「……」

なのはちゃんは黙って俺の話に耳を傾けている…上手く伝われば、いいけど。

賢治「その子の様子を見て、情報を集めて自分で見つけた答えが正しいとは限らないにしても、先ずは調べよう。その子が学校に行っていないから集めようがないにしても、戦う時や、立ち止まっている時に観察することは出来るはずだ…そして、自分の覚悟が決まった上で、ぶつかって、分かり合うまでぶつかり合えばいいと思う…なのはちゃん」

なのは「ッ！ はい」

賢治「本来なら、これは子供ではなく大人が解決することだ。だが、君は魔法に関わってしまったからには自分の身を守るぐらいの強さを持たないといけない。今回はその為の試練だと思っていい。いきなり一人では無理な事だから、俺達が可能な限りフォローするか、なのはちゃんはフェイトちゃんとかとことんぶつかり合いなさい」

なのは「…はいっ！」

よかった、なのはちゃんの悲哀な眼が何時もの元気な眼に戻った。俺の言っている事が小学三年の子供に伝わるかどうか心配だったけど…伝わったからよかったよ。

次はアリサちゃん達とのイザコザだけど…まあ、この問題は三人でも解決してるし、俺がおせっかいする必要はないか。

よし、ならば協力を了承してくれた社員を今夜中にこっちに呼び戻すしよう。

近い内に街中でジュエルシードが暴走するはずだから、社員達にはなのはちゃん達が張った結界の上に更に強い結界を張って貰おう。なのはちゃんの覚悟を踏みにじるわけにはいかないし、一度言った事は男として護らないとな。

はやて「あ、賢治さんや♪　ってあれ、なのはちゃんも一緒？」

賢治「ほ？　はやてちゃんか？」

なのは「あ、はやてちゃん！」

あの後、なのはちゃんははやくと一緒にかへ帰っていった。
はやくちゃんも何年ぶりに同い年の子と帰るのがうれしかったの
か、仲良く話しながら帰っていった。

そして、今は夜。俺は記憶を頼りにジュエルシールドがあるであろ
う場所の近くのビルの屋上に居る。

離れた場所にはウチの社員を数人配置させたから、これでいつで
も戦闘が起こっても町には被害は出ない。

<ブンツ>

??? 『会長、全員準備が整いました』

賢治「わかった、手筈通りに頼むな」

??? 『かしこまりました』

<ブンツ>

モニターに出てきたのはウチの社員だった。

これで準備万端だ。後はユーノが結界を張って、なのはちゃん達
がぶつかれば俺の出番だ。

<ピピピッピピッ>

ん？ 俺の電話か…士郎さんからだ。

「もしもし？」

『…夜分遅くにすまない…なのはのことなんだが…』

ああ、やっぱりなのはちゃんが関わっていることが気になるか…
仕方ないさ、親なんだ。

「安心してください、町はクラジエントが責任を持って護り、なのはちゃんは俺が責任を持って送ります」

『……………わかった。娘を、よろしく頼む』

「任せてください。士郎さんは…いえ、士郎さん達は、なのはちゃんが帰った時には何も触れず、普通通りに接してください。説明する時期は、近いうちに必ずやってきます。その際は、俺も必ず同席します」

『……………ああ。くどい様だが、なのはを頼む』

「はい、もちろんです」

<ピッ>

ふう、事情を知っていて自分達は待つことしかできないことが、
いかに歯痒い事か…かあ。

本来なら即効で俺達クラジェンタだけで終わらせる事なんだが、
魔力資質の高いのはちゃんを捉えた管理局がしつこく勧誘してく
るだろう…応じなければ暗部を使ってでものはちゃんを捕まえに
来る。

その為にもなのはちゃんには強くなってもらわないと…ッ

賢治「始まったか…」

俺が意気込んでいる時、禍々しい色をした波が海鳴市を覆うよう
にして広がった。

丁度俺がいる位置から少しした場所ではちゃんとフェイトち
ゃんが空中に浮いているジュエルシードを同時に封印し、地上で浮
いている。

この時点でどっちかが持っていれば暴走しないんだけど、どっちも
譲れないで戦うから暴走するんだよなあ…

フェイトちゃんが動いたと同時に激しい戦闘が始まった。

途中からアルフが乱入して更に戦闘が激しくなった…って、ジュ
エルシード暴走してるし!？

賢治「マジかよ!？」

俺は屋上から跳んでジュエルシードの所へジグザグに飛びながら向かった。

なのはside

夕方、賢治さんから励まされ、はやてちゃんと会って一緒に『翠屋』に向かいました。

賢治さんのお陰でモヤモヤした感情は無くなり、はやてちゃんと一緒に食べた夕御飯の Pasta は特に美味しかったです。

その後、ユーノ君と一緒にはやてちゃんを家の近くまで送ったのは、ジュエルシードを感じてそのまま反応場所に向かいました。場所は今日、なのはが学校帰りに寄り道をした所でした。

ユーノ君が結界を張り、なのはがレイジングハートをセットアップして封印を施す時に、フェイトちゃんも封印を唱えたみたいで同時にジュエルシードに掛かりました。

そして今、なのははフェイトちゃんと空中で対峙しています…

なのは「…あの時は、自己紹介ができなかったね。私は高町 なのは。あなたは？」

フェイト「…フェイト、フェイト・テストロッサ」

先ずはお互いを知るのに自己紹介をしました。

賢治さんが言っていた様に、質問すれば全て返ってくると思わないことと言うのを頭に入れて、話していきます。

なのは「どうして、ジュエルシードを集めているの？」

フェイト「…あなたに、答える必要はない」

賢治さんが言っていた様に、やっぱり答えは返ってきませんでした。

それでも、名前がわかったただけ良かったです、でも、フェイトちゃんはそう答えたと同時になのはにデバイスの切っ先を向けて来ました。

フェイト「ジュエルシードは…もらう…」

なのは「ッ！」

次の瞬間、フェイトちゃんはものすごい速さでなのはに切りかかってきました。

なのははレイジングハートの柄でフェイトちゃんのデバイスの斧の部分を寸でのところで受け止めます。

なのは「私は…ッ私が集めている理由は、ジュエルシードを落としたり人が助けを求めていたからッ！」

フェイト「ッ!？」

なのは「その人が一人で集めれない状態だから、私が手伝える力を持っているからッ！」

フェイト「何をッ!？」

なのははフェイトちゃんを弾き返し、魔力弾を数個形成して飛ばしながら叫びます。

なのは「私がジュエルシードを集めるのは、元の持ち主に返す為に集めているの!!！」

フェイトちゃんはなのはの放った魔力弾を切り落として迫って来ます。

そこに尽かさずなのはがレイジングハートを構えて、照準をフェイトちゃんに合わせます。

なのは「それが、私の集めている理由ッ!!!！」

フェイト「くッ！」

バルディ『S o n i c m o v e ! 』

なのはの台詞と同時に放ったディバインバスターは、フェイトちゃんに逸れることなく向かいました。

フェイトちゃんは高速移動でギリギリ避けましたが、ディバインバスターの衝撃が当たってビルの上に砂煙を上げて落ちました。

それでもフェイトちゃんは素早く体勢を立て直し、なのはに向かつて来ました。

なのは「フェイトちゃんはッ！フェイトちゃんは、何の為にジュエルシードを集めているのッ！？教えてッ！！」

フェイト「私は——」「教える必要はないよフェイト！！」ッ！？

アルフ「そんな温室育ちの小娘に、わざわざフェイトが答える必要はないよッ！」

なのは「アルフさんッ！？」

フェイトが何かを話そうとした時、それを遮るようにアルフさんが狼形態で乱入してきました。

とっさになのはが張ったシールドでアルフさんの突撃を防げましたが、勢いは殺せずなのはは後ろに飛ばされました。

アルフ「フェイト、この子はあたしが抑えるから早くジュエルシー

ドを！！！」

ユーノ「そうはさせない！！」

アルフさんが追撃を掛けて来る時にユーノ君が間に入ってシールドを張ってくれたので、なのはは体勢を立て直せました。

ユーノ「なのは、早くあの子を追って！！」

なのは「う、うん！———えッ！？」

フェイト「なッ！？」

なのはがフェイトちゃんの後を追おうと振り向くと、ジュエルシードが激しく光だし、周りが歪み出しました。それと同時に、地震が起こり始めました。

ユーノ「まずい、暴走している！！」

なのは「ユーノ君、どうすればいいの！？」

ユーノ「こうなったら生半可な力じゃ止まらない！　なのは！　あれを壊して！！」

なのは「えッ！？　そんなことしていいの！？」

ユーノ「ああなったら今度はこの世界が危ない！早く————なッ
！！？」

ユーノ君が突然、ジュエルシードを見て驚いた声を上げたのでどうしたのかと見てみると、そこには黒くて巨大な何かが付んでいた。

その黒い何かは、長い触角を二本生やし、八本の足に沢山の棘を有して、嫌な黒光りを放つ存在……!!?!?!?!?!?!?!

なのは「にやあああああッ！！ゴキブリiiiiiiii
 いいiiiiiiii！！？」

それは、この世界……万国共通で忌み嫌われている通称『ゴキブリ』が、ジュエルシードを取り込んでいました……お尻に見えるあの黄色く太くて長いのはまさか……卵なの！？

第二十四話 戦いと…（後書き）

やってしまいました、『ゴキブリ』憑依…うん、これしか思いつき
ませんでしたorz

感想、アドバイスをお待ちしております！

第二十五話 進化と生命の源の目覚め(前書き)

大変お待たせいたしました！

約1ヶ月振りの更新です！

それでは、どうぞ！

第二十五話 進化と生命の源の目覚め

フエイトside

何：暴走してるジュエルシードを止めようと急いで向かったら、暴走が納まっていった。

でも、そこには歪な物体がジュエルシードの代わりに佇んでいる
：何だろう、見ていてとても嫌な気持ちになる。

なのは「ひひひひひひひひッ！！
ゴキブリイーーーーー
ー！！？」

あの白い子：高町、なのはだっけ？ あの子がああ黒いのを見て泣き叫んでる：でも、何となくわかる気がするの、何故？

すると、あの物体の後に付いている黄色くて、巨大な膜に包まれている物体がボコボコとひとりでに暴れるように動き出した。

そして膜が数箇所破け、黒いのとそっくりの小さいのが、湧き出る様に次々と這い出てくる。

なのは「にやああああああ！！？」 孵化したあああああああ！！
！？」

高町　なのははさっきまでの気合の籠った表情は何処に行ったのか、涙を流しながら叫んでいる。

…でも、見た目が気持ち悪いから同情する私がいる。

賢治 side

ジュエルシードの暴走を感知して近くのビルの屋上まで跳んで来たが、予想外の地獄絵図だ…何故にゴキブリがジュエルシードを取り込んだ？

しかも卵から孵化した小さいゴキブリがありえないぐらい卵から出てきて、その一角をあつという間に黒く埋め尽くした……おお、気持ち悪ッ。

あのデカイゴキブリの目にあたる部分が赤く光り、二本の長い触角がなのはちゃん達に向けられたと同時に子供ゴキブリ達が一齐に駆け出した。

ふゝむ、あの巨大なゴキブリをマザーゴキブリ、孵化したゴキブリをベビーゴキブリと銘銘しようか。

なのは「ひッ！？にゃあああああああああ！！　来ないで来ないで来ないで来ないでええええええええええ！！！」

なのはちゃんは魔力弾を大量に形成してベビーゴキブリの大群に

一心不乱に撃ち込んで行った。

ベビーゴキブリ達はなのはちやんの魔力弾を食らって次々と煙を上げて死んでいく…が、それは頭部にモロで食らった奴だけで、背甲に食らってもプスプスと煙を上げ、足に食らった奴は残っている。足で未だにシャカシャカとなのはちやん達の元に迫っていた…バィオハザードより恐ろしいぜ。

突如、ベビーゴキブリの群れの中から数十匹のベビーゴキブリが翅を拡げて激しく羽ばたかせ、なのはちゃんに弾丸の勢いで迫っていった。

なのは「にやあああ！　にやッ！　にやッ！
にやッ！」

やああああああああああああ！！！！」

レイジ『マ、マスター、落ちていてください！ マスター！！』

なのはちゃんは錯乱してアクセルシューターを二つ形成して計三つのデイバインバスターを連射し、最後の叫びで歪曲するデイバインバスターをレイジングハートから一気に七つ放った。

ぶっちゃけ、スパイラルゲッタービームだ…何気になのはちゃん、

フェイト「くッ！ このッ！！！！」

一方、フェイトちゃんのはちゃんと違い、少々焦りながらも戦術は冷静にこなしていき、フォトンランサーで近付いてきたゴキブリを薙ぎ払っていく。

しかし、しぶとさが世界一醜悪のゴキブリはジュエルシードの力を得て更にしぶとくなり、フェイトちゃんの魔法を食らっても直ぐに体勢を立て直して迫って行く。

魔力弾の火力はなのはちゃんがかさで、その魔力弾を受けても今だ生きているベビーゴキブリだから：フェイトちゃんには分が悪いか。

フェイト「はあああああ！」

フェイトちゃんが一匹のベビーゴキブリに迫って魔力刃で胴体を上下真っ二つにした。

フェイト「やった：ッ！？」

しかし、上半身と下半身に別れたにも関わらず、仰向け状態で今だ足がビクビクッ！カサカサッ！と激しく痙攣を起こしていた。

昆虫は『神経節』という小型の脳を体の各部分に備えている為、真っ二つにしようがバラバラにしようが、しばらくは動く。特にゴキブリはそうだ。

それを見たフェイトちゃんは顔がドンドン青くなっていくのがここから見て良く分かる：

しかし、痙攣では止まらず、カサカサと激しく足を動かしている反動で胴体がグルグルと回転し始めたのだった。

そして、不運にも体験してしまった：ふと自分の左腕に何かが乗ったのを感じ目を向けると、自分の左腕に原型のゴキブリがカサカサと上ってくるあの地獄の不快感を：

フェイト「ひっ…!!? いやあああああああああああああ
あ!」

それを見て全身が震え上がり、滝の汗を流すフェイトちゃんはどうとう悲鳴を上げた。

ゴキブリの乗っている腕を一心不乱に振り回してゴキブリを振り放し、そしてなのはちゃんと一緒に大群に向けて魔力切れになるんじゃないかって勢いでフォトンランサーを乱れ撃ちの如く撃ち込んでいく。

気のせいだろうか、火力が上がっている気がする(汗)

アルフ「こんのッ、あたしのご主人様に近付くんじゃないよ!」

アルフは人間形態で強化した拳を次々とベビーゴキブリ達に叩き込んでいく。

しかし、頭殻が潰されたにも関わらず、ベビーゴキブリはビクビクッと脚と触角が痙攣し、今だ動こうともがく。

アルフ「ひいいッ、薄気味悪いねこいつらはあッ!」

流石のアルフもゴキブリの醜悪さには参るか…俺が飼っていた犬はゴキブリを見つけたら前足で踏みつけて遊んだり、後をチョコチョコと追いかけて楽しんだりしてたけど……

賢治「…ん？」

ユーノ「この、この、この！ ……あれ？」

突然、なのはちゃん達目掛けて駆けていたベビーゴキブリの動きが止まり、マザーゴキブリに向かって駆け出した。

当然、なのはちゃん達女組は胸を撫で下ろしているが、ユーノは様子の変化に怪訝な表情をしている

何だ、何が起ころうとしているんだ？

賢治「んなっ!？」

何があるのかと視線をさらに後方に向けると、驚く事にマザーゴキブリがベビーゴキブリ達をもの凄い勢いで食い始めたのだ。

「「「ひッ!？」」「」」

なのはちゃん達女組はやっと様子の変化に気付き、マザーゴキブリの方を見ると共食いを始めたと思い、口元を押さえて吐き気を堪える。

そんな三人を無視して一心不乱にベビーゴキブリを食らうマザーゴキブリの勢いは止まらず、それに比例してドンドン身体がデカくなっていく。

次第にマザーゴキブリの甲殻が体内の膨張に耐えられなくなったのか輝が入っていき、輝割れた箇所から黒い煙が噴き出ていき、マザーゴキブリの周りを包み出した。

徐々に黒煙が円状に渦巻いてマザーゴキブリを球状に包み込み、黄色い稲光が発生する。

賢治「何だ…徐々に禍々しい気が膨れ上がって行く…？」

今ここで攻撃すれば、逆にこちらが危険な為できない…これ下手したら闇の書の防衛プログラムより禍々しくね？
しかし、何も対策を考えずここで只傍観しているのが間違いだったのかも知れなかった。

【————我々は、大勢であるが故に————】

『『！？』』

何だ、今頭の中に声が…それに今のは…！？

<パリーリーリーリーンッ!!>

強い稲光が球体から発生した時、黒煙が硝子が割れたかのような音を立てて弾け、中から巨大な物体が出てきた。

ソレは、見積もって高さ20m、全長25m、10本の甲虫を思わせる足は顔の両側からパラボラ状に生え、顔には鋭利な角が、腹部は赤く脈立つ光るモノが、後脚には鎌のような2本の脚が……この姿は、まさか……

賢治「マザー……レギオン……だと!?!」

そこには、本来この世界に存在する事が無い固体——マザーレギオンが存在していた。

【――――!?!】

姿を現したマザーレギオンは形容し難い咆哮を上げた後、鋭利な頭部を左右に開けてレギオン・ビュートを発生させ、なのはちゃん達目掛けて振り下ろした。

レギオン・ビュートが迫り寸での所でなのはちゃん達は避けたが、

距離が近かったのはちゃんとフェイトちゃんのバリアジャケットの端が高熱によって焼けた。

なのは「嘘ッ!? バリアジャケットが焼けた!?!」

ユーノ「な、なんだあの化け物は!?!」

アルフ「一体この星はどうなってるんだい! 魔法文化の無い世界に何でこんな化け物に進化するっていうんだい!」

フェイト「くッ!?!」

レギオン・ビュートでなのはちゃん達を叩き落そうと八方から振り回すマザーレギオン。

四人は飛び回って避けるが、いつの間にか一箇所には四人は集められた。

マザーレギオンは触手を戻して顔を固定し、青い光がギュンギュンとエネルギーの様に溜められる。

アルフ「やばいんじゃないのかいあれは!?!」

ユーノ「早く射線上から離れるんだ!?!」

四人は危険を察知して何とか攻撃範囲から逃げようと四方に飛んで駆ける。

エネルギーをチャージし終えたレギオンは、青く野太い光——マ

イクロ波シエルを放った。

その威力は、周囲にプラズマを発生させて青い光から10mは幅が離れている所までもが吹き飛ぶ。

<ゴオオオオオオオオオオツ!!!>

なのは「きやあああああああ!!!」

フェイト「うあああああああ!!!」

ユーノ「なのは!」

アルフ「フェイトオ!!!」

なのはちゃんとフェイトちゃんは下方に逃げた為、マザーレギオンのマイクロ波シエルによって破壊された建物の瓦礫などがなのはちゃんとフェイトちゃんに直撃した。

いかにバリアジャケットを纏っているからといって、あの衝撃から繰り出される瓦礫の勢いは並大抵のものではない。

もちろん俺にも飛来して来てるので、いつもの如く避けながらなのはちゃん達を回収してユーノのいるビルの屋上に降り立った。

賢治「ユーノ、三人と一緒に結界外に転移しろ!」

ユーノ「え、賢治さん!? どうしてここに!?」

突然自分の横に現れた俺にびっくりしているが、今はそんな事を話している時ではない。

賢治「そんなことはどうでもいい！ 早く脱出しろ！ 外にはウチの社員が待機している！」

ユーノ「け、賢治さんは！？」

賢治「俺なら大丈夫だ！ 手ならちゃんとある！」

マザーレギオンはレギオン・ビュートを俺に向かって振り下ろして来た。

俺は寸での所でなのはちゃんとフェイトちゃんを脇に抱えて跳び避けるが、ビルが叩き割られると共に熱でコンクリートと剥き出しの鉄筋が融解している。

賢治「アレは俺に任せて早くしろ！ お前達がいると巻き込む可能性が高いんだ！」

ユーノ「わ、わかりました！」

ユーノは転移魔法を自分達に発動して結界の外へと避難した。

賢治「よし。さて…マザーレギオンよ、何故お前がこの世界に潜ん

でいたのかは知らんが、お前を野放しにすれば海鳴市がメチャクチャになるんでな。ここで仕留めさせてもらおう！」

マザーレギオンは残った俺に的を絞ったのか、身体ごと俺に向く。

さあ…俺の新しい力を見せてやる！

賢治「チエエエエンジッ！ ゲッタアアアーーーーー！！！」

俺を中心に緑色の絶大なエネルギーが爆発的に発生して渦巻く。

そのエネルギーが危険と察知したのか、マザーレギオンはマイクロ波シエルをエネルギーの渦に打ち込むが、奔流に弾かれて自分に直撃し、仰向けに倒れこむ。

ドンドン緑色のエネルギーは大きく膨張していき、エネルギーが有頂天へと達した時、緑色のエネルギーが大きくはじけた。

上半身は赤と白のポロシャツに変わり、背中には赤いマントと肩に黄色い留め具が形成され、青いジーンズは黄色と白に色が変わり、膝から足首まで保護するように筒状に四本の緑色のラインが形成され、腹部には白いベルトが形成される。

両腕には赤く筒状の籠手で覆われ、鮫の歯を思わせる刃が両腕に形成され、両腕に緑色のラインが四本ずつ描かれる。

最後に赤いヘッドギアが顔に形成され、額に翡翠の宝石が光り輝く。

そう、その姿はまるで、初代ゲッター1!!

賢治「モードッ！ゲッター・1!!　よっしやああー!!」

思った通り、俺の体にゲッター線が流れているからゲッターになれると思い、ゲッター線を放出して頭の中でゲッターロボを思い浮かべたら、完全ではないにしても部分的に変身はできた！

賢治「むっ！」

マザーレギオンは体勢を立て直し、赤いマントを靡かせて宙を浮く俺にレギオン・ビュートを突き伸ばしてきた。

賢治「ゲッターアアア・トマホーオオオオク!!!」

俺は左肩の黄色い止め具から突き出た柄を右手で掴み、引き抜く！
引き抜いた先に棍棒と片振りの霞仕上げの斧の刃が形成される！

賢治「せりやあ！」

<ザシュッ!>

【――!?!】

<シユシユシユシユシユシユシユッ!?!>

賢治「舐めるなああ! 蒼竜連牙斬!」

一本斬られたことに驚愕したのか、今度はレギオン・ビュートを10本近く飛ばしてきたが、全てゲッタートマホークで縦横無尽に駆けて俊足に切り落としていく!

賢治「トマホーク・ブーウウメラン!?!」

<シユンシユンシユンシユンッ! ズバツズバツ!?!>

【――!?!】

マザーレギオンはレギオン・ビュートを全て斬られた痛みには怯んで数歩後退するが、俺が追い討ちを掛けるように更に引き抜いたゲッタートマホーク、計二本がマザーレギオンの後両脚を切断し、重い音を立てて地に伏した。

賢治「ち、流石にまだゲッター線を扱えないか…」

戻ってきたゲッタートマホークを掴み刃を見ると、刃が欠けて使い物にならなくなっていた。

いくら自分の身体にゲッター線が流れているからと言って、いきなり全てをコントロールするのは出来ないか。

【―――！！】

パラボラ状に生えている脚を使って上体を上げてこっちを向いているマザーレギオンは、憤怒と思わせる咆哮を上げて頭の角を開き、エネルギーをチャージし始めた。

どうやら向こうはこれで決着をつけるようだ。

賢治「ならばこれで終わらせようか、マザーレギオン！！」

俺はゲッター線を体内で増幅させ、腹部に集中する。
すると、ベルトが左右に開き、ピンク色の光が溢れ出す。

【――――！！】

賢治「ゲッターアアアアア・ビイイイイム！！」

レギオンがマイクロ波シエルを放つと同時に、俺のベルトからピンク色のエネルギー砲、ゲッタービームが放たれる。

野太さはレギオンの方が十倍は上、勝敗は目に見えている様に見えるが：俺のゲッタービームとマイクロ波シエルがぶつかり合った瞬間、マイクロ波シエルが四散する。

【――――！！？】

ゲッタービームはマイクロ波シエルを四散させながらマザーレギオンに迫って行き、マザーレギオンの頭だけでなく、胴体も貫通した。

【――!?――……】

<ズウウウン……>

重い音を立てて地に又伏したマザーレギオン。

口が開閉していたが、やがて動きが止まり、瞳の輝きも消えてマザーレギオン全体に黒煙が沸き立つ。

少しして黒煙が晴れ、マザーレギオンがいた所には、粉々になった一匹のゴキブリと、魔力が空になったジュエルシードがあった。

賢治「終わったか……しかし、この惨劇は果たして結界内だけというので終わるのか？」

上空から街を見下ろすと、道路はメチャクチャ、建物は倒壊したりと、破壊の限りを尽くされていた。

……くそ、管理局に絶対復興費を請求してやる!!

俺はジュエルシードを回収して予め用意してあった転移用の魔方阵を道路に広げてその上に立ち、結界の外へと出た。

第二十五話 進化と生命の源の目覚め（後書き）

さあ、やってしまいました…ガメラ2の敵ボス『マザーレギオン』。

これに思い立ったのは、久しぶりにゴジラが観たくなって近くのゲオに借りに行った時、ふとガメラが目に入り手にとって見ると……このボス使えるんじゃないかね？と思って使わせてもらいました。

ぶっちゃけ、ゴキブリだけだったらどうやって收拾できるか相当悩んでましたし（汗）

そして、やっとゲッター出せました！

ゲッターを擬人化したような状態ですが、ゲッター線を纏っているので相当強いですww

感想、アドバイスをお待ちしております！

第二十六話 次元の守護者 地球に向かう（前書き）

お待たせいたしました！

アースラ組初登場です！！

それでは、どうぞ！

第二十六話 次元の守護者、地球に向かう

ユーノ side

ユーノ「…あれ、ここ…外だよね？」

賢治さんに言われて三人を連れて結界の外に転移したら、まだ結界の中に居た。

おかしいと思い、転移前の場所を見ると、ちゃんと僕が張った結界がある…僕が張った結界の上に結界を？ どういうこと？

??? 「大丈夫ですか？」

ユーノ「えッ!？」

声が出た方を振り向くと、一人の制服を着た女性が毛布とドリックを持ってやってきた。

他にももう一人同じ服を着た女性と、それと似た男性服を着た男性が複数居た。

何で…ここ、結界の中だよ？ 何で魔法文化のない人が普通に結界内にいるの？

アルフ「フェイトーローツ！」

アルフさんの叫びが聞こえてそっちを向くと、アルフさんに抱えられたフェイトが顔を青くして汗を滝のように流しながら斃されていた。

かく言うなのはも、いつの間にやって来た別の女性社員さんに介抱されているけど、時々、『黒光りが…』『シャカシャカ…いやあ…』とか言っている。

…：うん、あの虫アーミーは確かにトラウマになるね。

倒しても倒しても起き上がってくる虫…僕は比較的虫は耐性があるけど、あれは厳しかった…

…：「…よほどキタんでしょうね…私も中をこちらで見えていたが、あれは私も堪えました…」

ユーノ「ツて、こんな悠長にしている場合じゃない！ それよりも賢治さんが！」

…：「ああ、会長なら無事ですよ」

…：「会長はあれぐらいではやられません。むしろ、ウォーミング・アップになる程度ですね」

ユーノ「え？ それはどういう……な、なんだこのエネルギーは！？」

突然、結界の中から膨大なエネルギーを感じた。

あの巨大化したゴキブリも相当な力だったけど、別の…言葉に表現できない、膨大な力を感じる。

それに、あの巨大化したゴキブリの力が徐々に弱まって……なッ！？

ユーノ「ジュエルシードの反応が…消えた？」

???「どうやら終わったようですね。では、こちらのお嬢様方を治療いたしましょう」

アルフ「くっ、アタシのご主人様に近付くんじゃないよ！」

???「無理しないで下さい、いくら使い魔だからと言ってもあなたは回復系の魔法は使えないタイプでしょう？ 私達が彼女を治療いたしますから、そう警戒しないで下さい」

アルフさんがフェイトを護る様に抱え、近寄ってきた女性社員さんに牙を剥く。

でも、女性社員さんが言うのももつともだ。アルフさんは見た感じ、戦闘中に補佐をするタイプの使い魔だから回復系統はせいぜい傷を治す程度だろう。

<ブーーン>

賢治「ふゝ、一丁上がりだ」

ユーノ「け、賢治…さん？」

賢治「ん？ どうしたユーノ？」

ユーノ「その姿は…一体…？」

アルフさんと女性社員さんのやり取りに僕が入ろうとすると、今アルフさんとやり取りをしている女性社員さんのすぐ横に魔方陣が展開され、そこから賢治さんが現れた…見たことのない、バリアジヤケットを纏って…

あんな膨大なエネルギーを感じたのに、賢治さんが今身に纏っているのはバリアジヤケットに見えるのに、全く魔法の気配がなく、あの膨大なエネルギーを感じる…こんなのは初めてだ。

賢治「ああ、これが俺の力の一部だ。全てを出すにはまだ俺はコントロールはできないからな…さてと」

アルフ「な、何さ！ 近付くんじゃないよ！」

賢治さんがアルフさんに振り向くと、アルフさんは賢治さんに髪の毛を逆立たせて威嚇をするが、賢治さんはどこ吹く風の如く平然としている。

賢治「安心しろ、俺達クラジェンタはお前達を捕まえる為に来たわけじゃない」

アルフ「信用できないね！ あんた達みたいに魔法文化のないこの星の人間が、結界なんか張れるわけないだろ！ 何が目的なのさ！」

賢治「おいおい、お前達が壊してくれた街を修復しているのは俺達だぞ？ 本来ならこの星、強いていうならこの国、日本の裁判を受けて刑務所の中に行かなきゃならないのを俺達が黙ってやってんだ。暴れないで大人しくしてろって」

いやいや賢治さん、論点はそこじゃない気がします…それより、あれだけの被害で牢屋行きだけで終わるの？

??? 「会長…」

賢治「ん？どうした？」

??? 「それが————」

賢治さんが男性社員と何かを話しているけど…男性社員さんの話を聞いていくと賢治さんの顔が険しくなった…何があったか気になったけど、驚くべきことを賢治さんが口にした。

賢治「そうか…もう来たのか」

———時空管理局が

次元空間——アースラ艦内

辺りが言葉では言い表せない奇妙な歪みの空間。

その空間の中を往く船——次元航行艦【アースラ】があった。
その船の上座に座る長い緑色の髪を後頭部で結っている女性が、
難しい顔をしていた。

??? 「お疲れ様ですリンディ艦長、お茶をお持ちいたしました」

リンディ 「ありがとう、エイミィ」

エイミィ 「それにしても、任務が終わってまた任務、いい加減嫌になりますねえ」

艦長のリンディにお茶を運んできた赤いくせつ毛を短く整えてる
女性局員『エイミィ』が、ここ最近多忙なことに不満をさらけ出す。

リンディ「ぼやかないのエイミー。でもここ最近、犯罪者が活発化して通報が掛かりっぱなし、駆け付けたとしても既に終息に近かった…人手不足が出てるわね」

エイミー「そうですねえ…管理世界が増えて人手が足りないなんて、私達の負担がドンドン増えて行くばかり…この前の休みは何時だったかしら…はあ」

リンディ「私が出れば早い話しなんだけど、立場上この艦から離れるわけには行かないから、クロノには任せっぱなしね」

クロノ「ご心配なく、艦長の代わりに犯人を拘束する。そのための僕ですから」

艦内でもバリアジャケットを纏っているリンディの一人息子、クロノは待機中のデバイス【S2U】をリンディに掲げて言い、S2Uは呼応するように光った。

リンディ「それにしても…この第97管理外世界から次元震が一時的だけど、発生したのがあやしいわ」

エイミー「ロストログアでしたら、管理外世界に稀にありますけど…その世界の人が持っていたら回収は難しいですしねえ…」

クロノ「だがロストログアが発動すれば、次元世界が崩壊する恐れがあるんだ。多少強引であっても、僕達管理局が厳重に封印して保管しなければいけない。管理局は次元世界を守る為に存在する司法機関だ」

リンディ「…クロノ」

クロノ「はい」

リンディ「私達管理局は確かに次元を護るための組織だけど、所詮は人が組織しているだけ。自分達が世界の絶対正義だなんて勘違い、犯しては駄目よ？」

クロノ「わかってます。その為にも僕達管理局は犯罪者を次元世界が納得する公平な裁判にかけています」

リンディ「……………」

リンディは自分の息子に危惧している事がある。

若干14歳で執務官になった自分の息子は確かに優秀で、正しく管理局の鏡である。

しかし、それに拍車をかけて些か高圧的になり、他の局員との間で衝突が起こっていると耳にした。

リンディはそれから毎日の様に、耳に蛸が出来るぐらい自分達は絶対正義ではないとクロノに言い聞かせているが、それが直る感じが無く、逆に正義の意味を間違えて解釈している気がする…

クロノ「それよりも、今回の次元震元である第97管理外世界【地球】…ここには一体何があるんですか？」

リンディ「確かに…次元震が発動して僅か20秒…止まるにしても、魔法がない世界でこれだけの時間は早過ぎないかしら？」

クロノ「……………」

確かに、魔法文化のない世界でロストログアの暴走を止める事は不可能に近い：質量兵器と投入して破壊できたとしても、時間が掛かる。

仮に、魔法文化のない世界で魔法を知られてしまったら、その世界のバランスが崩れてしまう。

エイミィ「では、艦長は魔法を使える何かがある？ 関わっている？」

リンディ「ええ、次元震が止まって暫くしてから別のエネルギーを感じたわ：アースラのコンピュータには感知できなかったのに私達に感知できたっていう事が気になるわ」

巡航を終えて本局に帰艦する最中、次元震が起こり急いでアースラは次元震元に向かう途中、アースラのコンピュータには掛からなかった膨大なエネルギーを、アースラクルーは感じ取った。

それも、只なんとなくではなく、はっきりと、全身で感じ取った膨大なエネルギー。

言葉ではこれだけしか言い表せないが、全身の毛穴から汗が流れる程のエネルギーだ。

もし、もしこのエネルギーを悪用されれば、次元世界は確実に崩壊するだろう。

クロノ「はい、あの膨大な力は：危険です。僕達管理局が発生元を回収しなければ、また大きな被害が出ます」

リンディ「ええ、これよりアースラは、次元震を観測した第97管理外世界【地球】に向かいます！」

しかし、アースラのクルーは忘れていた。

地球には、管理局が敵に回してはいけない巨大な組織が存在することを…

そして、自分達の軽薄な行動により、新たな争いの火種となることを…

賢治 side

なのは「うう…むう…にゃあッ!? あ、あれ…ここどこ?」

暴れるアルフを適当に手なずけてフェイトちゃんを社員に治療させている間に、なのはちゃんが飛び起きた。

賢治「やあ、なのはちゃん。おはよう」

なのは「あ、おはようございます…じゃなくて! ゴキブリ! ゴキブリ!!!」

賢治「まあ、落ち着きなさいなのはちゃん。俺が終わらせたから」

なのは「ふえ？ あれ…賢治さん、それってバリアジャケット…ですか？」

賢治「いや、これはまた別だ。まあ、これも俺の力の一部と思ってくれ」

なのはちゃんが目覚めて俺が目覚めの挨拶をすると、なのはちゃんも釣られてした。

直ぐに否定してからゴキブリを探す姿と、居なくなった事に安堵する姿…この時期の子供は忙しいけど可愛いなあ。

…おい、誰だ今ロリコン言ったのは…ちよいとこっちにK O
I Y A?

アルフ「ふう、美味かった…ところでアンタさ」

賢治「ん？」

俺が恐らく暴れるであろうアルフを手なずける為に、保温ボックスに持ってきたスペアリブを食べ終えたアルフが俺に話しかけてきた。 うん、骨も食べるとは…流石は狼。

てか、『御主人様第一イイ』ってキャラが肉に負けるってのはいかんだろう。

アルフ「アンタ…管理局と敵対しているのかい？　これだけの結果を張れる組織が管理外世界にいるってのが腑に落ちないんだけど」

賢治「……………」

ユーノ「賢治…さん？　（あれ、何か、社員さん達の雰囲気は…）」

敵対…か。

ウチの社員は確かに管理局の勝手な行動によって将来を奪われたり、巻き添えを喰らって生くる場を奪われたりと、何かと深い関わりがある。

「敵対は…してはいない。だが…」

————ウチに手を出して来たら、只では済まさん————

その時、賢治の言葉を目を見ながら聞いたユーノとアルフは、背筋が凍るような感覚を感じたと言う…

第二十六話 次元の守護者 地球に向かう（後書き）

いかがだったでしょうか：アルフの口調、こんなので合っています？

感想、アドバイスをお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5146/>

魔法少女リリカルなのは ゲッター線に導かれし者

2011年9月26日00時39分発行